

地域交流センター年報

令和3年度

VOL.24



三重県立看護大学
地域交流センター

巻頭言

日頃より、三重県立看護大学地域交流センターの活動にご理解、ご支援賜り、厚く御礼申し上げます。地域交流センター年報令和3年度第24号の発行にあたりましてご挨拶申し上げます。

昨年度、第4期生の修了をもって認定看護師教育課程「認知症看護」を閉講しましたが、修了生全員が令和3年度認定看護師認定審査に合格し、県内の認知症看護認定看護師は59名となりました。継続的に認知症看護認定看護師を輩出することができましたのも関係諸機関、関係者の皆様のご尽力・ご支援のお蔭と感謝いたしております。今年度、新規開設を目指して準備を進めておりました認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」も令和4年度に開講する運びとなりました。引き続き、ご支援のほどお願い申し上げます。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、地域交流センター事業もいくつか中止や延期を余儀なくされましたが、大学のリモート環境が整うなか、対面とオンラインの併用によるハイブリッド方式での受講形態を導入することにより、昨年度1回に留まった「公開講座」も当初の計画通り年3回開催することができました。今後も開催方法・内容、受講形態等を工夫し、県民の皆様のニーズに応じてまいりたいと思います。

「みかん大出前講座」、「みかん大リクエスト講座」も、地域に出向くことが困難な時期もありましたが、依頼元の担当者の皆様と調整しつつ、開催時期の再検討、感染防止対策の徹底、リモートでの講座開催などに取り組み、好評を得ることができました。

今年度の県受託事業のなかでも「みえるみんなのナースセンター事業」は、県民参加型予算「みえなでつくろかみえの予算（みんつく予算）2021」に本学教員が提案した結果、受託に至った事業でした。伊勢市といなべ市の関係者の皆様のご協力のもと、地域住民のボランティア活動とリンクさせつつ、「暮らしの保健室&よりみちカフェ」、「住民とともに作り上げる研修会」、「感染予防のための啓発」等に取り組み、第3期中期計画の「県民のヘルスリテラシー向上」、「看護職者の能力向上」に資する活動を展開できましたことに感謝申し上げます。

令和3年度は第3期中期目標期間の初年度であり、年度評価結果を踏まえつつ、引き続き、地域社会との連携・協働を深め、地域貢献活動の一層の充実を図ってまいりたいと存じます。

令和4年3月

地域交流センター長
永見桂子

目 次

・ 巻頭言

I. 教員提案事業

1. 看護職者に向けた取り組み(みえ保健・看護力向上支援事業)

- 1) 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪! 1
- 2) 実践につながるフィジカルアセスメント 3
- 3) 認知症看護認定看護師(DCN) セミナー 5
- 4) Brush up! 急性期看護 9
- 5) 新任期保健師の災害時における公衆衛生看護活動支援事業 10
- 6) 看護職者を支援する相談窓口事業 12
- 7) 心電図を読もう! 14
- 8) 看工連携ものづくりシーズ発掘 16

2. 県民に向けた取り組み(県民のヘルスリテラシー向上支援事業)

- 1) 子ども達に「自分のからだ」を伝える事業 19
- 2) いきいき体操と健康的な肌づくり 23
- 3) よりみちカフェ 25
- 4) 災害時に母子の命を守る工夫を考えよう 27
- 5) 対話による探Qカフェ 29
- 6) 災害に備えよう 31
- 7) みかん大「暮らしの保健室」 34
- 8) Re-mamma Café (リマンマ カフェ) 37
- 9) みかん大バトミントン教室(中級編) 38
- 10) みかん大バリスタ for 認知症カフェ 40
- 11) 児童英語教え方講座 42
- 12) 英米文学作品を読もう 43
- 13) 手洗いチェックしてみませんか? 44
- 14) 医療的ケア児と家族のピアネット支援 45
- 15) みかん大もの忘れ相談 48
- 16) 社会的養育が必要な子どもを育てる家族の交流支援事業 49

II. 卒業生支援事業

- 1. 卒業生支援プロジェクト 51
- 2. 卒業生のきずなプロジェクト 54

Ⅲ. 受託事業

1. 三重県新人助産師合同研修	57
2. 助産師（中堅者）研修	61
3. 三重県認知症対応力向上研修	65
4. 母子保健体制構築アドバイザー事業	69
5. 看護職員等における感染管理実践能力向上事業	72
6. みえるみんなのナースセンター事業	76

Ⅳ. リカレント教育

1. 認定看護師フォローアップ研修	81
-------------------	----

Ⅴ. 地域交流センター企画事業

1. 講師派遣	
1) みかん大出前講座	83
2) みかん大リクエスト講座	87
2. 看護研究支援	
1) 看護研究 S E E D	91
2) 看護研究エッセンス	97
3) ハウツー看護研究	99
4) その他の看護研究支援	103
3. 公開講座	109

Ⅵ. 連携

1. 連携協力協定	113
2. 県内病院等看護管理者意見交換会	114
3. 人事交流教員支援	118

その他

1. 情報発信・広報活動	119
2. [資料] 各種講座案内と申込書	123

・編集後記

I . 教員提案事業

1 . 看護職者に向けた取り組み

1) 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪！

担当者：齋藤真、大川明子、大西範和、大平肇子、犬飼さゆり、長谷川智之、市川陽子、岡根利津

【事業要旨】

本事業は、地域の医療機関と連携して看護実践に便利で役立つ用品の開発を目的としている。本学教員が県内の各医療施設のスタッフと看護における困りごとを話題に発明ブレインストーミングを行い、知的財産となり得る解決策（シーズ）を発掘する。

発明ブレインストーミングで取り上げられた内容は、知的財産として成立するようであれば試作を行うとともに、臨床への応用を想定した研究としてデータを収集する。ここで行われた研究は、各医療機関の院内研究として活用することも視野に入れている。

【地域貢献のポイント】

医工連携という名称の下に活動している例は多々あるが、看工連携としての活動はほとんどない。当然のことながら地域の医療施設の看護部が知財を保有し、それを有効に活用している例は皆無である。特に地方の医療機関を活性化する手段のひとつとして、知財発掘とその有効活用をすることが地域貢献である。

また看護系の県立大学として、県内の医療機関の発展に寄与できることは地域貢献として価値の高いことである。

【昨年度からの課題】

新型コロナウイルス感染の影響がなくなり次第、各医療機関に出向いて発明ブレインストーミング等を開催することができるよう準備を進める。

I. 活動計画

<重点課題>

地域の医療機関に「知的財産」の必要性を認識してもらう。また「看工連携」という概念を広める。

<数値目標>

年間5件程度の医療機関に参加してもらうことを目標とする。

II. 活動の結果と評価

<結果>

令和元年度に3病院を会場として発明ブレインストーミングを開催した。本学の教員が各病院で会の進行をリードし、多くの看護師の参加を得て活発な話し合いを行った。各施設における看護業務の困りごとや悩みごとを全員で共有し、解決策を考えた。令和2年度以降は、新型コロナウイルス感染拡大のため、事業を停止している。感染の影響が落ち着いた時点で、各医療施設において看工連携における発明ブレインストーミングを再開する予定である。

<評価>

令和元年度の実施結果から、「難しい内容を想像していたがそうではなかった」、「現場の困りごとを共有していくことの重要性を認識した」、「知財への関心が高まった」などと前向きな意見が得られた。

さらに発明ブレインストーミングから出たアイデアを、各病院の看護師の「院内研究」へ発展させることを中期的な目標とし、看護師の勤労意欲の向上を目指している。

Ⅲ. 今後の課題

各施設で実施された発明ブレインストーミングから、知財になりうる内容の検討および看護研究への応用の支援を行い、県内の看護職者に対する看工連携の概念を広める方策を検討する。

2) 実践につながるフィジカルアセスメント

担当者：岡根利津

【事業要旨】

コメディカルを対象として、実践につながるフィジカルアセスメント能力を身につけることを目標とし研修を開催する。チーム医療をおこなう上で必要となる基礎的なフィジカルアセスメントに関する知識や技術について、認定看護師および呼吸療法士の資格を有する多職種の講師が複数で担当し、講義やグループワーク、演習などを取り入れながら、チームアプローチの視点をふまえた学びにつなげる。

【地域貢献のポイント】

多くの施設においてフィジカルアセスメント教育は行われているが、三重県では認定看護師や呼吸療法士等の有資格者は偏在しており、教育の機会や内容等は様々な現状である。加えて、フィジカルアセスメントに関する研修が県内で開催される機会は少なく、施設外で学習できる機会も少ない。本研修の開催により、三重県内で学習できる機会を提供でき、さらに多職種の有資格者が講師を担うことで他職種のアセスメントの視点も学ぶことができる。本研修により、個人のアセスメント能力の向上および多職種間の共通認識が促進され、チーム医療の質の向上につながると考える。

【昨年度からの課題】

昨年度は、COVID-19の感染拡大の影響を受け、研修会の開催直前に中止となった。そのため、オンラインなど感染状況下においても実施可能な研修方法について検討することが課題であった。

I. 活動計画

<数値目標>参加人数：20人以上（オンラインの場合）、50人以上（対面の場合）

<実施計画>昨年度計画した研修内容を、オンラインで実施できるよう企画した。

- 日時：令和3年10月23日（土）13：00～16：40 ZOOMによるオンライン開催
- プログラム：1、早期離床とはどんなこと!!
2、早期離床のためのフィジカルアセスメントとリスク管理
3、実践！早期離床
4、ワークショップ -アセスメントからプランニングまで-

II. 活動の結果と評価

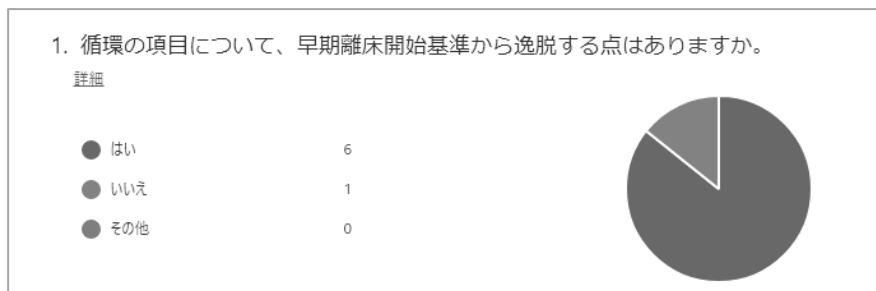
<結果>

1. 参加者：9名 看護師：3名、理学療法士：6名

2. 研修内容

今年度、初めてのオンライン研修の開催であり、参加者との双方向の意思疎通を図ることや主体的な参加を促すことを目的として、Microsoft Formsを活用して研

修を進めた。プログラム 1、2 の講義の内容に基づきプログラム 3、4 では個人ワークを取り入れ、知識を実践につなげることができるよう構成した。個人ワークでは、下記のように参加者の Forms の結果を画面共有しながら進めた。



図：画面共有した Forms の結果（一部抜粋）

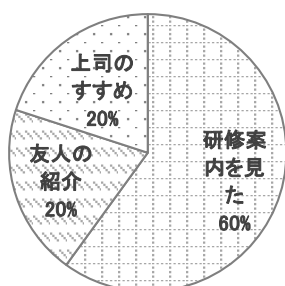
< 評価 >

1. 参加人数について

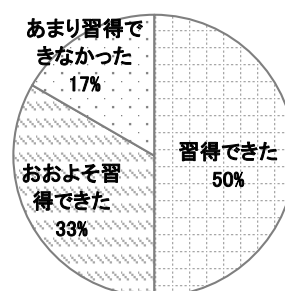
今年度は、参加人数の数値目標の到達には至らなかった。要因として、COVID-19 の感染拡大による臨床現場への影響が推察され、勤務の変更などが生じる懸念から研修参加の締め切りまでに参加を確定することが難しかったことが考えられる。また、“早期離床”のテーマから特に看護師には研修内容がイメージしづらく、一昨年度に把握した研修ニーズとの関連が伝わりにくかったことも考えられる。

2. アンケート結果

アンケート結果より、対象施設に病棟数分の研修案内を送付するといった研修の広報の方法は妥当であったと考える。また、研修内容についても、8割以上の参加者が臨床で活用できる知識を習得できたと答えており、アンケートの自由記載からも研修中の Forms の活用やチャットでの質問対応などについて高評価を得ており、参加者の満足度が得られる研修であったと評価する。



< 研修をどのように知ったか >



< 臨床で活用できる知識を習得できたか >

Ⅲ. 今後の課題

本事業は、今年度で終了年度となる 3 年を迎えるが、COVID-19 の影響を多大に受け事業計画を確実に遂行するには至らなかった。また、本事業を通して県内のコメディカルの研修ニーズも把握できたことから、今後も事業を継続し、研修ニーズに見合った研修を企画し、県内のコメディカルの呼吸ケアに関するアセスメント力の向上に寄与したいと考える。

3) 認知症看護認定看護師セミナー

担当者：六角僚子、篠原真咲、星野郁子

【事業要旨】

1. 認知症者に特化した看護を学ぶ
2. 高齢者に対するアクティビティケア等の実践を通して、認定看護師としての認知症予防及び啓蒙活動に関わる企画力・実践力を身に付ける
3. 研究継続を実施する

【地域貢献のポイント】

認知症ケアを極め、認知症予防するために、認知症看護認定看護師（DCN と略）と教員、地域の方々と一緒に認知症ケアについて考えることを目的に企画したため、DCN により、地域の方々とのおふれあいを通して地域の方々の課題を見出せる。それが地域の保健医療福祉の向上につながると同時に、社会に貢献する熱意あふれた人材育成となるに関わる活動となる。さらに全国の DCN にセミナーの周知を行うことで、三重県立看護大学地域交流センターの知名度を拡大し、大学名の周知につながることが地域貢献となると考える。

【昨年度からの課題】

コロナ禍を背景にすべてのセミナーをオンラインとした。月一回のセミナーでは解決できない課題もあり、DCN 同士がそれぞれ連絡を取り合い、自分自身の時間でディスカッションなどを行っているが、それを次のセミナーで十分に還元ができないこともあるため、オンラインセミナー上での共通理解が課題となる。またコロナの情勢が落ち着いたら、くらしの保健室やよりみちカフェなどの参加も応募し、社会交流の視点での看護も一緒に学んで生きたいと考える。

I. 活動計画

＜重点課題＞全国の認知症認定看護師に広報し、参加者は20～25名程度を目標とし、研究成果を関連学会等での発表を行う。

＜実施計画＞

以下のようなスケジュールで実施した。

毎月第一金曜日 13時から17時 オンラインセミナーとした。

事例検討会を2時間、その後の時間を研究推進とした。今年度は「災害時に対する認知症者のトリアージ」というテーマで、グループで研究活動を行うように計画をした。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 事例検討会

DCN から事例紹介をしてもらい、セミナー2回で臨床倫理検討シート（最新2018年7月改訂）を用いて、ディスカッションをグループで行った。3回目にオンライン上でロールプレイを実施した。以下は地域包括支援センターから出された事例である。

<例>Aさん（75歳、女性） 独居（夫他界、子どもなし）

キーパーソン：義姉（A市） デイサービス利用しており、Aさんの同じ話を繰り返す等不安あり

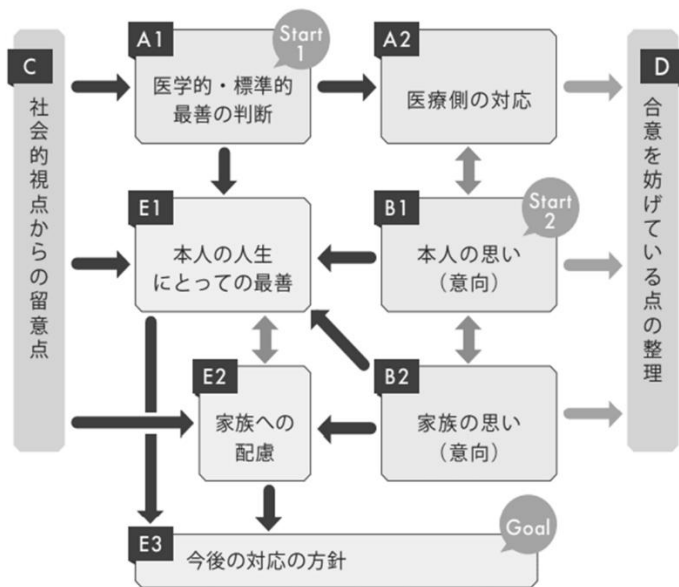
その他親族：義兄（B市）、実兄（義兄と近所）、実弟（B市、養子に出ており関わり難い）
実兄・実弟は「対応は嫁ぎ先に任せるべき」と考えている。

義姉・実弟には「盗まれた」との電話が頻繁。実弟が駆け付けると「何の用？」「電話なんかしてない」との反応。

把握した経緯

R3.9月、警察から地域包括支援センターへ連絡あり、以下の内容話される。

R3.4月頃から「家の物を盗られる」と警察に連絡が入るようになり、月1回程度だった連絡が最近頻度が高くなっている。今日は既に3回電話があった。盗って行くのは「知り合いの〇〇さん（男性）」と言う。倉庫の中の物を盗られた、倉庫入口の鍵を変えられて入れない等の訴えがあり、8月には訪問して鍵を付け替えて「大丈夫」と伝え、相談先として包括の案内もしたが、相談はなし。……



E3までを目標として、グループワークで2回のセミナーを通して、事例を深めていくこととした。

各グループとなり、役者役割を設定して、ロールプレイをする。ロールプレイを実施してみたの感想等の発表を行い、共有した。

「外来看護師をやりました。それぞれの思いをくみとり関わることや声掛けの仕方など対応を考えることができました。自身の病院でもスタッフ間で振り返りに役立てられるのでは？」、「娘の役でした。本人との思いの相違にどう対応して本人に伝えればいいのか？悩みました。本人とは別に、家族の思いにも本人とどうように、わかってもらいたい。」

「本人役でした。一人暮らしからの頑固にマイペースに生きてきた私と、実は人恋しい私の気持ちの中で、他人が心配してくれるうれしさとうっとうしさが半々の中、どのタイミングで少しだけ本心を伝えようかと思えるには、相手からの声掛けと向き合ってくれる時間も大切であると実感しました。」……などであった。

2. 研究活動

テーマは「避難所での認知症高齢者の早期発見と環境調整につなげるための災害時における認知症スクリーニングの作成とその活用」とした。研究目的と意義としては、災害避難所における認知症者を早期に発見し、適切な環境調整につながるよう、多職種が活用できる「避難所版認知症ファーストスクリーニング」を作成し、今後の活用について考察を深めることとした。そのことが避難所で活動する多職種が活用できる「避難所版認知症ファーストスクリーニング」を作成することは、認知症者本人・家族を適切な専門スタッフに繋げ、安心して避難所での生活が過ごせる環境を提供できるだけでなく、認知症者の精神行動障害悪化の予防も可能となる。以下が今年度の学会発表（3件）となる。DCNが代表者となり、グループ内で抄録執筆、発表を行った。

110

日本老年看護学会第26回学術集会 演題抄録フォーマット

避難所版認知症高齢者ファーストスクリーニングの作成過程
—支援者が簡便に活用できるスクリーニングを目指して—
只石翔子 1), 芝原弥千代 2), 中村由喜子 3), 永見紀子 4), 深津絃一 5), 西本典子 6), 篠原真咲 7), 六角僚子 7)
1) 札幌しらかば台病院, 2) しおりの里, 3) 三重県立看護大学大学院, 4) 国立循環器病研究センター, 5) 行橋記念病院, 6) 土庫病院, 7) 三重県立看護大学

<p>【研究目的】近年、我が国の自然災害発生件数は増加傾向にある。災害時に開設される一時避難所の環境は課題が多い。なかでも認知症高齢者はリロケーションダメージを受けやすく、せん妄や行動・心理症状を発症しやすい。特に、軽度から中等度の認知症高齢者は重度の人と比較して症状が顕在化しにくいため見過ごされやすい。先行研究から、認知症高齢者の対応困難事例は、発災後3日以内に6割が発生して避難所での生活継続が困難になることが明らかになっている。そこで認知症高齢者の混乱が低減し、本人と家族が避難所で安心して過ごす環境を整えるための指標が必要であると考え、ファーストスクリーニングの作成に至った。</p> <p>【研究方法】医学中央雑誌Web版Ver.5を用いて、「認知症」「高齢者」「避難所」の3つのキーワードと、2012年以降の「原著」「会議録を除く」で文献検索を行った。その結果、54件の文献が抽出され、研究目的に関連しない文献を除外した17件を研究対象とした。文献の内容を踏まえ、日本老年看護学会で作成された「大規模自然災害時の高齢者支援ガイド・避難所における認知症高齢者のトリアージと支援」を基に、認知症看護認定看護師セミナー参加の認知症看護認定看護師（以下、DCN）7名と指導教員2名で内容を検討・吟味した。【倫理的配慮】文献の収集と引用については著作権の範囲で行った。【結果】文献検討の結果、1認知症高齢者に早期から対応することで日常生活に戻った際の混乱が少ない。2混乱した認知症高齢者の様子から家族は疲弊し、対応困難や介護放棄がみられる。3住民の理解や協力があることと個室の提供</p>	<p>ができることが生活継続のために重要であると示唆された。これらの結果からファーストスクリーニングをいつ、どのような質問項目で行うのかを検討した。スクリーニングは避難所で受付時とし、質問項目を次のように絞った。まず自己紹介（所属と氏名を伝える）をした後、1相手の名前を確認する。2今日の日付を確認する。3今いる場所（避難所、町名、建物等いずれか）を確認する。質問1は関係性を築き、会話をする上で相手の名前を呼ぶことで安心感を与えられる方法として用いる。質問2に正答した場合は質問3に進み、質問2や3に答えられない場合は、認知症の疑いが考えられると判断し、避難所本部に伝えDCNに繋げる。これらの質問は見当識の有無や認知機能の程度、認知症状を知る手掛かりとなる。また、短時間で支援する誰もが簡単に活用できるようフローチャート式とした。【考察】避難所では様々な支援者が活動している。しかし、必ずしも支援者らは認知症高齢者の対応や避難所での本人・家族の困りごとについて知っているとは限らない。加えて、非常時には時間をかけた評価は現実的に困難である。これらのことから、短時間で支援者を問わず誰もが同じように評価でき、認知症高齢者を把握するスクリーニングツールが必要ではないかと考えた。今後の課題として、作成したスクリーニングツールが災害時の避難所で活用できるのか予備調査を行い、妥当性や信頼性について評価することが必要である。また、DCNの具体的な役割について検討していきたいと考える。</p>
--	---

3. 参加者

南は九州地区、北は北海道と全地域のDCNの参加となった。毎回25～30名程度の参加であった。

< 評価 >

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、すべてオンラインセミナーとしたため、広い地域

からの参加が増えた。さらに各地域の DCN がディスカッションを行うことができた。事例検討会では事例提供に時間を要することがあったが、臨床倫理検討シート（最新 2018 年 7 月改訂）活用を通すことで、本人本位の過ごし方の目標を考えることができた。また研究では、前年度の「認知症者と災害について」の文献研究をもとに、さらに具体化された。

「避難所での認知症高齢者の早期発見と環境調整につなげるための災害時における認知症スクリーニングの作成とその活用」という新たなテーマで文献を丁寧に読み込み、ファーストスクリーニングシート 2 種類を作成することができた。今後はそのシートの運用について具体的なアンケート調査に導入する予定である。その準備のために本大学ではもちろん、各自施設で、各自が倫理審査審査をしている段階である。

Ⅲ. 今後の課題

1. セミナー開催日時やオンラインセミナーのあり方を考えること。
2. 研究活動を参加者全員に体験できるようにしていくこと。

4) Brush UP! 急性期看護

担当者：岡根利津、玉田章

【事業要旨】

県内の認定看護師（集中ケア・救急看護）が協働し、急性期看護に関する知識やアセスメント力のブラッシュアップを目的とした研修会を開催する。県内における看護師の継続学習を支援し、三重県の急性期看護の質の向上を目指す。

【地域貢献のポイント】

三重県において、クリティカルケア領域に関する認定看護師や専門看護師などの熟練看護師は少なく、限られた施設に所属している状況である。本研修では、県内の熟練看護師が講師を務め、臨床の状況を考慮した研修を開催することで、標準的な知識を共有することができ、施設ごとの教育格差の解消、急性期看護の質の向上につながると考える。

【昨年度からの課題】

昨年度のアンケート結果より得られた研修への要望や臨床現場における課題等を考慮し、対象に見合った研修内容を検討していくことが課題であった。

I. 活動計画

＜数値目標＞参加人数：15名（オンラインの場合）、30名（対面の場合）

＜実施計画＞

- ・研修対象者：昨年度と同様、1年目や部署異動者など、経験の浅い看護師の指導および教育に携わる方、中堅看護師を対象とした。
- ・研修内容：呼吸・循環・脳神経におけるアセスメントのポイントをテーマとして研修を企画した。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

10月下旬ころを目途に COVID-19 の感染拡大状況を鑑みながら、講師を担う認定看護師の方々とともに研修開催の日程を継続して検討してきた。しかし、臨床現場の状況から、研修対象者の勤務状況および COVID-19 対応に関連した心身のストレス状態などを考慮し、今年度の研修開催は見送ることとした。

III. 今後の課題

研修対象者の多くが COVID-19 の対応を担う施設の看護師であることから、今後も感染拡大に伴う医療提供体制の状況に応じて研修開催を検討していくことが必要になると考える。オンラインやハイブリットでの研修開催等、開催方法についても検討しながら、研修参加者が参加できる状況を見極めながら次年度も引き続き事業を継続し、研修が開催できるよう努める。

5) 新任期保健師の災害時における公衆衛生看護活動支援事業

担当者：清水真由美、日比野直子、中北裕子、荻野妃那、山本翔太、梶本真理子、
星野郁子

【事業要旨】

新任期保健師に、災害時における住民支援方法について知識技術の提供を行うとともに、HUG（避難所運営ゲーム）を通じて、公衆衛生看護の実践能力の向上を目指す。

【地域貢献のポイント】

1. 新任期の保健師に災害時の活動に関する知識技術を提供することで、公衆衛生看護活動の充実につながると考える。
2. グループワークを通じて、圏域を越えた保健師同士が交流することで、保健師ネットワークを促進できると考える。

【昨年度からの課題】

昨年度は行政保健師を対象としていたが、地域包括支援センターに所属する保健師へも声をかけてはどうかとの提案をいただいた。行政以外に所属する新任期保健師も対象とすることで、保健師ネットワークの強化をめざす。

I. 活動計画

< 数値目標 >

1. 保健師 1 年目、新任期保健師、2 回とも参加が可能な方を対象にした研修会
2. 定員 20 名程度
3. アンケートによる研修評価

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 研修会の周知

行政の協力を得て、県統括保健師経由で県保健師・市町保健師等への研修案内及びチラシの配布を行い、地域包括支援センターを含む保健師への周知を依頼した。

2. 研修会の開催

COVID-19 の感染拡大に伴い、令和 3 年 8 月 27 日～9 月 30 日において、三重県全域に緊急事態宣言が発令された。

県及び市町保健師は、所属を超えた応援体制を整え対応に追われることとなった。

これらの状況を鑑み、受講しやすいようオンライン（Zoom）開催へと変更した。また、2 回で実施する予定の内容を 1 回で実施することとなったため、学びを充実させる「災害関連用語集」を作成して受講者に提供した。

研修内容は以下のとおりである。

- 1) 日 時：9 月 27 日（月）13 時 30 分～16 時 30 分

令和3年度 新任期の災害時における公衆衛生看護活動支援事業
災害時の保健師活動 実践力UP研修

災害時、保健師活動に求められているものは？そのために、被災時に備えておくことは？
実践力の発揮を促すことで一層に学びましょう！

目的 ① 新任期保健師の災害時の住民支援技術の向上を図る
② 災害時に保健師仲間と連携がとれるようになる

定員 20名程度

対象 ① 保健師1年目
② 新任期保健師
③ 2回とも参加が可能な方

日時 9月6日(月) 13:30~16:30 ・講義「災害時の公衆衛生看護活動」
・報告「紀伊半島大水害を振り返り今後の備え」
9月27日(月) 13:30~16:30 ・演習「HUG(避難所運営ゲーム)から学ぶ
住民支援方法」

会場 三重県立看護大学 講義棟2階 多目的講義室
(津市夢が丘1丁目1番地1)

申込方法 別紙申込書により、メールで三重県立看護大学地域交流センター
星野宛にお申込みください 申込期限：令和3年8月31日(火)

お問い合わせ先 三重県立看護大学 地域交流センター(担当：星野)
☎059-233-5610

【チラシ】

2) 参加者：14名

3) 内容：(1) 講義：「災害時における公衆衛生看護活動」

講師：公衆衛生看護学 中北裕子

(2) 報告：「紀伊半島大水害を振り返り今後に備える」

講師：在宅看護学 日比野直子

(3) 演習：「HUG（避難所運営ゲーム）から学ぶ住民支援方法」

講師：在宅看護学 日比野直子

公衆衛生看護学 荻野妃那・山本翔太・梶本真理子

(4) 本日のまとめ 公衆衛生看護学/国際看護学 清水真由美



<評価>

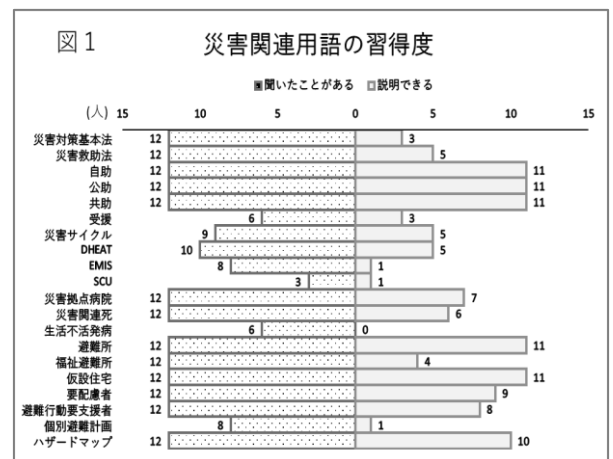
参加者14名の経験年数別内訳は1年目10名、2年目1名、4年目1名、5年目2名であった。所属別内訳は県4名、市町10名であった。

アンケート回答者は12名（回収率85.7%）であった。研修を受けたきっかけは、「自己研鑽」が最も多く、続いて「災害対策への興味」「上司からの勧め」であった。研修の内容に関しては、「満足した」9名、「やや満足した」3名と回答し、今後の活動への有用性については、「役立つ」10名、「やや役立つ」2名であった。それらの理由は“HUGゲームをして災害対応のイメージがつかめた” “忘れていたことや、理解が不足していることを再確認できた” “災害への活動意識が高まった” 等であった。

災害関連用語（20用語）の習得度は図1のとおりであった。研修運営では、「満足した」4名、「やや満足した」8名であったが、“対面が良かった”、“HUGゲームは実際に話し合いながら行いたかった”という意見があった。

Ⅲ. 今後の課題

研修参加者は、災害対応のイメージや心構えを持つこと、災害時の保健師の役割の重要性や自らが担う役割の認識を高めることができているとされており、本事業は有意義であると考えている。今後も新任期保健師を対象とした研修の機会は重要であり、実践に結び付く研修を継続的に提供していくことは必要である。



(担当：星野)

6) 看護職者を支援する相談窓口事業

担当者： 中西貴美子、上田貴子、小池敦、小松美砂、永見桂子、長谷川明子

【事業要旨】

三重県内の病院看護部の管理部門を対象に、キャリア・看護管理、教育・進学等に関する相談に対応して、組織の課題解決を支援する。

【地域貢献のポイント】

施設の看護部が抱えている問題・課題について支援する場が増えることによって、相談が容易となり早期解決につながる。また、大学という第三者の立場からの支援は新たな視点での取り組みとなり、必要な組織の変革を促進することができる。以上のことによって三重県内の施設の看護の質の向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

昨年度は、本学連携協力協定病院を中心に看護部の組織のニーズについて調査するため、「県内病院等看護管理者意見交換会」に代表者が参加し、事業内容を説明すると共に、参加施設に向けて「現場で起きているお困りのこと、看護管理・人材育成・キャリア開発・ストレスマネジメント・進学についてなど看護管理の部門として施設外に相談したいと思うこと」について調査を依頼した。今年度はその調査結果をもとに、具体的な支援計画を企画し、実際の相談事業を展開する

I. 活動計画

<重点課題> 看護部の組織のニーズに合った事業を1回以上実施する。

<実施計画>

- ・地域交流センター事業「県内病院等看護管理者意見交換会」において、話題を提供する。
- ・上記意見交換会のアンケート結果をもとにテーマを決定し、話題提供・情報交換の場を提供する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 県内病院等看護管理者意見交換会における話題提供（令和3年11月2日）

「新型コロナウイルス感染症と看護職のメンタルヘルスケア」担当：小池

「コロナ時代の新人看護職員研修」担当：中西

*意見交換会のアンケートの結果をもとに、今回の事業を検討した結果、「グループワークの時間がもう少しあればよかった」「もう少し他の病院の取り組みなど聞きたかった」などの意見があったことより、病院相互が意見交換をする時間が十分とれる機会を作ること、時期にあったテーマについて事業を行うこととなった。

2. 新年度直前企画「コロナ禍における看護職者の心理的支援について考える！」

1) 開催日時：令和4年3月15日（火）13時30分～15時00分 Zoom開催

2) プログラム

13:30～13:45 話題提供 (担当: 小池)

13:45～14:30 意見交換 (教員も含み2グループにわかれる)

14:30～15:00 意見の共有・まとめ

3) 当日参加者数 10施設 12名

4) アンケート結果 (回答数10件: 回収率83.3%)

(1) 緊急企画の内容

「希望に沿う内容であったか」という質問に対し、「とてもそう思う」4名(40%)、「そう思う」6名(60%)であった。また、「役立つ内容であったか」という質問に対しては、「とてもそう思う」4名(40%)、「そう思う」5名(50%)、「どちらかというと思う」1名(10%)であり、希望に沿った役立つ内容であったという結果であった。

(2) 開催時間・時間配分について

開催時間(90分)について、「ちょうどよかった」が9名(90%)、「もっと短い方がよい」1名(10%)であった。また時間配分(話題提供15分/意見交換45分/まとめ30分)について、「ちょうどよかった」9名(90%)、その他、講話はもっと長い方がよかった、ディスカッションやまとめはもう少し短い方がよかったという意見があった。

(3) 相談窓口事業への関心

「関心はあるが、(現在)相談したいことはない」と答えた人が9名(90%)、「関心がない」1名(10%)であった。これまでに相談がなかった理由の一つとして、現在は相談したいことはないという状況であることがうかがえた。

(4) 自由記載

「他院の現状や課題を共有できた」「他施設の工夫を知ることができた」「他院の取り組みを聞く機会は、このような企画がないと設定が難しいので、今後も開催を願います」などの意見があり、意見交換の場の提供は有用であったことが分かった。

<評価>

・事業開始当初から、相談窓口について周知を試みたが、実際の相談にはつながらなかった。今年度は、管理者交換会の場を借りて、ニーズを明確にしたことで、重点課題である「看護部の組織のニーズにあった事業」を年度末であったが1回実施することができた。また、10施設の参加を得ることができ、内容・方法ともに高評価であった。今回の企画に対する満足度は5段階評価で平均4.2(範囲3～5)であり、今後の継続を示唆するものであった。

Ⅲ. 今後の課題

今後、相談窓口の対応は継続しつつ、定期的に話題提供・情報交換の場を提供し、タイムリーな支援に繋げていくことが課題である。

7) 心電図を読もう！

担当者： 関根由紀、菅原啓太

【事業要旨】

本事業は、心電図を少しでも身近に感じ判読する力をつけるために刺激伝導系の理解をはじめ、心電図波形の基本から臨床で遭遇する不整脈の判読や、12誘導心電図を読む力を付け、日々の看護実践に活用できることを目的とする事業である。参加対象は、集中治療室や循環器病棟といった部署は問わず、心電図に興味あるいは苦手意識のある方とした。

【地域貢献のポイント】

県内の医療機関で働く看護師が本事業に参加し、心電図波形の正常と異常の判読のコツを知り、臨床で活用できるようになることでスキルの向上や臨床に還元することができ、これらが地域貢献につながると考える。

I. 活動計画

<数値目標>

初年度であることや COVID-19 による開催の影響を加味し、参加目標数 4 名とした。広報活動は、県内の病院を対象に行った。

<実施計画>

企画運営の打ち合わせ：学内 1 回

日時：令和 3 年 12 月 11 日（土）13：00～16：00

場所：実習室 5

プログラム内容：心電図の基本、基本波形を読む、基本的な不整脈を読む、リクエストのあった不整脈の判読

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 研修会参加者

8月に県内医療施設 12 施設にチラシの送付を行い、参加者を募集した。研修会参加申込み者数は当日の申し込みも含め 48 名、当日参加者は 42 名（欠席 2 名、当日申し込み者除く）、看護師経験年数は 1 年目～25 年目。そのうち、卒業生は 5 名であった。参加者の所属部署は、救命センターや ICU、内科病棟、外科病棟、外来であった。

2. 研修会の内容

実習室入室の際、当日の体調の確認を行った。グループは、同じ施設で偏らないように 4 人 1 組でグルーピングし、グループワークを行った。なお、グループワークを行う際はマスクの着用を必須とし、ソーシャルディスタンスおよび換気に留意した。研修会はプログラムに加え、参加者たちの知りたい不整脈を含めたプログラム内容とした。



3. アンケート結果

メールアドレスを登録している参加者に向け、Google アンケートを用いてアンケート調査を行った。その結果、回収率 73%、有効回答率は 100%であった。

研修会の満足度は、満足 78.9%、やや満足 21.1%であり、内容の理解は、理解できた 89.5%、あまり理解が出来なかった 5.2%、その他で復習し理解を深めたいと回答した。内容は適切であった 73.7%、難しかった 15.8%、簡単だった 10.5%であった。開催時期は、この時期でよいは 73.7%、もう少し早い時期に開催して欲しい 26.3%であり、開催時間は、ちょうどよかった 68.4%、少し長かった 5.3%、長すぎる 5.2%、もう少し時間があってもよい 21.1%であった。また、「心電図を読もう！」中級編は回答者全員が希望した。

自由記述では、「心電図についてもっと勉強したくなりました。」、「もう少しゆっくりペースで、数回に分けて開催があると嬉しいです。またぜひ参加したいと思いました。」、「グループで判読したため、相談できてよかった。」などの声があった。また、「12誘導の波形を読み解くような問題も次回はしてほしいと思う。」という意見もあった。

<評価>

研修会の参加者数は予想を大きく上回り、心電図の判読に対する関心の高さが伺えた。本学の卒業生も参加しており、卒業後も大学で学ぶ機会につながった。

アンケート調査の結果から、今回の研修会の満足度は高く、開催時期や時間、内容も適切であったと思われる。研修会はグループワークとしたが、自由記述にもあるようにメンバーと相談できることで講義内容の振り返りや共有につながったと考える。また、「苦手だった心電図に更に興味が持てました。また、わかりやすい内容であったため、苦手だった部分も少し自信ができました。」といった声からも、本事業の目的は達成できたと考える。

III. 今後の課題

本年度は、12誘導心電図の判読は実施しなかったが希望する声があった。しかし、本事業は心電図判読の初級編となるため 次年度も本年度と同様に、12誘導心電図の基本波形を知ることとに留めることとする。今後は、中級編の希望もあることから房室ブロック等の不整脈や、12誘導心電図の判読をプログラムとする事業に取り組むか否を検討する必要がある。

8) 看工連携ものづくりシーズ発掘

担当者： 斎藤 真、大西範和、大川明子、大平肇子、犬飼さゆり、長谷川智之、市川陽子、
田端 真、竹村和誠

【事業要旨】

本事業は、看護ケア用品の開発およびその知的財産の取得を目的に本学教員のアイデアを発掘、試作品の製作や有用性の検証を行うものである。本学は平成 27 年度から（独）工業所有権情報・研修館の産学連携知的財産アドバイザー派遣事業に採択され、平成 30 年度からは新たな事業制度の下、知的財産の積極的な創出を展開してきた。

令和 3 年度は、令和 2 年度に引き続き本学教員および県内企業による「看工連携ブレインストーミング」を開催した。

【地域貢献のポイント】

本事業は、本学の教員の持つ知的財産のシーズ発掘に限らず、試作品や製品開発、販売に至るまでの過程を地元企業と連携することも目的としている。したがって、知的財産のシーズ発掘は地方創生の観点からも有用性の高い地域貢献事業である。

さらに令和 3 年度は県内の企業と共同で看護ケア用品についてシーズ発掘を行うための「看工連携ブレインストーミング」を展開する。

【昨年度からの課題】

コロナ禍において「看工連携ブレインストーミング」も十分に開催できない状況であるが、できる限る開催する方向で進める。

I. 活動計画

<重点課題>看工連携ブレインストーミングを月 1 回開催し、シーズの発掘を行う。

<実施計画>県内企業との「看工連携ブレインストーミング」を開催する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

活動は「看工連携ブレインストーミング」を月 1 回開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、12/15、1/26 の 2 回の開催に留まった。1/26 は津市内の機械メーカーと医療福祉関係の機器開発に関するシーズ発掘を目的とした研究会をオンラインで開催した。令和 3 年度はコロナ禍 2 年目ではあるが、本学の教育を優先することとし、教員の時間的な余裕が生じた場合に「看工連携ブレインストーミング」を行うこととした。また、「看工連携ブレインストーミング」は大学院生の参加も積極的に歓迎しており、令和 3 年度は 1 名の大学院生が参加した。

<評価>

本学教員の発想からのニーズ、シーズを発掘し、さらにそれらを知的財産として特許出願にしていくことは他大学にはない取り組みである。また、県内企業とのコラボレーションができたことは有益な事業であると評価する。

Ⅲ. 今後の課題

「看工連携ブレインストーミング」により発掘され、知的財産となり得る案件は具体化させる。また、県内企業との積極的な交流を進める。

2. 県民に向けた取り組み

1) 子ども達に「自分のからだ」を伝える事業

担当者：宮崎つた子、川瀬浩子、長谷川明子、菱沼典子

【事業要旨】

本事業は、地域の教育・福祉機関と協力・連携して創り上げる「からだ先生」プロジェクトである。小学校入学前の好奇心の強い子ども達を対象に、「自分のからだを知り大切にする、そしてお友達も大切にする」事を伝える活動と「からだ先生」の人材育成に貢献する事業である。

【地域貢献のポイント】

1. 地域のニーズへの対応
2. 本学の専門性の活用
3. 本学の地域貢献活動への広報的効果
4. 地域、教育・福祉機関で子どもの健康教育に取り組む意識の醸成
5. 子どもの自己肯定感の向上に寄与
6. いじめや虐待防止に貢献

【昨年度からの課題】

COVID-19の感染拡大状況に留意し、安全に実施ができるようになれば、昨年度までの課題である補助教材の検討や伝え方の工夫を行い、今年度の打ち合わせで決定した新たな企画を構築しながら事業を継続していく。

I. 活動計画（3年計画の3年目）

<数値目標>

1. 教育・福祉機関、市町（行政）などの団体から連携希望：1件以上
2. 連携団体との打ち合わせ会議：10回程度
3. 「自分のからだ」を伝える事業の実施：3回以上
4. 「からだ先生」研修会の実施：1回以上

<実施計画>

1. 昨年度からの変更点（昨年度の課題を含む）

今年度は、COVID-19の感染拡大により、保育園や幼稚園などの福祉・教育機関の施設内で行う企画は、感染防止から開催が難しい状況であった。そこで、新たな連携団体の開拓のため広報活動を2年目から取り組み、対象年齢の子どもと保護者が交流活動を行っているNPO団体（以下A団体）から連携希望があり、新たな連携団体での事業展開を行うこととなった。

2. 実施計画

- 1) 幼児への育成事業

- ①教育・福祉の協力・連携機関への広報・募集
- ②依頼機関からの希望に応じて企画内容の検討

- ③実施可能な取り組み内容の企画・運営等の打ち合わせ
 - ④事業開催に関する準備、当日までのリハーサル・サポートの実施
 - ⑤子ども達に「自分のからだ」を伝える事業の実施
 - ⑥事業担当者と連携団体との合同反省会の実施
- 2) 「からだ先生」への育成事業

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 幼児への育成事業

3年目は、2年目から準備を進めてきた NPO 法人 A (以下 A) との協働により、親子 (主対象は年長児) に「自分のからだを知る」ことを伝える事業 (4回の講座) を実施した。本事業は、以下の (1) ~ (7) のプログラムに沿って活動を行った。

1) 方法

- (1) 参加する親子 (主対象は年長児) の募集
- (2) 企画・活動案の作成
- (3) 使用教材と役割の決定
- (4) 活動の実施
- (5) スタッフとの反省会の実施
- (6) 保護者評価
- (7) 最終回での全体事業評価

2) 参加者

- (1) 対象の子どもと保護者の参加人数

10組の親子より応募があり、子どもは延べ 57名 (年少~小1)、保護者は延べ 34名が参加した。

- (2) スタッフ及び学生ボランティアの参加人数

打ち合わせや演習準備、当日の事業に、スタッフは延べ 22名、本学学生は 14名が参加した。

3) 活動の実施

講座の実施内容は、手遊び・紙芝居 (「NPO 法人『からだフシギ』」の開発教材) の読み聞かせ、ワークで構成した。ワークはテーマの内容が体験できるよう「からだエプロン」「聴診器」「糸電話」「塗り絵」等を活用した。手遊び・紙芝居や子どもへの直接的指導は団体 A が行い、ワークは大学教員が担当した。



表 1 活動内容

	紙芝居	手遊び	ワーク	塗り絵
第1回	たべものとおりみち (消化器系)	おべんとうばこのうた	・からだエプロン：胃と腸 ・胃の中身を触ってみよう (スライム)	たべものとおりみちをたどってみよう
第2回	ちとしんぞう (循環器系)	トントントントン ひげじいさん	・からだエプロン：心臓 ・聴診器で心臓の音を聴いてみよう	ちとしんぞうをたどってみよう
第3回	のうとしんけい (神経系)	あたま・かた・ひざ・ポン	・お豆腐実験 (水に浮かべた豆腐を脳に見立てる) ・脳模型 ・糸電話 (糸を神経にみたてる)	のうとせきずいをたどってみよう
第4回	おとこのこ・おんなのこ (生殖器系)	キャベツの中から 大きな栗の木の下で	・子宮・胎児模型：3か月、9か月	おとこのこ・おんなのこのだいじなところ

第1～4回

第1回の様子

第2回の様子



スタッフが紙芝居を使って読み聞かせをしている様子



臓器のエプロンを使用し「小腸」説明する様子



聴診器で心音を聴く体験の様子

第3回の様子

第3回教材

第4回の様子



糸電話体験 (糸を神経にみたてる) の様子



学生ボランティアが作成した脳の演習教材



子宮と胎児の模型で説明する様子

4) 反省会の開催

反省会や保護者調査の結果、および最終回における意見交換から全体事業評価を行い、課題の明確化を行った。



学生ボランティアが作成した「ぬりえ」で遊ぶ様子

2. 「からだ先生」への育成事業

COVID-19 の感染拡大の状況および感染予防について、検討を重ねた結果、育成事業は実施が難しいと判断した。

<評価>

1. 幼児への育成事業評価

幼児への育成事業の数値目標は全て達成出来た。また、4回の講座の保護者満足度では、全ての講座で「とても満足」「満足」と回答した者が100%であった

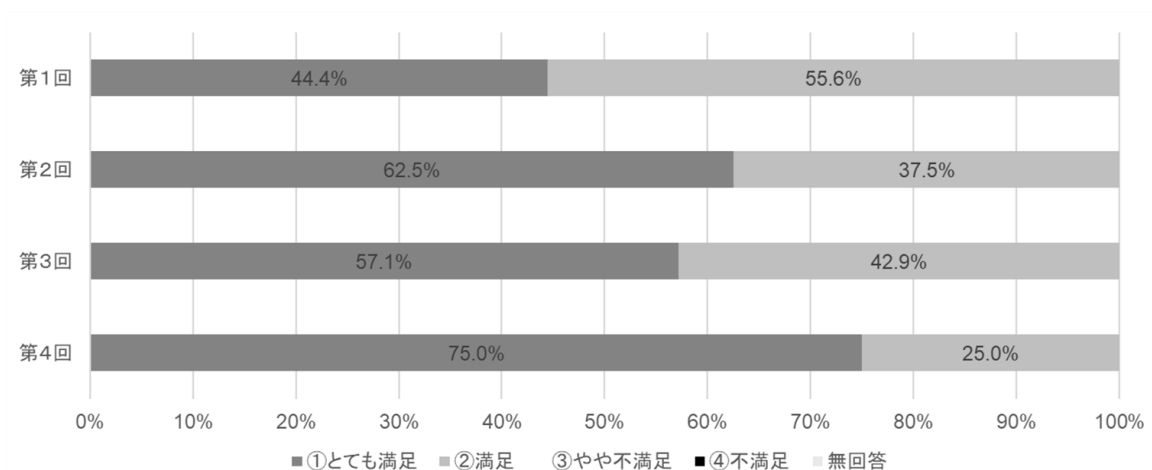


図1 保護者の講座満足度

2. 「からだ先生」への育成事業

COVID-19 の感染拡大の状況から開催を断念したため、目標は達成できなかったが、感染予防から十分な検討を重ねた結果であった。

Ⅲ. 今後の課題

3年間を通して、地域の関連機関・団体（亀山市・津市教育委員会・NPO 団体）との連携で、4つの幼稚園、1つの認定こども園、1つの子育て支援 NPO 団体で、延べ 10 回の活動を取り組めた。3年間の実績や課題を踏まえて、今後も地域で教育・福祉機関と協力・連携して創り上げる「からだ先生」活動を継続していきたい。また、子ども達に、からだの知識を毎日の生活体験と結び付けられるように様々な補助教材や伝え方の工夫を検討して、独自の教育、指導の展開を広げられるように努めていきたい。

2) いきいき体操と健康的な肌づくり

担当者：平生祐一郎、篠原真咲、岡根利津

【事業要旨】

教員が地域の公民館や集会所などに出向き、地域住民を対象に介護予防体操やスキンケアに関する講話と実技を行った。スキンケアについては、皮膚・排泄ケア認定看護師の資格をもつ教員が健やかな皮膚の維持の方法について実演した。今年度も「よりみちカフェ」と協働で開催している。

【地域貢献のポイント】

- ・地域住民が自己の健康について関心を高め、健やかな暮らしを営むことができる。
- ・住民同士のつながりや支え愛を深め、地域コミュニティの形成や強化に貢献する。

【昨年度からの課題】

新型コロナウイルスが終息しなかったこともあり、地域で事業を展開することが難しい状況であった。今年度も「よりみちカフェ」とコラボし、身近な場所で地域住民の健康意識を高め、地域のつながりをつくるようにした。

I. 活動計画

<数値目標>

- ・開催回数：2回以上、参加者数：延30人以上

<実施計画>

- ・ロコモティブシンドローム(ロコモ)について
ロコモに関する講話、ロコチェック、介護予防体操
- ・スキンケアについて
乾燥肌に関する講話、肌水分量の測定、ハンドクリームの使い方
- ・参加者の交流
参加しての感想や健康づくりなど

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 日 時：令和3年11月18日、12月16日 13時30分～15時00分
2. 場 所：三重県立看護大学
3. 参加者：15名
4. アンケート結果（アンケート回収率：33%）
 - 1) 性別
【 男性：4名、女性：1名 】
 - 2) 年齢
【 50代：2名、60代：1名、70代：1名、80代：1名 】

- 3) ロコモの内容は理解できましたか。
【 理解できた：4名、やや理解できた：1名 】
- 4) ロコモを予防しようと思いますか。
【 思う：3名、やや思う：2名 】
- 5) 健康的な肌づくりの内容は理解できましたか。
【 理解できた：2名、やや理解できた：3名 】
- 6) 健康的な肌づくりに取り組もうと思いますか。
【 思う：2名、やや思う：3名 】
- 7) 意見や感想
- ・いろいろ参考になりました。ありがとう！！
 - ・いろいろ頂いて、ありがとうございます。
- もっとこの会を宣伝してもいいと思います！

<評価>

新型コロナウイルスの感染対策を取りながら、「よりみちカフェ」と協働で実施した。数値目標については、開催回数は達成できたものの、参加者数はもう一歩であった。事業内容については、参加者から概ね高評価が得られ、参加者同士のつながりもうまれた。以上より、本事業は地域住民の健康や地域コミュニティの形成に貢献できたと考えられる。

Ⅲ. 今後の課題

本事業は、地域の様々な方に参加いただき、今年度をもって最終年度を迎えた。新型コロナウイルスは未だ終息に至らず、生活に対する不安は継続している。このような状況を乗り越えるには、一人ひとりの健康意識や地域の団結力を高めていくことが重要であると考えられる。今後も新型コロナウイルスの感染に注意しながら、新たな形で地域に貢献できるような事業を考えていきたい。

3) よりみちカフェ

担当者： 篠原真咲、六角僚子、平生祐一郎

【事業要旨】

①地域の高齢者と子ども達の世代間交流を通して、地域コミュニケーションの活性化を目指すことを目的にしている。

②地域の人たちの交流の場となること、地域の方が気軽に相談できる場になることを目指している。

【地域貢献のポイント】

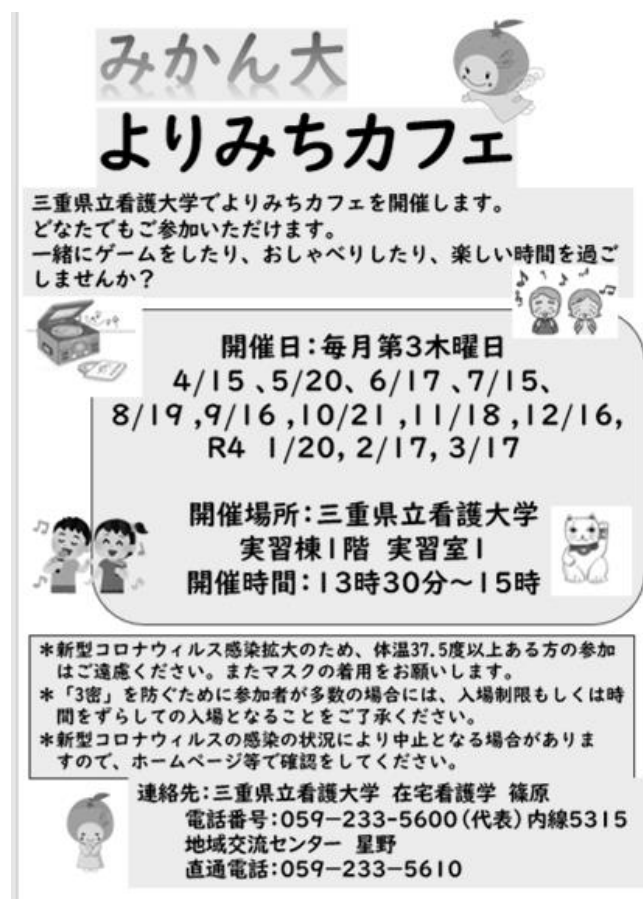
①近隣住民間の交流が促進されることが期待されるとともに、安全な居場所づくりとなる。

②大学と地域をつなぎ、教育だけでなく、大学にいる専門職とのかかわりを通して大学の役割を理解していただく機会とする。

I. 活動計画

〈活動目標〉 毎月第3木曜日の午後1時30分～午後3時まで開催とする。

II. 活動の結果と評価



**みかん大
よりみちカフェ**

三重県立看護大学でよりみちカフェを開催します。
どなたでもご参加いただけます。
一緒にゲームをしたり、おしゃべりしたり、楽しい時間を過ごしませんか？

開催日：毎月第3木曜日
4/15、5/20、6/17、7/15、
8/19、9/16、10/21、11/18、12/16、
R4 1/20、2/17、3/17

**開催場所：三重県立看護大学
実習棟1階 実習室1**

開催時間：13時30分～15時

*新型コロナウイルス感染拡大のため、体温37.5度以上ある方の参加はご遠慮ください。またマスクの着用をお願いします。
*「3密」を防ぐために参加者が多数の場合には、入場制限もしくは時間をずらしての入場となることをご了承ください。
*新型コロナウイルスの感染の状況により中止となる場合がありますので、ホームページ等で確認をしてください。

連絡先：三重県立看護大学 在宅看護学 篠原
電話番号：059-233-5600(代表)内線5315
地域交流センター 星野
直通電話：059-233-5610

表 1. カフェの開催状況

開催日	カフェの内容	教員	県民	本学学生
2021/4/15 (木)	もしばなゲーム	3	11	1
2021/5/20 (木)	こいのぼりづくり、言葉遊び	3	4	4
2021/6/17 (木)	ブンネギターで歌を歌おう	3	8	4
2021/7/15 (木)	牛乳パックでめんこを作って遊ぼう	3	8	4
2021/10/21 (木)	縁日で楽しい秋祭り	3	7	4
2021/11/18 (木)	いきいき体操と健康的な肌作り	3	5	4
2021/12/16 (木)	ブンネギターで歌を歌おう	3	12	4

* コロナ感染拡大により、「まん延防止重点措置」発令中であった 8 月・9 月、2022 年 1 月・2 月は、感染拡大防止のため、休会とした。



図 1. カフェで楽しむ住民のみなさん

< 評価 >

よりみちカフェの参加者が前年度よりも増加し、認識が上がってきている。地域包括支援センターの職員の見学もあり、少しずつ顔見知りの関係性ができてきている。

Ⅲ. 今後の課題

これからも地域の皆さんが気軽に立ち寄れる場であるような取り組みを行い、憩いの場づくりを進めていきたいと考える。

4) 災害時に母子の命を守る工夫を考えよう

担当者： 大平肇子、永見桂子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚

【事業要旨】

災害時における避難所運営には多くの課題がある。特に女性や妊産婦、乳幼児にとって避難所での生活はリスクが高い状況になるため、女性や妊産婦、乳幼児を守るための具体的な対策が必要となる。そこで、本事業は、女性や妊産婦、乳幼児を持つ母親等と一緒に避難所での対応を考えることを目的とする。

【地域貢献のポイント】

女性や妊産婦、乳幼児を持つ母親、地域で防災に取り組んでいる人々と協働して避難所での課題を考える機会となる。また、参加者や地域住民の方が災害や避難所運営への関心を高め、防災意識の向上につながる。

【昨年度からの課題】

昨年度から事業を継続し、今年度は感染対策を徹底した上で、地域で暮らす女性や妊産婦、乳幼児を持つ母親等と一緒に避難所での対応を考える事業を展開することとした。

I. 活動計画

< 数値目標 >

交流会を年1回開催する。

< 実施計画 >

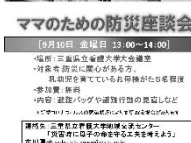
防災に関心がある方、乳幼児を育てている女性等を対象に、防災の座談会を開催する。COVID-19の感染対策のため少人数での開催とし、子ども同伴での参加は遠慮していただき、大人のみが参加する形式とした。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 「ママのための防災座談会」開催

令和3年9月10日に開催する予定で計画を立案した。対象者は防災に関心がある乳幼児を育てている母親で、定員は5名程度とした。内容は、避難バッグの見直し、発災時に必要な行動（マイ・タイムラインの作成）である。座談会のチラシ（資料1）を作成し、大学ホームページで広報を開始したが、三重県に新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が発令されたことから、会の開催を中止とした。



資料1 チラシ

2. 避難行動および避難所での支援シミュレーション

上記座談会が中止となったため、大学内で避難バッグの確認を含め、避難時の支援シミュレーションを実施した。

1) 避難バッグの点検・避難支援の確認(写真1)

乳幼児および母親にとって必要な物品を確認し、避難バッグの内容を点検した。乳児を抱いた母親が避難する場合の安全の確認と、避難所での受け入れ等を確認した。



写真1 避難バッグの点検・避難の支援の様子

2) 避難所での分娩介助シミュレーション(写真2)

避難所での分娩を想定し、災害用分娩セットの点検と補充を行った。さらに、避難所で分娩介助のシミュレーションを行い、母子の安全確保、プライバシー確保の工夫等について検討した。



写真2 避難所での分娩介助のシミュレーションの様子

<評価>

数値目標である年1回の交流会の開催はできなかったが、乳幼児や母親に必要な避難物品や避難所における支援を確認することができた。また災害用の分娩セットは定期的な点検と補充が必要であることを再確認した。これらの成果は今後の活動につなげることができる。

Ⅲ. 今後の課題

女性や妊産婦、乳幼児を持つ母親に必要な防災対策や啓発を継続するとともに、発災時に備えて、災害用分娩セットの点検を継続する。

5) 対話による探Qカフェ

担当者： 安部彰、浦野茂、鈴木聡美、関根由紀、西川真野、林辰也

【事業要旨】

現代では人々のライフスタイルや価値観の多様化にともない共生をめぐる問い——のぞましい共生のありかたをめぐる問い——は、容易に共通解を導きだせない難問となりつつある。しかし現況がそうだからこそ、むしろその問いはかつてないほどの重みをもちはじめているともみなしうる。そして後者の視点に立つならば、我々は共同探求の方法としての対話、それもできればバックグラウンドを違える人々がお互いにその異なりを尊重しつつ織りなす多声的な対話をつうじて、かかる難問を敢然と探求すべきだろう。そのような対話を経ることにより我々は、答えにはいたらずとも、探求前よりも諸問題の構造や奥行きをより鮮明に理解できるようになるはずだから。

【地域貢献のポイント】

このかん、たしかに医療・看護職のフィールドは病院から地域社会へとひろがっている。しかしこうした活動のフィールドの拡張は必ずしもコミュニケーションの豊饒化を意味しない。そこにおけるコミュニケーションが「医師・看護師と患者」あるいは「多職種間」という閉じた役割関係のもとでのそれであり続けるかぎりには。したがって、やはりコミュニティには、人々がそれぞれの役割や立場をこえて忌憚なく発しあう多様な意見が交流する場が不可欠である。そして近年、哲学カフェがそうした対話の場として全国にひろがりつつあるが、本事業はささやかではあるが三重県におけるそのような場となりゆくことで、地域貢献に資することができればとかがえている。

【昨年度からの課題】

より多くの多様な属性を有する人々に参加していただけるよう広報と実施の方法を工夫する。

I. 活動計画

数値目標：年1回の開催。参加人数10名。

II. 活動の結果と評価

今年度の活動はとりやめとなった。その経緯・理由は以下のとおりである。

当初計画では、対話のテーマを「経験」とし、2022年2月14日に実施する予定で準備を進めていた。しかし2022年1月に三重県内に蔓延防止法が発令され、それにともない実施日時をいったん3月前半に変更した。その後、3月6日に三重県における蔓延防止法は解除される運びとなった。しかしながら(1)3月2日の時点では、県内の感染者の減少は小康状態に達したとまではいえず、いまだ先行きが不透明な情勢にあること、(2)「対面」「対話」をエッセンスとする本事業の性格、以上の点に鑑みて実施した場合の感染リスクが排除できないこと、以上の2点に鑑み、今年度の本事業は中止が適当と判断し、その旨を地域交流センターに報告のうえ承認を得た。

Ⅲ. 今後の課題

今年度の活動がとりやめとなってしまったことを、事業担当者一同、衷心より遺憾におもっている。来年度こそは、開催時期を見誤らず、またより多くの多様な属性を有する人々に参加していただけるよう広報等の工夫を凝らして実施したい。

6) 災害に備えよう

担当者： 山本翔太、中西貴美子、清水律子、菅原啓太、上杉佑也、荻野妃那、竹村和誠、
荒木学、小林奈津美

【事業要旨】

本事業では、保健センターや自治会等の協力を得ながら啓発活動を行い、地域住民の防災・減災力向上に寄与することを目指す。

【地域貢献のポイント】

1. ブース来場者を通じて、災害時の健康管理に対する平時の備えの知識を広く発信できる。
2. アンケート結果および津市の健康づくり計画における災害の取り組みに関する話題提供等から、個人や地区組織で取り組む防災・減災対策を図ることができる。

【昨年度からの課題】

平成27年度より活動している本事業は、これまでに津市内のイベントや学祭で啓発ブースを開設するなどの活動を行ってきた。今年度においても、津市内のイベントで啓発ブース開設の実施を予定していたが、COVID-19の影響が懸念され、実施は困難な状況が予測される。このような状況下においても、情報を発信することが可能な方法を検討することが課題である。その方法の一つとして、地域住民の一員である本学学生を対象とした啓発活動等を検討していくことが必要である。

I. 活動計画

<数値目標>

1. 啓発ブースを開設（年1回）
2. 地域住民や学内関係者への情報発信（年1回程度）
3. 学生ボランティアの協力（1～4年生 3～5名程度）

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 啓発ブースの開設

令和3年11月1日（月）～ 11月10日（水）の期間において、本学実習棟1階学生ホールにて啓発ブースを開設した。当初、啓発ブースの対象は地域住民を含める予定であったが、COVID-19の感染状況を鑑みた結果、学外の来場者を制限し、本学学生のみとした。感染対策に留意しながら下記のテーマ、内容で実施した。

- テーマ：実物を見てみよう！防災展示会
- 内容：避難所における居住スペースの再現（段ボールベッドやパーテーション・簡易トイレの設置）、防災グッズや避難所における供給品の展示

評価は参加者の防災意識の向上を目的に、Microsoft Formsを利用したアンケートを実施した。学生ボランティアは本学1年生4名、2年生3名が参加した。

2. 学内外への情報発信

MCN レポートにて、啓発ブースに関する情報発信を行った。



【ブース全体】



【避難所における居住スペース】



【簡易トイレ】



【個人で準備する防災用品】

< 評価 >

1～4年生の学生39名より Microsoft Forms アンケートの回答が得られた。

非常用持ち出し用品を準備していると回答した参加者の割合は5割であった。その内、9割以上は水と食料（ご飯、レトルト食品、乾パンなど）を準備していたが、防災用ヘルメット・防災ずきん、携帯ラジオを準備していた参加者は2割以下であった。非常用持ち出し用品を準備していないと回答した参加者の回答理由は、「大変」、「その時になれば水道水を準備したり、家にあるお菓子やカップ麺を持ち出せるから」であった。以上のことから、近年の大型台風による水害等の影響を受け、災害対策について学生の関心が高まっている現状があると考えられる。一方で、非常用持ち出し用品を準備している学生は、約半数に留まっており、防災への関心はあるものの準備行動へつなげることができていないと言える。

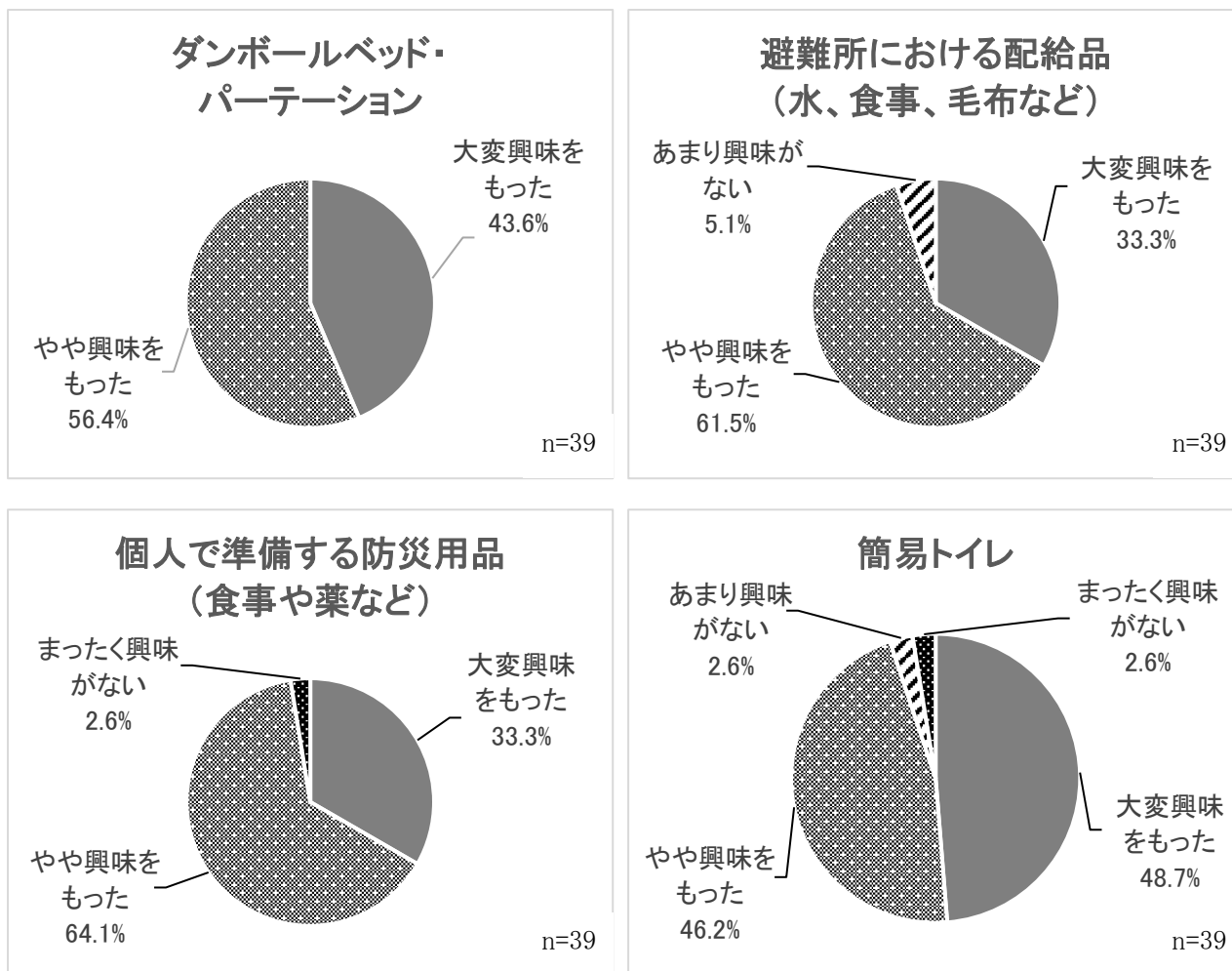
防災意識や関心については、3割の参加者が「とても意識・関心がある」と回答した。「やや意識・関心がある」と回答した参加者は6割、「あまり意識・関心がない」と回答した参加者は1割であった。「全く意識・関心がない」と回答した参加者はいなかった。今回の展示会について、防災意識の向上に「大いに役に立った」と回答した

参加者は4割、「役に立った」と回答した参加者は6割、「あまり役に立たなかった」と回答した参加者は若干名いた。参加者からは「実際の避難所のイメージができた」、「防災の準備すべきものを把握できた」、「具体的に準備しやすくなった」といった意見があった。また、水や食料の備蓄だけでなく、毛布や医療品等の日常生活用品を備蓄する必要性を再認識する回答があり、防災意識の向上に繋がったことが示唆された。

啓発ブースの展示物について、参加者の感想は図1のとおりである。学生ボランティアは、段ボールベッドの組み立て作業や啓発物の作成等を通じて、今回の活動に触れる機会となり、有益な活動であったと考えられる。

上記の内容から、啓発ブースの開設と学生ボランティアの協力に関する数値目標は達成することができた。また、MCNレポートにて学内外に情報発信を行ったことから、地域住民や学内関係者への情報発信に関する数値目標についても、達成することができた。

【図1 展示物を見学した参加者の感想】



III. 今後の課題

今回の活動に関して、開催周知方法やアンケート内容等を見直し、より多くの参加者を確保するための工夫が課題である。また、今後は、学生の防災意識を具体的に捉えた上で、防災行動に結び付く啓発活動を実施していく必要があると思われる。

7) みかん大「暮らしの保健室」

担当者： 篠原真咲、六角僚子、平生祐一郎、星野郁子、長谷川明子、犬飼さゆり、荒木 学
橋本千愛、大西範和

【事業要旨】

みかん大を拠点として、「暮らしの保健室」を開設する。看護職が無料で予約なしで相談に応じる。暮らしの保健室では、①相談窓口（暮らしや健康に関すること）、②在宅医療や病气予防について市民の皆さんとの学びの場、③楽しい活動やおしゃべりなどの安心な居場所、④世代を超えてつながる交流の場などとして多くの方に利用していただきたいと思う。血压や骨密度測定なども無料で測定できる。さらに、フットマッサージやアロマハンドマッサージなども看護職が実施して、楽しいおしゃべりをしてお互いに癒される場所でありたいと考える。

【地域貢献のポイント】

看護大学という特徴を活かし、ご自身の健康や介護等を気軽に無料で相談できる場所である。大学と地域の交流を「健康」を通して、気軽に自分の身体や心と向き合い、楽しい毎日をお互いに過ごしていけるように支援していきたい。また、ボランティアさんの活動を支援して、大学を拠点として地域が活性化していくことにつなげていきたい。

【昨年度からの課題】

コロナ感染予防には細心の注意を払って実施しているが、感染拡大してまん延防止重点措置などが発令中は、中止することで、来てくださっている方々と交流が止まってしまう事である。オンラインやお手紙等で交流が途絶えないようにしていくことも検討していく。

I. 活動計画

地域への広報活動とともに、来ていただいた方が安心していただける居場所を提供すること。さらに、学生がボランティアに参加することで、世代間交流やコミュニケーションスキルの向上等教育的支援も課題とする。

さらに、コロナ感染の感染者数に応じて無理なく開催していく。感染者を出さないように開催していくことが重要である。

コロナ感染者が増加した後の開催では、グリッターバッグ[®]を用いた正しい手の洗い方を可視化して、住民に手洗いとアルコール消毒液を用いた正しい手指消毒の方法についてミニ講義を行った。知っているつもりでも再度確認していくことが目に見えないウィルスを体内に持ち込まないことにつながる為、定期的で開催し、認識を深めていく。

また、夏の開催時には、脱水予防の講義も実施し、住民と学生が共に学び、具体的な予防方法について考えていくきっかけづくりも行った。

本学の学生にとっても地域の方々から声を掛けていただき、地域の方との距離が縮まり積極的にコミュニケーションを図ることができている。



「暮らしの保健室」

三重県立看護大学で「暮らしの保健室」開催します！
 だれでも、無料で健康チェックができます。
 皆さまの健康管理やお悩み相談等にお答えします。経験豊富な看護師
 保健師、助産師とその仲間がお待ちしております。



開催日：毎月第3木曜日
 4/15, 5/20, 6/17, 7/15, 8/19, 9/16,
 10/21, 11/18, 12/16,
 R4 1/20, 2/17, 3/17
 開催時間：10時から12時まで
 参加費：どなたでも無料
 場所：三重県立看護大学実習棟1階



内容：健康チェック（身長・体重・血圧・血管年齢・脳内年齢・握力・骨
 密度・貧血チェック・ストレスチェック等）、簡単な体操やゲーム等を行
 いながら自分の体をチェックしましょう！
 小さいお子さんとそのご家族の参加もありますので、お気軽にお立ち
 寄りください。



※新型コロナウイルス感染拡大のため、体温37.5度以上ある方の参加
 はご遠慮ください。またマスクの着用をお願いします。
 ※「3密」を防ぐために参加者が多数の場合には、入場制限もしくは時
 間をずらしての入場となることをご了承ください。
 ※新型コロナウイルスの感染の状況により中止となる場合がありま
 すので、ホームページ等で確認をしてください。



【ご連絡先】 三重県立看護大学
 榎原真咲（在宅看護学）電話番号：059-233-5600（内線：5315）
 星野郁子（地域交流センター）電話番号：059-233-5610



II. 活動の結果と評価

1. 年間実施内容と参加人数

開催日	内容			
2021/4/15 (木)	健康チェック、フットケア、アロマハンドマッサージ、	6	15	9
2021/5/20 (木)	健康チェック、フットケア、アロマハンドマッサージ	4	15	12
2021/6/17 (木)	健康チェック、フットケア、アロマハンドマッサージ	6	16	8
2021/7/15 (木)	健康チェック、フットケア、アロマハンドマッサージ、「脱水予防について」	6	22	8
2021/10/21 (木)	健康チェック、フットケア、アロマハンドマッサージ、「手の洗い方講座」	4	19	8
2021/11/18 (木)	健康チェック、フットケア、アロマハンドマッサージ	7	23	8
2021/12/16 (木)	健康チェック、フットケア、アロマハンドマッサージ	7	22	12

*2021年8月・9月、2022年1月・2月は、「まん延防止等重点措置」発令中のため、開催を中止とした。

<評価>

県民、学内教員や学生の参加も昨年度よりも増えており、認知度が上がっている。津市の広報誌にも掲載されていることで、新規参加者も増えてきている。健康というキーワードと共に、地域の方々の交流の拠点の場作りになりつつある。

III. 今後の課題

次年度も継続して実施できるようにする。測定機器の修理や点検が高額であるため、次年度は、参加費を徴収して継続していきたい。参加費によって参加者が少なくなってしまう事も予測されるため、予算の確保と共に、ボランティア活動をすることで、当日測定のために支払う費用負担がなくなるような取り組みを考えていきたい。

8) Re-mamma Café (リマンマ カフェ)

担当者： 大川明子、小林奈津美

【事業要旨】

乳がんの治療に伴い乳房切除術をおこなった患者の乳房パットを作成する。参加者は患者さんを含めて誰でも参加でき、ご自身の胸の大きさに合わせたオーダーメイドの乳房パッドを参加者ご自身で作成する。素材はダブルガーゼで、中身は樹脂ビーズを使用し、肌ざわりや汗も吸い取り、洗濯も可能で、乾燥性も抜群である。講師は乳房切除術を体験した人であり、病気の語り合いもおこなっている。

【地域貢献のポイント】

医療施設以外でも乳がん患者のケアができること、生活している地域だからできるケアを考え、患者の日常生活の活性化につなげていく。また、患者同士が語り合い、がんとともに生きる場の提供ともなる。

I. 活動計画

＜数値目標＞

3回の開催に各5名の参加者を目標とする。

＜実施計画＞

1回目は乳房パットを作成する。

2、3回目は作成した乳房パットの状態・状況、病気のことなどを話し合う会を開催する。参加者の要望を知る。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 本事業の周知

治療施設（四日市市立病院、三重県立総合医療センター、鈴鹿中央総合病院、鈴鹿回生病院、松阪市民病院、松阪中央病院）に右図のチラシを配布した。

2. 乳房パットづくりの実施

1) 令和3年7月30日、11月12日を計画したが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、参加申し込みが1名であった。

＜評価＞

参加者は罹患して間もない状況であり、情報を求め参加したと述べていたことから、本事業が情報交換の場になると考えられる。

III. 今後の課題

COVID-19 感染の状況に合わせ開催を実施していく。

来年度は COVID-19 感染が収束して実施できることを願う。

Re-mamma Café (リマンマ カフェ) 令和3年度地域交流センター事業

体験者と一緒に、自分に合った快適な乳房パッドを、楽しく作りませんか？

- ご自分の胸の大きさに合わせて簡単に作れます。
- 洗濯が可能で、すぐに乾きます。
- 中身に樹脂ビーズを使うので、重みもあります。
- お手持ちのフルカップブラに、直接入れる事ができます。
- ガーゼ・タオルが汗を吸い取ります。
- 術後間もない方から、再建ご予約の方にも快適です。

開催日時：令和3年11月12日（金）13:00 - 16:00
応募締切：令和3年11月5日（金）
開催場所：三重県立看護大学 研究棟1階 中会議室
参加費：2,000円（含 材料費、お茶菓子代）
申込み：下記にメールでお申込み下さい（先着5名）
akiko.okawa@mon.ac.jp
三重県立看護大学 大川明子

当日、感染対策のため、ご参加の際はマスク着用の上ご参加下さい。また、体温37.5度以上の方は参加できません。感染状況により、中止となる場合があります。県立看護大学のホームページ等でご確認の上、ご参加下さい。

9) みかん大健康バドミントン教室（中級編）

担当者： 大西範和、西山修平

【事業要旨】

スポーツは行って楽しいことが大きな価値である。バドミントンで良いプレーをするためには、スピードやスタミナはもとより、技術や戦術を身につけることが大切で、そのレベルが高い方が楽しみも深まる。しかし、技術や戦術はただやっているだけでは身につくのに時間がかかり、中級者から抜け出て上級者に至る以前に楽しさが感じられなくなり、止めてしまう人も少なくない。当事業では、ある程度上達したものの、その先なかなかレベルアップしないと感じているプレーヤーを対象に、技術練習やゲームをともにしながらアドバイスし、参加者が技術や戦術の向上やそのきっかけを掴み、上達の可能性を楽しく追及し続けられるよう支援することを目指す。また、バドミントンをプレーすることで、体力の維持・増進を促し、ストレスの解消や健康意識の向上を図る。

【地域貢献のポイント】

スポーツは、中級以上のレベルになると、さらなる上達を図っても始めた頃より目に見える成果が出にくくなり、動機づけが低下しやすい。このことは、スポーツ活動の中止や中断に繋がり、運動不足の状態に陥るリスク要因となり得る。当事業では、生涯にわたりバドミントンが楽しめるよう、中級レベルのバドミントン愛好者の技術や戦術の向上を図る。これにより、運動習慣の維持を促し、体力や健康の維持増進に貢献する。

I. 活動計画

＜重点課題＞バドミントン教室を1回実施する。

＜実施計画＞地域の中級レベルのバドミントン愛好者（最大20名）を対象に、本学体育館において、2時間のバドミントン教室を1回実施する。教室では、ラケットワークやフットワークなど基本技術の確認や陣形をはじめとするゲーム中の戦術の展開などについて紹介する。また、近隣の高等学校などの部活動を招き、レベルに応じて参加者の課題解決に貢献できるよう助言などを行う。以上の手段によりバドミントンの技術・戦術を楽しく身につけるとともに、生涯にわたりスポーツや運動に慣れ親しんでもらえるよう意識の醸成を図る。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

令和3年度は、新型コロナウイルス感染拡大の推移を見ながら、開催について模索していた。秋口より感染者数に落ち着きが見られたため、募集を開始しようとしていた矢先に第6波が到来し、結局募集を見送り、開催することはできなかった。その間、担当で技術・戦術やその指導方法について検討するとともに、それを実現できるよう研鑽を図った。

＜評価＞

令和3年度は、東京オリンピック・パラリンピックなど最高レベルの大規模な競技会は、バブル方式により完全に隔離することを前提に実施されたが、市民レベルの活動では、小

規模なスポーツ活動でさえリスクを無視できず、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の出されている状況下では、ほとんどのスポーツ活動は中止や自粛を余儀なくされた。当事業においても、教室を開催することはできなかったが、担当者間での指導プログラムの検討などについては準備ができ、十分に実施可能な状態にある。今後新型コロナウイルスの感染リスクを前提とした生活が求められていく中、スポーツに関わる楽しみや生き甲斐といった価値をどのように得ていくか、現在も社会的な模索がなされている。それは当事業においても大きな課題であり、国や県、各種競技団体とくに日本バドミントン協会の出すガイドラインなどを参照しながら、バドミントンやその他のスポーツの愛好者を増やし、生涯スポーツとして、楽しく継続できるよう支援することが可能な方向性であると考えられた。

Ⅲ. 今後の課題

教室を開催する準備は整っている。令和4年度も、新型コロナウイルス感染の動向やその対策、日本バドミントン協会などの出すガイドラインなどを注視しながら、教室の開催を模索していきたい。また、不特定多数の人が集まる教室を開催するより、常時一緒にプレーしている学校の部活動などを本学体育館に招く方が、参加者にとってより安全な支援となると考えられる。さらに、小・中学校や高等学校に対してアプローチすることは、本学への進学を考えてもらう良い機会にもなるとも考えられ、小・中学校や高等学校と大学との架け橋になる可能性があるという点でも当事業の意義が認められる。令和4年度は、近隣の学校の指導者などとコンタクトをとることを検討したい。

10) みかん大バリスタ for 認知症カフェ

担当者：大西範和、小松美砂、犬飼さゆり、清水律子、鈴木聡美、菅原啓太、平生祐一郎
西川真野、長谷川明子

【事業要旨】

認知症になると、当事者はもとより家族や介助者が抱える強いストレスは継続的で、軽減する機会がほとんどないといえる。認知症カフェは、集い話す場であり、ストレスや緊張の緩和に有益であるとして注目されている。本学は、令和2年度まで4年間認定看護師教育課程（認知症看護）を設置し、県内に認定看護師（認知症看護）を多数輩出している。修了生は、所属機関においての活躍が期待されており、中には、所属する医療機関などで認知症カフェを企画する試みもなされている。一方、コーヒーは神経や筋肉に作用して心身の回復を促進するといわれ、健康効果が高いといわれている。こころのリラックスにも効果があるとされることから、認知症カフェにおけるコーヒーの役割は単なる飲み物という以上の価値があるといえる。当事業では、認定看護師教育課程修了生が行う認知症カフェに共催し、豆から抽出した本格的なコーヒーをその場で提供することによりその開催を支援する。

【地域貢献のポイント】

認知症の当事者・家族や介護者の日常的なストレスの緩和に寄与しながら、認定看護師教育課程（認知症看護）の修了生の活動を支援できる。また、本学の専門性を活かした情報提供等の取り組みにより、来場者の生活の質向上に貢献できる。認定看護師教育課程の修了生、本学の教員やボランティアとして参加する学生の交流が深まることや、学生が認知症カフェを体験できることで、三重県の看護の将来的な質向上に貢献できる。

I. 活動計画

＜重点課題＞令和2年度までに地域交流センター教員提案事業「みかん大認知症カフェ」で共催した外部機関が、令和3年度に認知症カフェの事業を再開する場合にそれを支援する。新たな要請に対してはできるだけ対応する。

＜実施計画＞令和2年度までに地域交流センター教員提案事業「みかん大認知症カフェ」で共催したイベントは、本学夢緑祭、鈴鹿中央総合病院（鈴カフェ）と榊原温泉病院（ぬくぬくカフェ）、志摩市認知症・障がい福祉啓発事業「しまこさん福福（ふくふく）まつり」および「第11回全国若年認知症フォーラム in 三重 四日市」での若年性認知症カフェであり、これらからの引き続きおよび新規の要請に応じて、実施団体と協力してカフェの運営を支援する。カフェでは、認定看護師教育課程の修了生の企画者が、参加者と充分に交流できるよう、コーヒーの提供を担当し、挽いたコーヒー豆をドリップする方式で本格的な味と香りで、円滑なコミュニケーションを図ることができるよう支援する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

令和3年度は、要請があれば対応できるよう準備を整えていたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、令和2年度までに共催した病院や団体からの引き続きや新規の要請がなく、認知症カフェは実施できなかった。

<評価>

当事業は、令和2年度までの「みかん大認知症カフェ」の事業に引き続き、病院などの要請に応じて実施できるように準備を整えていた。年度当初から、病院などがカフェを開催することが難しいことは想定していたが、開催される可能性もあることから、その際には支援できるよう受け皿を準備していた形である。しかし、令和3年度に認知症カフェ開催支援の要請はなかった。今後新型コロナウイルスの感染リスクを前提とした従来とは異なる生活様式が求められていく中、高いレベルで新型コロナウイルスの感染対策を行っている医療機関などに赴き、飲み物を提供する形の事業は受け入れられるとは考えにくく、当面地域貢献の手段としては実際的ではないと推察された。

III. 今後の課題

当事業は、令和3年度に3年間の事業として提案したものである。しかし、前述のように、計画期間中に支援の要請があるとは考えにくく、令和4年度には取り下げて2年目以降を中止することとしたい。認知症カフェは、認知症当事者、家族や介助者にとっては、数少ない憩いの場であると考えられ、何らかの形でそのような場を支援することは本学の地域貢献として意義がある。今後、感染の状況や認知症の支援に関する社会的支援の状況を見ながら、再開を含めて支援の形を模索していきたい。

11) 児童英語教え方講座

担当者： 林姿穂、多久和有加

【事業要旨】

コロナウイルスの感染拡大が加速する中で、子どもたちが少しでも有意義な時間を保護者と過ごせるように保護者向けに親子での英会話の家庭学習の方法や児童英検対策について紹介する。9月に週一回のペースで3回にわたって、講義動画のリンクをメールで受講者に送信した。その後、受講者から個々にメールで質問を受け、随時メールで回答した。講義動画の中では、自宅で使える市販の英語教材やその使用方法などを説明した。

【地域貢献のポイント】

- 1) 自宅に居ながら、児童英検対策や最近の小学校における英語教育の実情についての知識を保護者が習得することができる。
- 2) 子どもたちが自宅で学びある有意義な時間を過ごすことができる。
- 3) 本学教員が、英語の家庭学習に関する相談の窓口になることができる。

I. 活動計画

<重点課題>

オンデマンド形式で、動画の URL を受講者のメールアドレスに送信するという方法をとることで、津市以外の方が参加しやすいよう工夫した。本学のウェブページでの宣伝や、紙媒体での広告を夢が丘地域に配布することで参加者を募った。

<実施計画>

8月に広告を作成し、夢が丘地域に配布すると共に、本学のウェブページで参加者を募る。その後、9月から週一回の講義動画のリンクをメールで送信する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

12名の参加者があった。そのうち、津市外からの参加者は2名であった。講義終了後、受講者とその子ども向けに、個別相談会を企画したが、コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、参加希望者はなかった。

<評価>

今後も同様の講座を開講してほしいとの声が複数あった。津市外の受講者の相談や質問にもメールで対応することができ、本学教員が、英語の家庭学習に関する相談の窓口になることができた。

III. 今後の課題

本講座は、担当者が退職するため本年度をもって終了する。

12) 英米文学作品を読もう

担当者： 林姿穂

【事業要旨】

本事業の目的は、平成26年度から令和元年度まで続いた「英語で話そう」の受講生が継続して学習できる場を提供することである。また令和2年度の「英米文学読書会」の受講生から、同様の事業を継続して欲しいという要望を受けたので、この事業を企画した。令和2年度と同様に、9月から10月にかけて、週1回のペースで、受講生に、英語の短編小説のフルテキストとその内容理解の問題およびディスカッションのトピックを、メールで送信した。短編小説の内容理解の設問に答えるための期間を一週間もうけ、その後に、解説動画のリンクを再度メールで送信するという方法で授業を行った。

【地域貢献のポイント】

- 1) 英米文学を通して地域住民が交流をはかりながら、異文化に触れることができる。
- 2) これまで学んだ英語を使って英文読解の練習ができる。
- 3) 自宅で英語圏の文学や文化を学ぶことができる。

I. 活動計画

<重点課題>

令和2年度の参加者が継続して学習を続けられる機会を提供するとともに、津市以外の地域からも参加者を募り、文学を通して地域住民と本学教員が交流を深める。

<実施計画>

8月中旬に、本学ウェブページと紙媒体の広告配布で本講座の宣伝を行い、2週間の募集期間を設ける。その後、9月1日から週1回のペースで講座資料と解説動画のリンクを受講生のメールアドレスに配信する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

6人の参加者のうち、4人が、昨年の「英米文学読書会」の受講生であった。オンライン上ではあるが、地域住民が交流できる場と学びの機会を再度提供することができた。講座修了時に講座の内容に関するアンケート結果を行った結果2人から、今後も継続して受講したいという旨の肯定的な回答が得られた。本年度新たに、夢が丘地域から1名、津市外から1名の参加者があった。

<評価>

ウェブページの宣伝効果で、津市以外の方とも交流を図ることができた。今後も同じような講座が開講されることが望ましい。

III. 今後の課題

本事業は、担当者の退職に伴い、本年度をもって終了することとなった。

13) 手洗いチェックしてみませんか？

担当者：上杉佑也、菅原啓太、岡根利津、竹村和誠、山本翔太、小林奈津美、橋本千愛、
西山修平

【事業要旨】

新型コロナウイルス感染症の蔓延が問題となる中、感染予防行動への意識が高まり、その重要性も増している現状にある。そこで、本事業は地域のイベント・地域住民の交流の場等で、感染予防行動に関する説明や体験を通して、地域住民の健康意識の向上に貢献するものである。

【地域貢献のポイント】

- ・ 本学の教員の専門性の活用
- ・ 本学所有の機材の有効活用
- ・ 本学の地域貢献活動への広報的効果
- ・ 地域住民の健康意識向上への寄与

I. 活動計画

1. 地域のイベント等での事業実施：1回
2. 事業参加者：5名以上
3. 学生ボランティア：2名以上

II. 活動の結果と評価

＜結果及び評価＞

事業実施時に使用する『手洗い評価システム』を取り扱う業者を招いて、操作の確認を行った。また、合わせて実施内容について検討を行い、10月30日を事業実施日として準備を進めてきた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の全国的な蔓延状況を鑑み、事業実施日の状況の予測がつかないことから、安全のため今年度の事業実施を断念した。そのため、掲げていた事業目標を達成することはできなかった。

III. 今後の課題

地域住民を招いて手洗いを実際に行うという事業の性質上、参加者の安全を確保することが必要なため、新型コロナウイルス感染症蔓延状況の見通しがつかない中で事業の実施・広報をすることが難しかった。次年度も、安全を念頭に置きながら日程や開催方法を検討していくとともに、引き続き開催が難しい状況に陥ることも考えられるため、感染予防行動に関する地域住民の意識向上に寄与できる、接触を伴わない事業展開についても検討していく。

14) 医療的ケア児と家族のピアネット支援

担当者：上杉佑也、宮崎つた子、中北裕子、川瀬浩子

【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子どもを養育している家族は、家族で過ごせる喜びを感じる一方で、心身ともに疲弊している現状にもある。同様の体験を持つ家族との交流が不安や孤立感解消に繋がるといわれているが、そのような機会は少ない現状にある。本事業はピア・サポートの観点で多職種が協働して家族会を支援する事業である。

【地域貢献のポイント】

地域の医療機関・専門職との連携及び本学の専門性（研究成果の還元を含む）を活用しながら、家族同士の交流を求めるといふ養育者のニーズへ対応する。すなわち、ピア・カウンセリング、ピア・エデュケーション効果のあるピア・サポートの場として、家族会の開催によるネットワークづくりを支援することで、参加者の困難感の軽減、新たな知見の発掘に寄与する。

I. 活動計画

1. 家族会の開催あるいは開催支援：1回以上
2. アンケート結果の参加者満足度（4件法）：平均3以上
3. 事業参加者：5名以上
4. 学生ボランティア：1名以上

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 第1回家族会

1) 概要

(1) 日時：方法

令和3年10月2日（土）10時～12時：オンライン（web）交流会

(2) 参加者について

①サポーター及び助言者（計5名）

本学教員4名、医師1名

②一般参加者（計8名）

母親8名

2) 内容について

「災害の備えについて今実際に困っていること、不安なこと」をテーマに、助言者の医師より資料を用いた説明を受けた後、話題提供者の保護者から実際に行っている防災準備の紹介があった。その後、参加者の自己紹介と防災準備状況および質疑応答を含め、お互いの不安なことなどを話し合った。参加者は画面を通じて実際に準備している物品を互いに見せ合ったり、準備や被災した際の体験について話された。

3) アンケート結果

回答者は10名であった。

(1) 交流会全体(方法、日時、会場、進行等)について

『とても満足』『満足』合わせて100%であった。

(2) 交流会の内容について

『とても満足』『満足』合わせて100%であった。

(3) 参加者の声として、以下のような意見があった。

- ・ 子どもがいるので、家でZoomを使って参加できるのは参加へのハードルが低くなった。もしどこかの会場での開催だったら行かないであろう夫もZoomなら一緒に聞いてくれたので嬉しかった。
- ・ 先生のお話も、お母様のお話も、大変勉強になった。日々のケアや生活に追われ災害時の対策をしていく余裕がなかなか無いのが現状だが、これから少しずつ進めていきたいと思うきっかけになった。
- ・ 他家が行っている防災、自分が気づいていなかったことなどを聞いて良かった
- ・ コロナウィルスの影響もあって、医療的ケア児のお母さん同士で集まって話をする機会もなかなか持てず、孤独感もある。オンライン上でもこういう機会があると、ありがたい。内容に関わらず、今後も家族同士で交流できる機会があると嬉しい。

2. 第2回家族会

1) 概要

(1) 日時、方法

令和3年11月6日(土)10時~11時30分 : オンライン(web)交流会

(2) 参加者について

①サポーター及び助言者(計4名)

本学教員4名

②一般参加者(計4名)

母親3名、父親1名

2) 内容について

話題提供者である医療的ケアが必要な児の父親が、「仕事が多忙でなかなかケアに関われない自分一我が家の現状と意思」について話した後、参加者の自己紹介と質疑応答を含め、互いに聞きたいことなどを話し合った。参加者は、各家庭の父親の状況やストレス解消法などの工夫について話された。

3) アンケート結果

回答者は7名であった。

(1) 交流会全体(方法、日時、会場、進行等)について

『とても満足』『満足』合わせて100%であった。

(2) 交流会の内容について

『とても満足』『満足』合わせて100%であった。

(3) 参加者の声として、以下のような意見があった。

- ・ 父親に来ていただいたことで、父親側からの立場の話が聞けた。

- ・ 他のご家族様のお話はとても貴重だったので、今回のような場合は、母親だけでなく、父親にも参加してほしいと思った。
- ・ 対面だとなかなか難しいですが zoomだと自分のタイミングで参加できよかった。
- ・ お父さんの話を聞いたり話をする機会は普段なかなか無いので、とても貴重な機会だった。参加人数も多くなかったので、気楽に話せてとてもよかった。

<評価>

COVID-19の蔓延状況を鑑み、オンラインでの家族会を主軸としたため、学生ボランティアを要することがなく、目標値を達成することができなかったが妥当な判断だったといえる。他の目標値は十分に達成することができ、アンケート結果及び参加者の肯定的な声からも、交流を求める家族のニーズを満たし、困難感の軽減や新たな知見の発掘に寄与する事が出来たと考える。また、オンラインで行うことで、参加がしやすくなったことや実際に今自宅で使用している物品等を簡便に確認できるなど、オンラインで行う利点も多く感じる事ができた。

Ⅲ. 今後の課題

保護者からの提案で「災害の備え」についての交流会を行うことができ、当事者主体のピア・サポートとしての活動が行えつつある。本年度より、三重県全体の重症児の家族会が発足され、今後ますます当事者主体に家族会が盛り上がっていくことが期待される。一方、子育てとケアの両側面、あるいは仕事等も抱える養育者が主体的に家族会を運営していくことは難しい部分もある。また、家族の状況によって、小規模での交流が必要であったり、同じ当事者でも受容の段階が異なったり、交流を求めるのか新たな知見を求めるのか、ニーズは様々といえる。当事者の主体性や個々のニーズに応じた人数設定や開催方法、参加する専門職を検討し、定期的に行うことができるよう、家族同士の交流の機会を支援していきたい。

15) みかん大もの忘れ相談

担当者：六角僚子、篠原真咲、小池敦

【事業要旨】

もの忘れなど認知症発症の不安などを抱えている本人とその家族の悩みを少しでも解消し、関連機関と連携を図る。

【地域貢献のポイント】

もの忘れなどの認知症の症状に不安を抱く地域の方々の悩みを傾聴し、対応方法や関連機関の紹介などが行え、地域連携が図れることが重要であると考えます。

【昨年度からの課題】

新たな取り組みであるため、特になし。

I. 活動計画

<重点課題>月一回の相談開催とし、相談件数は一回あたり2件とする。

<実施計画>

以下のようなスケジュールで実施計画した。

毎月第3木曜日 10時から12時 予約制一人30分の相談とした。

また実施計画に当たり、必要なもの忘れスケールアプリやカルテ用紙等を準備した。

II. 活動の結果と評価

<結果>

10月と2022年1月に1名ずつ予約が入ったが、コロナ拡大のため相談を中止とした。予約者については、本人・家族に中止連絡と了承のうえで最寄りの地域包括支援センターでの相談を勧めた。

<評価>

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、開催中止が継続し、今回の結果に至った。今後地域住民との相談方法について、オンラインを含めて工夫を図ることが重要であると考えます。

III. 今後の課題

1. 相談開催日時やオンライン相談のあり方を考えること。

16) 社会的養育が必要な子どもを育てる家族の交流支援事業

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、中北裕子、川瀬浩子、長谷川明子

【事業要旨】

本事業は、地域の関係団体等と協力・連携して、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を提供し、同じ状況の親・家族同士の仲間づくりを支援する事業である。

【地域貢献のポイント】

本学の専門性を活用し、社会的養育のもとで暮らす子どもの親や家族のニーズへの対応を行い、子育て不安の軽減や児童虐待防止に貢献する。

I. 活動計画（3年計画の1年目）

1. 数値目標

- 1) 福祉、関係機関・団体から協力・連携希望：1件以上
- 2) 親や家族の交流会の開催支援回数と参加人数：1回以上、参加人数延べ5人以上
- 3) 参加者のアンケート満足度（5件法）：4以上

2. 実施計画

- 1) 事業実施のための広報
- 2) 事業の実施

連携団体と協力して、親・家族の交流会（相談会）を企画、実施・運営、評価する。

II. 活動の結果と評価

福祉、関係機関・団体から協力・連携希望が1件あり、年度当初は9月に社会的養育が必要な子どもを育てる親・家族の交流会を開催する予定であったが、COVID-19の感染拡大のため、実施時期を再検討し、開催時期を2月に延長することを決定した。2月の交流会実施に向けて、関係者との打ち合わせを2回、里親会での打ち合わせを1回行った。しかし、その後もCOVID-19の感染拡大の状況が続いたため、連携先の担当者との協議で交流会の開催中止を決定した。

福祉、関係機関・団体から協力・連携希望が1件あり、連携目標数は達成したが、その他の数値目標は達成できなかった。

III. 今後の課題

今後もCOVID-19の感染予防対策を徹底しながら、小規模な交流会やリモート交流会などの新たな方法を検討し、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を提供して、仲間づくりを支援できるように努めていきたい。

Ⅱ．卒業生支援事業

- 1．卒業生支援プロジェクト
- 2．卒業生のきずなプロジェクト

1) 卒業生支援プロジェクト

担当者：長谷川智之、齋藤真、岩田朋美、田端真、荒木学、小林奈津美、長谷川明子

【事業要旨】

本事業は、卒業生相互の情報共有およびキャリアディベロップメントを支援することを目的に、同窓会と連携し各種事業を展開する。今年度は、①卒業生調査の結果公表、②卒業生を対象とした託児サービス付き公開講座および茶話会の実施、③在校生に対する同窓会の周知を実施する。

【地域貢献のポイント】

本事業における地域貢献のポイントは3点挙げられる。1点目は、卒業生調査の結果から卒業生のニーズに対応するための企画立案を検討することができる。2点目は、本学の公開講座に卒業生を対象とした託児サービスを付加することで、子育て中の卒業生にも来学する機会となり、卒業生同士の近況共有の場を提供できる。3点目は、卒業生の活躍を在学生在が知ることで、在学生の進路選択の一助となり、県内就職率の向上に寄与できる。

【昨年度からの課題】

昨年度からの課題として、卒業生調査の結果を事業計画に反映させた同窓会と合同の卒業生支援事業の実施および在校生に対する同窓会周知が挙げられた。

I. 活動計画

1. 卒業生調査結果を紀要に投稿し公表する。
2. 託児サービスおよび茶話会は10名の参加者を目指す。
3. イベント時に在校生に同窓会とその活動を周知する。
4. 事業実施者による意見交換会を年3回程度実施する。
5. 同窓会との意見交換会を年2回程度実施する。

II. 活動の結果と評価

1. 卒業生調査結果の投稿

本学が魅力ある大学として発展し続けるためには、卒業生が看護職者等としてどのようにキャリアを形成し、現在どのように働き、今後どのようにキャリアアップしていくことを希望しているかについて調査を行い、卒業生の実態を明らかにすることが必要である。そこで、卒業生の実態を明らかにすること、今後の大学運営・教育の改善、卒後教育の充実ならびに同窓会活動等の卒業生支援に役立てることを目的に、昨年度に本学同窓会と協働で卒業生調査を実施した。今年度は、卒業生調査についてプロジェクトメンバーで結果をまとめ、紀要に投稿するための原稿を作成し、令和4年3月に投稿した。本調査の結果から、本学の卒業生の約半数は現在も三重県内に在住しており、本学の統合カリキュラムによって看護師と保健師の国家資格を得ていることや助産師課程を有することで助産師の国家資格を得られる特性をいかして活躍していることが明らかになった。一方で、ワークライフバランスやキャリアディベロップメントの難しさの実態が明らかになった。卒業生

支援としては、大学と卒業生および大学と卒業生の所属施設が継続して交流を持ち、卒業生の継続学習や進学等のキャリアディベロップメントに関わる支援を行うことの重要性が示された。

2. 託児サービスおよび茶話会の開催

年度当初は、卒業生を対象とした託児サービス付き公開講座および茶話会の実施を検討していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大を懸念し中止を決定した。代替案として、第3回公開講座を、三重県立看護大学同窓会との共催により実施し、卒業生がオンラインで参加できるためのプログラム作成および準備について検討した。実際に、令和4年1月8日（土）に開催された第3回公開講座「『楽しむ』原点から学んだ指導」（講師：井村久美子先生）に先立ち、卒業生約1,300名に対し、オンライン参加のためのチラシを発送した。当日は、24名の卒業生がオンラインで聴講することができた。アンケート結果を表および図に示す。参加者の感想として、「“教えすぎない”ことの重要性を再認識した。本人の気づきを促す関わり方の考えていきたい」、「堅苦しくなく聴講することができた」、「オンラインだと手軽に参加できてありがたい、今後も続けてほしい」などの講座内容やオンライン参加に対する肯定的な意見がほとんどであった。

表1 参加者の概要

	n	(%)
年齢		
20代	2	8.3
30代	5	20.8
40代	16	66.7
50代	1	4.2
職業		
看護師	7	29.2
保健師	4	16.7
助産師	1	4.2
教員	12	50.0
公開講座の受講回数		
0回	15	62.5
1回	1	4.2
2回	2	8.3
3回	3	12.5
4回	1	4.2
5回以上	2	8.3

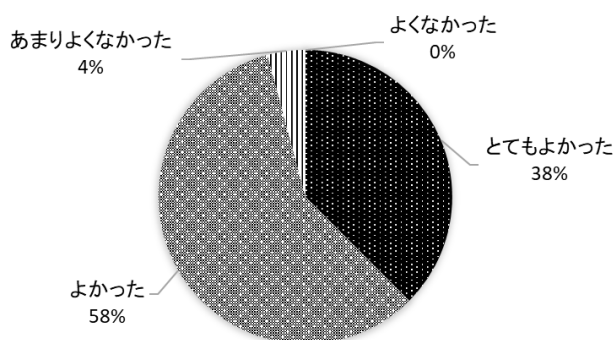


図1 公開講座の満足度

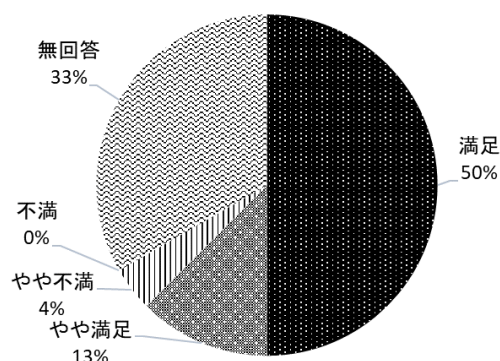


図2 オンライン環境に対する満足度

3. 在校生に対する同窓会の周知

本学大学祭「夢緑祭」での同窓会の周知を検討していたが、「夢緑祭」がオンライン開催となった。また、新型コロナウイルス感染症の拡大により、学生が参集するイベントの開

催が難しかったことから、同窓会を周知する機会を確保できなかった。令和4年度は、同窓会の周知活動ができるよう、イベント以外の機会も模索する。

4. 事業実施者による意見交換会の開催

事業実施者による意見交換会は、第1回は5月14日（金）、第2回は3月10日（木）に実施した。

5. 同窓会との意見交換会の開催

同窓会との意見交換会は3月中に実施した。今年度の活動内容の確認および次年度の活動内容の検討を行った。

Ⅲ. 今後の課題

卒業生が本学を身近に感じることができるよう、同窓会と連携し、卒業生に対する各種イベントの企画、発信を行っていく必要がある。今年度実施できなかった在校生に対する同窓会周知に関しては、次年度の4月の大学生協のオリエンテーションの際に、同窓会についての案内を行う。

2) 卒業生のきずなプロジェクト

担当者： 中北裕子、林辰弥、灘波浩子、日比野直子、川島珠実、上田貴子、長谷川智之、
荻野妃那、竹村和誠、西川真野、山本翔太、多久和有加、小林奈津美、辻まどか
橋本千愛、日置理瑚

【事業要旨】

卒業生が看護職としての職責を継続して果たせるよう、様々な相談に対応し、燃え尽き
および離職防止を図る。また同窓会と連携をとり、卒業生、同窓会との情報交換を行うこ
とにより、卒業生と大学との関係性の維持にも努める。

【地域貢献のポイント】

仕事上の悩みや複雑な人間関係を経験し、離職を考えることが多い卒後 1～2 年までの
卒業生を対象に、母校である大学がハード面とソフト面の資源を提供し、フォローするこ
とで離職防止を図る。この活動によって、卒業生が持続的に質の高い看護ケアを社会に提
供できることは、地域住民および社会に対しての貢献につながると考える。

【昨年度からの課題】

新型コロナウイルス感染症が収束しない時点での開催時には、各就職先に茶話会開催の趣旨をご
理解いただき、参加に協力してもらうことが不可欠である。安心して参加していただける
よう感染予防を重視し、方法や内容を慎重に検討していく必要があると考える。

I. 活動計画

<数値目標>

1. 昨年度本学を卒業した人を対象に茶話会を 2 回（7 月、3 月）開催する。
出席者数は、第 1 回、第 2 回茶話会それぞれ 30 名程度を目標とする。
2. 卒後 2 年目を対象に茶話会を 1 回（3 月）開催する。
出席者数は、30 名程度を目標とする。

<実施計画>

【茶話会の開催】

1. 卒後 1 年目の卒業生を対象とした第 1 回茶話会を 7 月、第 2 回茶話会を 3 月に開催する。
2. 卒後 2 年目の卒業生を対象とした茶話会を 3 月（卒後 1 年目卒業生対象の茶話会と同
日）に開催する。
3. 各職場の情報交換や、同窓生、教員と何でも話ができる場とする。全体会終了後、個別
に本学教員に相談できる時間をもつ。特に 3 月は 2 学年を同時に集合する場とするこ
とで、横のつながりだけでなく、縦のつながりを深める機会を作る。
4. 茶話会の開催に向けて
 - 1) 茶話会の案内を卒業生の就職先に郵送することにより広報活動を行う。
 - 2) 卒業生には卒業生アドレス等を活用して連絡し、会への出席を呼びかける。
 - 3) 同窓会には開催を事前に伝えることにより、同窓会との橋渡しを行う。
 - 4) 教職員への開催周知共に、参加協力を依頼する。

5. 茶話会の開催後

- 1) 茶話会終了後には、参加できなかった同窓生へのメッセージをまとめて卒業生アドレスを活用して、配信する。
- 2) 茶話会への参加協力についてのお礼文書を参加者の就職先に郵送する。

6. 卒業生への周知

- 1) 卒業式のリハーサル時に、「卒1対象茶話会の実施」を周知する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 第1回茶話会（卒後1年目対象）

- 1) 7月開催予定であったが感染症拡大防止のため開催時期を再検討し、8月7日（土）対面/Webハイブリッド方式開催とし、対象者の就職先となった医療機関39カ所に、案内通知を発送した。8月5日（木）、三重県内のCOVID-19の感染拡大状況を鑑み、オンライン（Zoom）のみの開催に変更、st217メーリングリストで周知した。
- 2) 令和3年8月7日（土）、オンライン（Zoom）茶話会には、卒業生11名、教員9名の計20名の参加があった。参加者全員が近況報告を行い、COVID-19対応最前線での活躍や新人職員研修の様子、福利厚生の実情について共有し、終始笑顔で「みんな、頑張ってるね!」と励まし合った。
- 3) 終了後のアンケートでは、開催方法、内容、回の長さについて全員が「満足」と回答し、全員が3月の茶話会開催を希望していた。一方、急遽対面での開催を中止したことについては、満足3名、どちらでもない4名、不満1名であった。他に、卒業後の支援として、進路やキャリアアップ、再就職支援を行う相談窓口の設置の希望があった。

【Web開催の様子】



【アンケート結果】 n=8

R3年度第1回茶話会	とても満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	とても不満
開催方法	3	5	0	0	0
開催時期	3	3	3	3	3
開始時間	2	5	1	0	0
時間（長さ）	2	5	0	0	0
開催内容	1	6	0	0	0
急ぎょ対面を中止したこと	1	2	4	1	0
3月に同様の企画を行うこと	5	3	0	0	0

2. 第2回茶話会（卒後1年目対象）

- 1) 活動計画では卒後2年目の卒業生も対象としていたが、COVID-19の感染拡大防止のため、卒後1年目のみを対象者とした。就職先（医療機関）39カ所には、令和4年3月5日（土）対面での開催予定の案内通知を1月初旬に発送した。
- 2) 三重県及び複数の自治体に3月6日（日）までのまん延防止等重点措置が発令されていたことから、令和4年2月22日時点でオンライン（Zoom）開催へと変更し、開催1週間前（2月25日）にst217メーリングリストで周知した。
- 3) 開催予定3日前時点で参加申し込みが1名であったため、再度st217メーリングリストで茶話会の開催を連絡したが、新規申込者はなく、前日に流会を決定した。

3. 茶話会以外の活動

卒1、卒2に加えて、卒3以上の卒業生からも本事業担当教員のもとに、就職先での人間関係や再就職等について延べ15件余りの相談（来学、メール、電話）があり、卒業生全体に対する支援が実施できたと考える。

<評価>

第1回茶話会の卒業生参加者は、11名（参加申し込み14名）であり、目標の参加人数に到達しなかったのは、対面開催の中止・オンライン限定が直前に決定し、参加申し込みをしたが「対面中止＝開催中止」と誤解した卒業生がいたこと、Zoomの招待メールが届かなかったこと等が原因と考える。また、対面での参加を予定していたがオンライン開催となったことで、Web環境を整えることができなかった卒業生もいた可能性がある。

今回初めてのZoom開催であったが、利用上の問題や通信トラブルは生じず、今後も活用できると考える。卒業生と教員の双方がZoom画面越しにお互いの元気そうな表情を見て、再会を喜びあうことができたことは有意義であった。また、同窓生の頑張りを知ることができたことで「自分も頑張ろう」という気持ちに繋げていけたのではないかと考える。

第2回茶話会の参加申し込みは1名であった。対面での開催の案内通知を発送した1月からCOVID-19感染者が増え始め、2月以降は濃厚接触者の増加に伴い医療従事者（特に看護師）の確保が問題となったため、医療従事者として参加を見合わせざるを得なかった卒業生もいたと考える。また、開催方法を対面からWebへの変更を1週間前にメール配信したところ、業務の都合がつかないという連絡もあり、卒業生のメーリングリストと医療施設への案内だけでは茶話会の周知が徹底できていなかった可能性がある。加えて、対面ではなくオンライン開催では、コロナ禍で行動制限を続けている卒業生の「皆と直接会って話したい」という要望には沿わなかったことも考えられた。

Ⅲ. 今後の課題

第1回茶話会終了後の出席者のアンケート結果より、大学が行う卒業生への支援に対する希望は例年と変わらない内容であり、茶話会の満足度が高いことから、今後も本事業を継続的に実施していく必要があると考える。COVID-19感染拡大防止のための対策を十分に講じた上での卒業生支援、あるいはメールやWeb等での卒業生支援を大学全体として実施していくことが必要である。茶話会の開催においては、対象者への確実な周知方法の模索、卒業生の要望をできるだけ取り入れた柔軟な開催方法の検討、変更事項の決定と周知を早めに行う等が必要である。

Ⅲ. 受託事業

1. 三重県新人助産師合同研修
2. 助産師（中堅者）研修
3. 三重県認知症対応力向上研修
4. 母子保健体制構築アドバイザー事業
5. 看護職員等における
 感染管理実践能力向上研修
6. みえるみんなのナースセンター事業

1. 三重県新人助産師合同研修

担当者： 永見桂子、大平肇子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚
地域交流センター 川瀬浩子

【事業要旨】

三重県では、保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正に伴い努力義務化された新人看護職員研修の導入および実施を促進することをおして、助産師の離職防止・県内定着、資質向上を図っている。

本事業は、三重県の委託を受け、厚生労働省策定の新人看護職員ガイドラインにおける、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の到達目標、助産技術を支える要素「母子の医療安全の確保」、「妊産褥婦および家族への説明と助言」、「的確な判断と適切な助産技術の提供」に則り、三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内の医療施設で働く新人助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をおして臨床実践能力育成を支援することにより、新人助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

新人助産師が、助産師としてのモチベーションを維持しながら、主体的・積極的に学び続けることができるよう、継続的に助産師としての成長を支える機会を提供する。

I. 活動計画

三重県より「令和3年度三重県新人助産師合同研修事業」を受託し、三重県内の医療施設で働く新人助産師を対象とした4日間の研修をおして、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術修得を支援する。昨年度の研修内容・運営方法等の評価に基づき、今年度も「新人助産師集合!!三重の仲間で“わかち合い”“みがき合い”“高め合おう”」をテーマに、新人助産師の実践能力獲得を支援し、新人助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーションを高めることを目標とした。

新型コロナウイルス感染症の拡大の影響をふまえ、本学の方針に従い感染防止対策を徹底するとともに、講義形態も対面形式と、Zoomを利用したオンライン形式を併用した。

<重点課題>

1. 昨年度の研修参加者への調査結果を令和3年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 継続的な卒後教育プログラムの提供に向けて三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。
3. 新人助産師同士の交流を深めることができ、研修修了後には助産師活動の現状や課題を共有できた、専門職者として研鑽し続けたいなどの回答が得られる。

4. 新人助産師 30 名程度が参加し、各日とも 90%以上の出席率を確保できる。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 研修プログラム

昨年度の本事業のアンケートで得られた新人助産師の研修会へのニーズをふまえて、4日間の研修プログラムを企画し実施した（表1）。

表1 令和3年度三重県新人助産師合同研修プログラム

日程・場所	午 前 (10:00~12:00)		午 後 (1・2日目13:00~16:00、3・4日目13:00~15:30)	
12月19日 (日) 1日目 大講義室	研修開始にあたって	感染看護の実際【オンライン講義】	母乳育児への支援の実際 【オンライン講義・演習】	
	地域交流センター	浜松医科大学医学部看護学科 教授 脇坂 浩	関西国際大学保健医療学部看護学科 教授 松原まなみ	
1月9日 (日) 2日目 大講義室	社会的ハイリスク妊産婦の看護・周産期母子ケアにおける連携 【講義・演習】		MFICUでの妊産婦の看護 【講義】	ハイリスク新生児の看護 【講義】
	三重大学医学部附属病院 看護師長・母性看護専門看護師 森實かおり		国立病院機構 三重中央医療センター 副看護師長 鈴木 薫 副看護師長 東 真由美	国立病院機構 三重中央医療センター 副看護師長 新生児集中ケア認定看護師 廣野 絵美
2月6日 (日) 3日目 大講義室	早期新生児のアセスメント・異常の評価と対応 【講義・演習】		ケースシナリオを用いたグループディスカッション 【講義・演習】	
	国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 新生児科医長 内園 広匡		国立病院機構三重中央医療センター 医療安全係長・新生児集中ケア認定看護師 栗本 淳子 副看護師長・新生児集中ケア認定看護師 廣野 絵美	
3月6日 (日) 4日目 大講義室	産婦人科診療ガイドラインにもとづく緊急時の対応 【講義・演習】		事例検討をとおした助産師の判断と看護実践 【演習】	
	国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 部長 前川 有香		国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 部長 前川 有香 副看護師長 鈴木 薫 副看護師長 東 真由美	

2. 研修の申し込み状況

10月に県内69の医療施設（病院15施設、診療所44施設、助産所除く）に開催案内を送付し、参加者を募集した。研修参加者は20名で、目標には至らなかったものの11施設から応募があった。このうち本学卒業生は3名であった。

なお、昨年度は応募があったが、今年度は応募のなかった8施設に連絡したところ、「該当者はいるが応募しない」2施設、「該当者はいるが他県の研修を受講した」1施設、「該当者がいない」4施設、「該当者に受講を勧める」1施設（受講へ）であった。

3. 研修参加者の受講状況

出席日数は皆出席18名（90.0%）、3日間2名（10.0%）であった。研修各日の出席者数と出席率は、1日目と3日目が19名（95.0%）、2日目と4日目が20名（100.0%）であり、目標の90%以上を確保した。オンラインでの参加は、1日目8名（42.1%）、2日目6名（30.0%）、3日目9名（47.4%）、4日目10名（50.0%）であった。

4. 研修参加者の属性

看護師の臨床経験を有する者は2名（経験年数3年2名）であった。就業場所は病院17名（85.0%）、診療所3名（15.0%）で、病院のうち周産期母子医療センターは12名（60.0%）であった。研修修了時点（回答者19名）での分娩介助件数は、経験なし5名（26.3%）、「1～9例」9名（47.4%）、「10～19例」1名（5.3%）、「20～29例」と「30例以上」がそれぞれ2名（10.5%）であった。

<評価>

1. アンケートの回答状況

研修各日終了時のアンケートへの回答者（回収率）は、1日目19名（100.0%）、2日目20名（100.0%）、3日目19名（100.0%）、4日目19名（95.0%）であった。

2. 研修内容

研修内容について、4日間すべてにおいて回答者全員が、「期待通り」または「まあまあ期待通り」と回答し、肯定的評価を得た（表2）。その理由として、「感染対策、母乳育児に関して知らなかった知識も多く良い学びになった」「ハイリスクの母子と関わる時のケアの方法について具体的に知ることができた」「日々の実践に活用出来る内容だった」「事例検討で他施設のことや他の助産師の声を聞けたため勉強になった」などが挙げられた。

表2 本日の研修内容に対する評価

	期待通り n (%)	まあまあ 期待通り n (%)	あまり期待通り でなかった n (%)	期待通り でなかった n (%)
1日目 (n=19)	13 (68.4)	6 (31.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
2日目 (n=20)	12 (60.0)	8 (40.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
3日目 (n=19)	13 (68.4)	6 (31.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
4日目 (n=19)	16 (84.2)	3 (15.8)	0 (0.0)	0 (0.0)

研修をとおして今後学習を深めたいこととして、1日目には「母乳育児支援」、2日目には「ハイリスク妊婦へのケアと対応」、3日目には「新生児の異常を早期発見できる知識と技術」、4日目には「緊急時の対応」などが挙げられた。

研修をとおして日常の看護（助産）に役立てられそうなこととして、1日目には「吸啜や母乳分泌のメカニズムやサインがわかったため、これからの母乳育児支援につなげていきたい」、2日目には「グループワークを通して得られたハイリスク妊産褥婦への関わり」、3日目には「（新生児の）挿管の介助での注意点や観察について学んだこと」、4日目には「不安や混乱のある対象者に寄り添い、傾聴、受容する関わりは大切にしていきたい」などが挙げられた。

研修内容で印象に残ったこととして、「他の病院で勤務している方とのディスカッションを行い、刺激を受けた」「様々な施設の事例検討をして、管理方法の違いはあれど、同じ悩みを持っていることがわかり安心した」などの他施設の助産師との交流に対する肯定的な意見が挙げられた。

研修修了時のアンケートでは、本研修会全体の評価を把握した（回答者19名）。本

研修会が助産師としての意欲の向上につながるかについては、「大変そう思う」または「まあまあそう思う」と回答したものが 94.7%であった（図1）。また、本研修会を受講し、今後も自己研鑽の機会を得ようと思ったかについては、回答者全員が「大変そう思う」または「まあまあそう思う」と回答しており（図2）、本研修会が助産師としての意欲の向上や自己研鑽の動機づけにつながった。

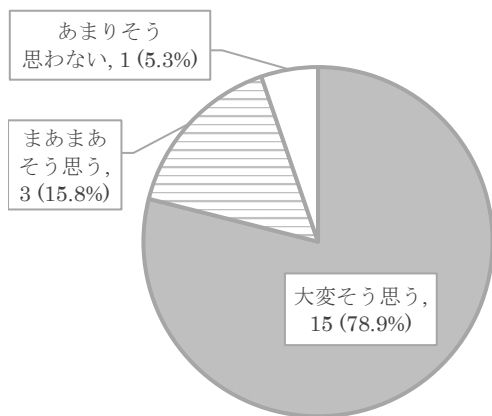


図1 本研修会が助産師としての意欲の向上につながるか (n = 19)

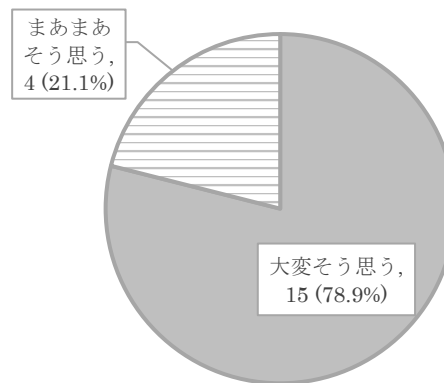


図2 本研修会を受講し、今後も自己研鑽の機会を得ようと思ったか (n = 19)

3. 研修会の運営

研修会の運営については、回答者の概ね全員が「よい」または「まあまあよい」と回答し、肯定的評価を得た（表3）。その理由として、「感染対策に配慮していた」「特に問題なくオンラインで参加できた」などが挙げられた。また、「新人助産師同士の交流を持つ時間がもっとあれば嬉しかった」との意見があり、感染対策のために参加者同士の交流やグループワークの機会を減らしたことが影響していると考えられる。

表3 研修会の運営に対する評価

	よい n (%)	まあまあよい n (%)	あまりよくない n (%)	よくない n (%)
1日目 (n = 19)	13 (68.4)	6 (31.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
2日目 (n = 20)	11 (55.0)	9 (45.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
3日目 (n = 19)	14 (73.7)	4 (21.1)	1 (5.3)	0 (0.0)
4日目 (n = 19)	16 (84.2)	3 (15.8)	0 (0.0)	0 (0.0)

III. 今後の課題

昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染予防に留意しつつ本研修事業を展開することができた。また、上述の評価から、本研修事業は新人助産師の臨床実践能力育成に資する研修会であったと考える。新人助産師は周産期医療・助産ケアに関わる知識・技術の修得・向上だけでなく、助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーション維持につながる研修を望んでいる。感染予防策を講じつつ、開催時期・方法・内容を工夫して、所属施設を越えた助産師同士の交流によるつながりを強化し、助産師としての自覚や助産観を高めあう仲間としての関係性を醸成していくことが課題である。

2. 助産師（中堅者）研修

担当者： 永見桂子、大平肇子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚
地域交流センター 川瀬浩子

【事業要旨】

三重県では、周産期医療の現場において慢性的な助産師不足、地域特性に基づく助産師の偏在などの課題を抱えており、助産師の県内定着・継続就業支援に向けた取り組みがなされてきた。県内で就業する助産師が、妊産婦の多様なニーズに応え、質の高い助産ケアを提供し、さらに関係職種と連携・協働するためには、助産師の学習ニーズや成長過程に応じた研修体制を整備し、助産実践能力獲得を支援することが必要である。

本事業は、三重県の委託を受け、県内で就業する中堅層以上の助産師を対象とした研修を企画し提供することにより、助産師の自律、実践能力向上に資することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をとおして臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

研修参加者の確保が課題であり、中堅層以上の助産師の学習ニーズに応じた魅力ある研修としていく。助産師の就業場所・雇用形態などを考慮した学習方法・内容を工夫する。

I. 活動計画

三重県より「令和3年度助産師（中堅者）研修事業」を受託し、三重県内の医療施設・教育機関で就業する中堅層（助産師経験年数概ね5年以上）の助産師を対象とした3日間の研修を実施する。昨年度の研修内容・運営方法等の評価に基づき、今年度も「助産師としての役割拡大をめざして～得意分野を広げよう～」をテーマに、周産期のクリティカルケア、ライフステージに応じた母子および女性の健康支援、専門職者の役割移行支援に関する研修を企画し、中堅層以上の助産師の自律、実践能力向上に資することを目標とした。

新型コロナウイルス感染拡大の影響をふまえ、本学の方針に従い、感染防止対策を徹底するとともに、講義形態も対面形式とオンライン形式を併用することとした。なお、11月現在の三重県内での新型コロナウイルス感染拡大状況をふまえ、研修参加者には受講にあたり、事前に対面・オンライン形式のいずれかを選択できるよう配慮した。また、アンケート実施にあたって Microsoft Forms を活用することとした。

<重点課題および数値目標>

1. 昨年度の研修参加者への調査結果を令和3年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 研修参加者から、自らや就業施設の臨床実践能力や助産師育成能力の向上につなげることができるとの回答が得られる。

3. 研修参加者（実人数）30名程度、かつ各日とも80%以上の出席率を確保できる。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 研修プログラムについて

令和3年11月13日（土）、12月11日（土）、令和4年1月23日（日）の3日間（10：00～15：30）の研修プログラムを実施した（表1）。

研修初日には、助産師が日常のケア場面で出会う授乳困難を抱える母子をどう支えるか「母乳育児支援—困難事例への対応の実際—」について学び、切れ目のない包括的支援について考察する。「周産期のメンタルヘルスケアの理論と実際」では、産後うつ等の早期発見の必要性と対応を学び、コロナ禍におけるメンタルヘルスケアを考える機会とした。2日目には、「災害時における母子保健対策」について理解を深め、災害時の女性や子どもの支援を学ぶとともに助産師の役割について考察する。「三重県における在留外国人の現状と課題」では、様々な国の文化の違いをふまえた支援のあり方を学び、コミュニケーションの方法やケアの内容について検討する機会とした。3日目には、「三重県における性暴力被害者の現状と課題」について学び、三重県内の性暴力被害者に対する支援体制を理解したうえで、「性暴力被害者支援と助産師の役割」について事例を通して検討し、支援・教育等における助産師の役割拡大について考察する。

表1 令和3年度助産師（中堅者）研修プログラム

	午前（10：00～12：00）	午後（13：00～15：30）
11月13日 （土） （1日目）	母乳育児支援 —困難事例への対応の実際— 【オンライン講義】	周産期のメンタルヘルスケアの理論と実際 【講義・演習】
	関西国際大学保健医療学部看護学科 教授 松原まなみ	三重県立看護大学 准教授 犬飼さゆり
12月11日 （土） （2日目）	災害時における母子保健対策 【オンライン講義】	三重県における在留外国人の現状と課題 【講義・演習】
	前名古屋市中保健センター保健予防課長 日高 橘子	三重県立看護大学 准教授 清水真由美
1月23日 （日） （3日目）	三重県における性暴力被害者の現状と課題 【講義】	性暴力被害者支援と助産師の役割 【講義・演習】
	三重県環境生活部くらし・交通安全課 主幹兼係長 三好 由里子	三重県立看護大学 講師 杉山 泰子

2. 研修参加者の受講状況について

9月に県内医療施設112施設（病院15施設、診療所44施設、助産所53施設）、教育機関4施設、職能団体2施設に開催案内を送付し、参加者を募集した。応募者は1日目20名、2日目22名、3日目22名であり、のべ応募者数は64名であった。応募者（実人数）29名の研修申込み日数の内訳は1日のみ7名、2日間9名、3日間13名

であった。

研修各日の出席者数と出席率（出席者／応募者）は、1日目18名（90.0%）、2日目19名（87.5%）、3日目18名（82.6%）であった。出席者のうち授業形態としてオンライン形式を選択した者は、1日目12名（66.7%）、2日目14名（73.6%）、3日目14名（77.8%）であり、いずれも6割を超える状況であった。研修参加者の就業場所は病院17名（うち周産期母子医療センター13名）、診療所6名、助産所4名、教育機関1名、その他1名であった。研修参加者は29名（実人数）であり、数値目標の30名程度を達成することができ、各日とも80%以上の出席率を確保することができた。

<評価>

研修参加者のべ55名のうち、研修各日終了時のアンケートへの回答者（回収率）は、1日目16名（88.9%）、2日目13名（68.2%）、3日目15名（83.3%）であった。

研修内容が期待通りであったかについては、1日目には期待通り6名（37.5%）、まあまあ期待通り9名（56.3%）であり、その理由は「助産師は、女性の一生に関わり女性とその家族の強みを引き出し、支援の手を差しのべサポートすることができる存在であるということ再認識した」、「パパの育休や育児参加が増えるなか、パパのうつという新たな視点を持って関わることも大切だと学んだ」などであった。2日目は期待通り5名（38.5%）、まあまあ期待通り7名（53.8%）であり、その理由は「災害時の女性や子どもの居場所の確保の大切さがよくわかった」、「さまざまな国の文化の違いを知ることができて驚いたし、いろんな視点で物事を見ることが大切だと思うことができた」などであった。3日目には期待通り13名（86.7%）、まあまあ期待通り2名（13.3%）であり、「性暴力被害者の方への理解が深まった」、「あまり性暴力などに関わる機会がなかったが、患者という視点ではなく被害者としての視点でケアをする必要性を知った」などの理由が挙げられた。

本研修が自身または就業施設の助産実践能力の向上につながるかとの問いに、1日目には大変そう思う5名（31.3%）、まあまあそう思う11名（68.8%）であり、その理由として「コミュニケーション技法を改めたい」、「包括的支援のためにもっと多職種と連携していこうと思えた」などが挙げられた。2日目には大変そう思う5名（38.5%）、まあまあそう思う8名（61.5%）であり、「災害時に備えた準備物品の提案など、病院に入院中の妊産褥婦さんに提案できると思う」、「今後外国人の妊産婦さんと接する時に文化を理解することに努めようと思った」などが挙げられた。3日目には大変そう思う13名（86.7%）、まあまあそう思う2名（13.3%）であり、「被害にあわれた方が来院された際に、適切な情報提供ができるように準備をしておく必要があると感じた。早速、上司にも提案していきたい」、「『性暴力をさせない、おこさない、傍観者にならない』の内容についてどの学年であってもいのちの授業で話ができることがわかったから」などが挙げられた。

研修をとおして得られた今後の課題として、1日目には「乳房ケアやエジンバラの見直しや自分のキャリアアップの検討」、「妊産褥婦さんはもちろん、その周りの人たちへのサポートやその強みを引き出せるような関わり」、2日目には「妊産褥婦への指導内容を考え、指導に効果的な媒体を考えること」、「病院勤務で地域との関わりがほ

とんど持っていないのもっと交流を持てるような取り組みをしていきたい」、3日目には「被害者支援が病院全体で取り組んで行けるような、仕組みを作りたい」、「私をはじめ、多くのスタッフはこの現状や対応を知らないと思う。対応した事があるスタッフを中心として勉強会をして周知していく必要があると思う」などが挙げられた。今後開催を希望する研修内容として、「乳房ケアの具体的方法」、「オンラインの母親教室の運営」、「分娩介助」、「施設から地域への途切れのない母子のケア」、「母子保健制度」などが挙げられた。

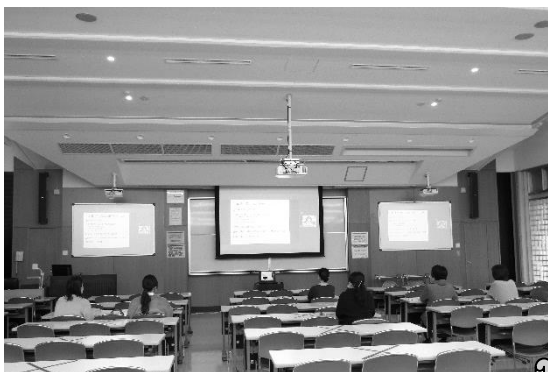
研修会運営については、1日目にはよい6名(37.5%)、まあまあよい8名(50.0%)であり、その理由は「会場でもオンラインでも参加できて良いと思えた」、「アットホームで安心できた」などであった。2日目にはよい4名(30.8%)、まあまあよい9名(69.2%)であり、「グループワークでは少ない人数でしたが、いろんな視点からの意見を聞くことができました」、「会場のグループワークなどパーティションの準備など感染対策されていてよかった」などの理由が挙げられた。3日目にはよい12名(80.0%)、まあまあよい3名(20.0%)であり、「適度に休憩があり集中して聴くことができた」、「特に不都合なく受講できた」などの理由が挙げられた。

以上、3回の研修のアンケート回答結果から、「父親の産後うつも視野に入れた対象の拡大」、「地域や多職種と連携した災害支援への意識向上」、「在留外国人に対する異文化の理解を含めたケアの発展」、「性暴力被害者支援体制の院内整備と予防教育の取り組み」など、助産師の役割拡大へとつながる研修となったと評価する。

Ⅲ. 今後の課題

今年度も「助産師としての役割拡大をめざして～得意分野を広げよう～」をテーマに、ライフステージに応じた母子および女性の健康支援、災害被害者・在留外国人・性暴力被害者など特別な支援を要する対象へのケアに関する研修を実施した。研修参加者(実人数)は数値目標を概ね達成し、出席率は全日80%を超えており、感染防止対策を徹底し、受講形態を各自の事情に応じて選択できるようにした点が好評であった。

来年度も新型コロナウイルス感染症の影響は否めず、引き続き、開催時期・方法・内容を工夫し、助産師にとって安心して受講できる環境を整え、魅力ある研修としていくことが課題である。



ハイブリッド方式で開催しました
間隔をあけて受講しています



感染対策を講じて
グループワークを実施しています

3. 三重県認知症対応力向上研修

担当者：地域交流センター 永見桂子、星野郁子、大坪佳寿子、中山莉子

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託をうけ、病院勤務の医療従事者及び指導的立場の看護職員の認知症対応力向上のため、以下の研修を実施するものである。

1. 病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

三重県内の病院に勤務する医療従事者（医師、看護師等）に対し、認知症の人や家族を支えるために必要な基本知識や、医療と介護の連携の重要性、認知症ケアの原則等の知識について習得するための研修を実施することにより、病院での認知症の人の手術や処置等の適切な実施の確保を図ることを目的とする。

2. 看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

三重県内の指導的立場の看護師に対し、医療機関等に入院から退院までのプロセスに沿った必要な基本知識や、個々の認知症の特徴等に対する実践的な対応力を習得し、同じ医療機関等の看護職員に対し伝達することで、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築を目的とする。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で認知症ケアに携わる医療従事者の質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

【昨年度からの課題】

医療従事者向けの研修では、多職種の参加が得られる様に医療施設へ出向いて開催する。また、何れの研修においても感染防止に努め、より多くの方の参加を検討する。

I. 活動計画

厚生労働省老健局長通知「認知症地域医療支援事業の実施について」の標準的なカリキュラムに基づき研修を実施する。

1. 病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

開催回数：5回

対象者：三重県内の病院で勤務する医師、看護師等の医療従事者

定員：1回あたり50名程度

会場：北勢地域（2か所）、中勢地域（1か所）、伊賀地域（1か所）、南勢地域（1か所）の医療施設へ協力を仰ぎ実施する。

2. 看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

開催回数：1回

対象者：三重県内の医療施設で勤務する指導的立場の看護職員で、3日間の研修に全て参加し、研修受講後に自施設での研修を実施し実施報告書を提出する事ができる者

定 員：50 名程度
会 場：三重県立看護大学

II. 活動の結果と評価

<結果>

半日研修、3日間研修ともに、県内の約 200 施設（医療施設等）へ開催案内を送付、申込みを受けた順に受講者を決定し、申込担当者宛てに受講決定通知書を送付した。開催地域としては、医療施設のご協力をいただき、北勢（2カ所）・中勢（2カ所）・南勢の3医療圏で開催することができた。特に、半日研修では、開催協力医療施設の選定や研修案内の周知について、三重県病院協会のご協力をいただいた。

感染防止対策として、受講するには体温測定 37.5℃以下であること、マスクの着用をお願いするとともに、演習ではフェイスシールドを配布し着用を促した。COVID-19により三重県全域へ緊急事態宣言が発令された際は、3日間研修ではオンライン研修へと変更した。また、半日研修では開催日程を変更して対面研修を行った。

研修修了者には、三重県知事より修了証書が交付された。

1. 病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

1) 開催日・会場・受講者数及び修了者数

	開催日	会場	受講者数	修了者数
第1回	7月18日（日）	桑名市総合医療センター	16名	16名
第2回	7月30日（金）	伊勢赤十字病院	3名	3名
第3回	10月8日（金）	大仲さつき病院	18名	17名
第4回	11月5日（金）	三重県立こころの医療センター	27名	27名
第5回	12月10日（金）	伊賀市立上野総合市民病院	26名	22名
		合計	90名	85名

2) 内容

医師から、目的編「認知症ケアに求められている事の理解」、対応力編「疾患の理解、入院中の対応の基本」、連携編「院内・院外の多色連携の意義の理解」について講義を行った。また、認知症看護認定看護師から、グループワークを交えて事例演習を行った。

3) アンケート結果

受講者アンケート（回収率98.9%）によると、受講者の年代は、40代が最も多く31.5%、次いで20代22.5%、30代及び50代21.3%、60代3.4%であった。職種は、看護師が最も多く86.5%、次いで介護福祉士3.4%、精神保健福祉士及び社会福祉士2.2%であった。その他5.6%では、薬剤師、管理栄養士、看護助手等の参加があった。

受講理由（複数回答）は、「自己研鑽」48.3%が最も多く、次いで「認知症に興味がある」及び「勧められた」33.7%であった。研修の全体評価では、とてもよかった（第1回56.3%、第2回66.7%、第3回72.2%、第4回33.3%、第5回56.0%）、よかった（第1回43.8%、第2回33.3%、第3回16.7%、第4回66.7%、第5回44.0%）を合わせて約98%の回答があった。

< 評価 >

COVID-19 の感染拡大の影響もあり、多忙な医療従事者が研修会へ参加することが困難な状況である様子が伺われ、受講者数の少ない日程もあったことは残念であった。しかし、広域的に参加が得られていること、アンケートにおいても高評価を得ることができたことから、認知症ケア等に係る知識の習得に寄与できたと考える。



地域交流センター長挨拶



医師 講義



認知症看護認定看護師 演習

2. 看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

1) 開催日・内容・会場・受講者数及び修了者数

開催日	内容	会場	受講者 (修了者数)
9月12日 (日)	[基本知識編] 講義：認知症患者の入院から退院までのプロセスに沿って、基本的な知識を習得する 講師：医師	オンライン (Zoom)	55名 (55名)
9月13日 (月)	[対応力向上編] 講義及び演習：個々の認知症の特徴・症状に対するより実践的な対応力（アセスメント、看護方法・技術、院内外連携手法）を習得する 講師：社会福祉士・精神看護専門看護師（講義） 認知症看護認定看護師（講義及び演習）		
9月14日 (火)	[マネジメント編] 講義及び演習：マネジメント（人員、環境、情報管理等）の実践的な対応方法及び教育技能を習得する 講師：認知症看護認定看護師		



医師 講義



精神看護専門看護師 講義



社会福祉士 講義

2) アンケート結果

三重県内の 28 医療施設から参加があった。地域別の施設及び受講者としては、北勢（10 施設：22 名）、中勢（10 施設：18 名）、南勢（6 施設：11 名）、東紀州（2 施設：4 名）であった。

受講者アンケート（回収率 87.3%）によると、受講者の年代は、40代が最も多く 47.9%、次いで 30代 29.2%、20代及び 50代 10.4%、その他 2.1%であった。受講理由（複数回答）は「勧められた」が 70.8%と最も多く、次いで「自己研鑽」27.1%、「認知症に興味がある」20.8%の順であった。研修の全体評価では、とてもよかった 52.1%、よかった 45.8%を合わせて 97.9%の回答があった（無回答 2.1%）。

3) 研修修了後の施設研修

研修修了者には、同じ医療機関等の看護職員に対し伝達をすることで、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築を目的に自施設における研修の実施を求め、54名（提出率98.2%）から報告書が提出された。未提出1名の理由は、退職及び県外転出であった。

<評価>

定員を超える受講希望であったが、オンライン開催となったため希望者全員に受講していただいた。また、北勢、中勢、南勢、東紀州地域からの受講があり、広域的に認知症ケアに携わる医療従事者の質の向上に寄与できたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修については、医療施設の協力を仰ぐことで多職種の参加が得られやすく、出向いて開催できることが望ましい。しかし、COVID-19 が感染拡大した状況下では、他施設からの参加が得られにくいという課題があった。

看護職員認知症対応力向上研修については、COVID-19 の感染拡大状況の影響を受けることなくニーズがあり、受講後の満足度も高い。今後も、できるだけ多くの方に参加していただけることが望ましい。

いずれの研修についても、受講者の感染防止に充分努めるとともに、受講者数、開催時期や開催施設など慎重に検討し、より効果的な開催に努める必要がある。

（担当：星野郁子）

4. 母子保健体制構築アドバイザー事業

担当者：地域交流センター 永見桂子、星野郁子

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託をうけ、各市町における地域課題の分析及び事業評価、支援体制の整備、支援ネットワークの強化等、対象市町に応じた内容について、以下1又は2により、母子保健体制構築アドバイザー（以下、アドバイザー）が必要な助言・指導を行うものである。

1. 個別支援型アドバイザー派遣

市町からの申請に基づき、市町に必要な助言・指導等を行う。

2. 広域支援型アドバイザー派遣

市町からの申請の有無にかかわらず、随時アウトリーチを行い市町の現状を把握し、課題や今後の取組み等を整理し、助言・指導等を行う。

【地域貢献のポイント】

- 母子保健対策に携わる行政保健師の質の向上に貢献する。
- 地域の実情に応じた体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実に貢献する。

【昨年度からの課題】

COVID-19の感染拡大に伴い、感染防止策を講じ、地域性を考慮した母子保健事業の在り方を検討する。個別支援型アドバイザー派遣と広域支援型アドバイザー派遣で得た情報を連動させ、母子保健体制の充実に反映させられるよう検討する。

I. 活動計画

三重県における母子保健体制構築アドバイザー事業実施要領に基づき事業を実施する。

1. 個別支援型アドバイザー派遣

個別支援型アドバイザーによる助言・指導を希望する市町からの申請内容を審査し、三重県が認めたアドバイザーを選定して派遣（指導依頼）を行うものである。

2. 広域支援型アドバイザー派遣

対象市町の選定基準は、昨年度に未訪問であった12市町に対し、COVID-19発生後の母子保健体制を中心に現状把握・助言・指導を行う。また、可能な範囲で管轄保健所の保健師と同行訪問する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

個別支援型アドバイザー派遣・広域支援型アドバイザー派遣ともに、三重県を通じて各市町に事業が周知された。個別支援型アドバイザー派遣は希望市町がなく派遣実績0件となった。広域支援型アドバイザー派遣では12市町を訪問した。また、オンラインでのミニ講座及び情報交換会を年3回開催し、情報共有等を図った。県・市町保健師を対象とした母子保健担当者意見交換会（5箇所）へ出席して助言・指導を行った。

1. 個別支援型アドバイザー派遣

広域支援型アドバイザー派遣における市町訪問や母子保健担当者意見交換会の場も活用しつつ、個別支援型アドバイザー派遣の活用を促したが利用には至らなかった。その社会的背景として COVID-19 の感染拡大があり、落ち着いたら活用したいとの声も聞かれた。

2. 広域支援型アドバイザー派遣

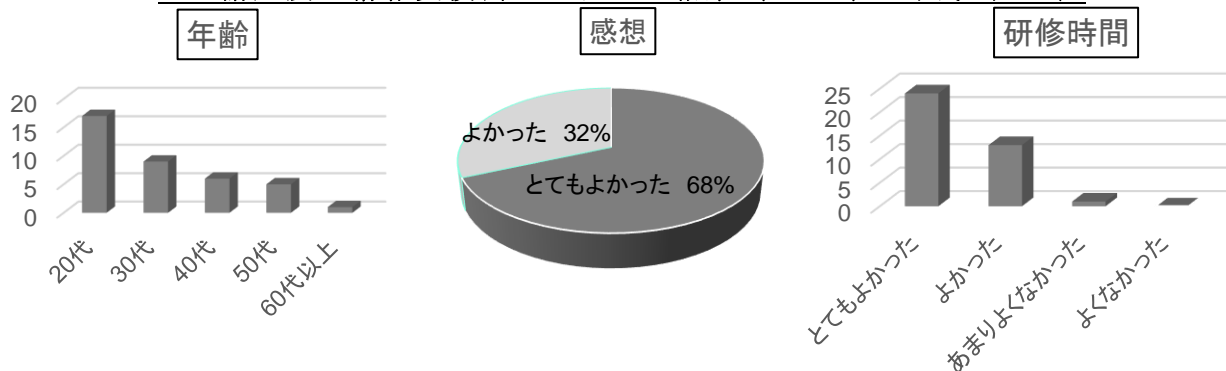
1) ミニ講座及び情報交換会

日 程	内 容	参加者
8月3日 (火)	ミニ講座「周産期のメンタルヘルス 産後うつについて」 講師：三重県立看護大学 精神看護学 准教授 犬飼さゆり 情報交換	26名
10月13日 (水)	ミニ講座「コロナ禍で母子保健を再構築するために」 講師：元名古屋市保健所中保健センター保健予防課長 日高 橘子 情報交換	23名
12月6日 (月)	ミニ講座「医療機関における地域連携の実際」 講師：三重県立看護大学地域交流センター 特任助教 長谷川明子 情報交換	21名

1時間（ミニ講座30分、情報交換30分）という時間設定で実施したことで、執務中でも参加しやすいとの意見が複数聞かれた。また、コロナ禍で研修の機会も減っており他市町や県の状況を聞ける良い機会であったという意見も複数聞かれた。

ミニ講座に希望するテーマとしては、精神疾患のある妊産婦への支援、若年妊婦・多胎妊婦への支援、ことばの遅れ等々であった。

ミニ講座及び情報交換会アンケート結果 (Forms) 回収率 76%



2) アドバイザー派遣 (市町訪問)

地域	市	町
北勢地域	亀山市	川越町
中勢地域	伊賀市	—
南勢地域	松阪市・伊勢市・鳥羽市	多気町・明和町・玉城町・大紀町
東紀州地域	熊野市	御浜町

8月から10月にかけて12市町を訪問（必要時、市町主催の会議に参加）。COVID-19の母子保健事業への影響と今後の課題、産後ケアについて現状、課題と感じていること等を中心に聴取し、市町の体制づくりについて助言・指導を行った。

3) 母子保健担当者意見交換会

開催日	会場	出席者数	内容
7月20日 (火)	三重県伊勢庁舎 (伊勢保健所)	13名 (うち3名オンライン)	保健所、管内市町、児童相談所（鈴鹿、津のみ参加）、県庁子育て支援課の保健師等から母子保健に係る事業報告及び情報交換を行った。 * COVID-19の影響で四日市市・伊賀地域は紙面協議等となった。 * 桑名地域は他用務の関係で不参加。
9月15日 (水)	オンライン (松阪保健所)	16名	
10月19日 (火)	三重県鈴鹿庁舎 (鈴鹿保健所)	14名	
11月24日 (水)	津市中央保健センター (津保健所)	14名	
1月17日 (月)	オンライン (尾鷲・熊野保健所)	14名	

<評価>

個別支援型アドバイザー派遣は、繰り返される COVID-19 感染拡大の中では、通常業務の遂行も困難な状況下であり、利用につなげることができず残念であった。個別支援型アドバイザー派遣の一貫として実施したオンライン研修は、参加しやすく好評であった。母子保健対策に携わる行政保健師の質の向上に貢献するため、継続が望まれる。

Ⅲ. 今後の課題

COVID-19の感染拡大により、感染防止策を講じた母子保健事業の在り方が喫緊の課題となり、各市町が地域性を考慮したかたちで事業を展開している。母子保健体制構築アドバイザー事業を通し県内の情報交換・情報共有を図り、母子保健体制を充実させていくことが必要であると考えます。また、市町や県のそれぞれの課題に対応できるよう、引き続き対応策を検討していくことが求められる。

(担当：星野郁子)

5. 看護職員等における感染管理実践能力向上事業

担当者：地域交流センター 永見桂子、星野郁子、大坪佳寿子、中山莉子

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託をうけ、感染管理認定看護師及び医療・福祉関係者を対象に、以下の研修を実施するものである。

1. 感染管理実践能力向上研修

新型コロナウイルス感染拡大防止を図るためには、医療施設等における感染制御チームや感染管理認定看護師のみでなく、これらの専門職と連携・協力して取り組むことのできる人材の育成が必要であることから、三重県内医療・介護福祉関係者の感染管理の実践力の向上を図ることを目的とする。

2. 感染管理認定看護師資質向上研修

新型コロナウイルス感染症への対応については、常に先進的知識を得たうえで、医療機関等における感染予防・管理システムの再構築や院内感染発生時に備える必要があるため、実践能力の強化を図るとともに、感染管理認定看護師間の連携強化を図ることを目的とする。

【地域貢献のポイント】

- 医療・介護福祉施設等の現場で感染管理に携わる医療・介護福祉従事者の質の向上に貢献する。
- 感染管理認定看護師の実践能力強化及び連携強化を図ることで、共に働く看護職や他職種への人材育成に貢献する。

I. 活動計画

三重県における看護職員等における感染管理実践能力向上事業実施要領に基づき事業を実施する。

1. 感染管理実践能力向上研修

内 容：感染管理の基礎知識や感染防止活動、感染症発生時の初動対応等を含む感染管理実践能力の向上に資するもの

開催回数：5回

対 象 者：三重県内の医療機関、介護福祉施設で就業する看護職者等。定員100名程度

会 場：三重県立看護大学 講堂

2. 感染管理認定看護師資質向上研修

内 容：感染管理に関する最新の研究成果等の講義、先進的な取組を実施している医療機関における実践例等の紹介等

開催回数：1回

対 象 者：三重県内の医療機関に勤務する感染管理認定看護師

会 場：三重県立看護大学 講義棟1階 大講義室

II. 活動の結果と評価

<結果>

感染管理実践能力向上研修では、三重県内の約 200 施設（医療及び福祉施設等）へ開催案内を送付し、119 名から申込があった。5 回コースの内容であり、申込者が希望する回に参加され、延べ約 300 名が参加された。受講する際は、体温測定 37.5℃以下であること、マスクの着用のお願いはもちろんのこと、三重県全域で緊急事態宣言が発令された時期はオンライン開催へと変更するなど感染防止対策を講じながら開催した。

感染管理認定看護師資質向上研修では、三重県内の感染管理認定看護師が勤務する施設へ開催案内を送付するとともに、本学での感染管理認定看護師教育課程の修了生（三重県内勤務者）等へメールで案内を行った。一部オンラインとなった講義もあったが、感染防止対策を講じながら対面で開催し、研修修了者には本学から「参加者証」を発行した。

1. 感染管理実践能力向上研修

1) 開催日・内容・受講者数及び会場

	日 程	内 容（講義）	受講者
第 1 回	7 月 24 日 (土)	①「新型コロナウイルスに関する最新情報」 講師：三重大学医学部附属病院感染制御部 部長 教授 田辺正樹 ②「感染管理学」 講師：市立四日市病院 副院長兼看護部長 川島好子	78 名
第 2 回	8 月 7 日 (土)	①「臨床薬理学」 三重県立看護大学 教授 林 辰弥 ②「感染防止技術 1」 講師：三重県立総合医療センター長谷川麗子(感染管理認定看護師)	54 名
第 3 回	8 月 28 日 (土)	①「院内感染対策」 講師：三重大学医学部附属病院感染制御部 部長 教授 田辺正樹 ②「感染防止技術 2」 講師：三重県立総合医療センター長谷川麗子(感染管理認定看護師)	90 名 *申込数
第 4 回	9 月 25 日 (土)	①「疫学と統計学」 講師：三重県保健環境研究所 総括研究員兼精度管理監兼課長 樋口奈津子 ②「感染管理指導と相談」 講師：岡波総合病院 濱野飛鳥（感染管理認定看護師）	53 名
第 5 回	10 月 9 日 (土)	①「医療関連感染サーベイランス」 講師：伊勢赤十字病院 川口仁美（感染管理認定看護師） ②「洗浄・消毒・滅菌とファシリティ・マネジメント」 講師：三重大学医学部附属病院 新居晶恵（感染管理認定看護師）	57 名

*会場は三重県立看護大学 講堂。第 3 回（Teams）及び第 4 回（Zoom）については、三重県全域に緊急事態宣言発令のためオンラインで開催した。

2) アンケート結果

申込 119 名（45 施設）の内訳は、医療機関 102 名（35 施設）、福祉施設 7 名（6 施設）、行政 10 名（4 施設）であった。うち、医療機関については北勢 36 名（16 施設）、中勢 38 名（11 施設）、南勢 25 名（7 施設）、東紀州 3 名（1 施設）から、福祉施設については北勢 2 名（2 施設）、中勢 2 名（2 施設）、南勢 3 名（2 施設）からの申込であった。各回のアンケート結果については次のとおりである。

受講者アンケートによると、所属は総合病院 45.2%、総合病院以外の病院 40.7%、行政 8.1%、高齢者施設（入所） 4.1%であった。職種は、看護師が最も多く 88.2%、次いで保健師 7.2%、助産師 1.8%、介護福祉士 1.4%、薬剤師 0.9%であった。受講理由（複数回答）は、「自己研鑽」50.7%が最も多く、次いで「感染管理に興味がある」43.0%、「勧められた」19.0%の順であった。研修の全体評価では、とてもよかった（第 1 回 32.1%、第 2 回 37.3%、第 3 回 47.4%、第 4 回 38.9%、第 5 回 52.7%）、よかった（第 1 回 61.5%、第 2 回 62.7%、第 3 回 52.6%、第 4 回 55.6%、第 5 回 43.6%）と回答が合わせて 96.4%であった。



< 評価 >

COVID-19 の感染拡大により感染管理への関心度は高く、第 2 回及び第 3 回はオンライン開催となったが、県内各地域からの申込及び参加を得ることができた。広域的に感染管理実践能力の向上に寄与できたと考える。

2. 感染管理認定看護師資質向上研修

1) 開催日：令和 3 年 7 月 10 日（土）

2) 内容：(1) 講義：「COVID-19 の現状と対策 UP to Date」

講師：三重病院 院長 谷口清洲（オンライン）

(2) 講義：「保健所における新型コロナウイルス感染症の対応」

講師：三重県津保健所 副所長兼保健衛生室長 丸山明美

(3) 事例報告「COVID-19に係る活動報告」

講師：鈴鹿中央総合病院 小林百合（感染管理認定看護師）

講師：岡波総合病院 濱野飛鳥（感染管理認定看護師）

(4) 意見交換 3グループに分かれ情報交換

(5) まとめ：鈴鹿中央総合病院 小林百合（感染管理認定看護師）

岡波総合病院 濱野飛鳥（感染管理認定看護師）

三重県津保健所 副所長兼保健衛生室長 丸山明美

3) 会場：三重県立看護大学 講義棟 1階 大講義室

4) 受講者数：16名

5) アンケート結果

受講者の所属は「総合病院からの参加」75.0%。「総合病院以外の病院からの参加」18.8%、「その他」6.3%であった。参加理由（複数回答可）は「自己研鑽」が14名、「仕事（出張）」3名、「勧められた」1名であった。研修の全体評価では、「とても良かった」が87.5%、「よかった」が12.5%であり、それぞれの理由としては、「自分の疑問が解決でき、とても有意義な時間を過ごすことができた」、「コロナが始まり他施設の方と情報交換できる場が少なくなり、リアルタイムで他施設の対策を聞くことができてとても参考になった」、「久しぶりの集合型研修で顔をみて話をする事で、日頃の情報を共有できたのが良かった」、「谷口先生のお話は、もっと広く広報したい内容だと思った」、「谷口先生からの最新情報を聞かせて頂き、午後はそれぞれご苦勞されていることや課題について教えていただき、今後検討していくのにとっても参考になった」等々の意見であった。

<評価>

COVID-19の発生により多忙な日々を過ごしている中ではあったが、集合型の研修で顔をみて日頃の情報を共有することができ貴重な場となった。感染管理認定看護師の実践能力強化及び連携強化への一翼を担う事ができたと考える。



III. 今後の課題

COVID-19はパンデミックとなり、三重県内においても32,772件（令和4年2月15日現在）の発生があり、クラスター134事例（令和4年2月16日現在）となった。

COVID-19の発生により、感染症対策の必要性が広く一般の方々にも認識され、医療・福祉・行政等が連携しCOVID-19の収束に向け活動する中で、三重県内の感染管理認定看護師の活躍が評価されたところである。医療機関等においては、より専門性の高い技術や知識が求められ、三重県内の医療機関からは感染管理認定看護師の養成を期待する声が多く聞かれた。

これらの現状を踏まえ、本学では令和4年度「感染管理認定看護師教育課程（B課程）」を開講し、より専門性の高い感染管理能力を持つ看護職の人材育成に力を入れる。

（担当：星野郁子）

6. みえるみんなのナースセンター事業

担当者：篠原真咲、菱沼典子、六角僚子、大川明子、犬飼さゆり、灘波浩子、田端真
荒木学、橋本千愛、長谷川明子、永見桂子、星野郁子、出井隆裕

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託をうけ、健康づくり先進県として県民が健康や暮らしの相談を気軽に受けられる場を提供し、コロナ禍における新しい生活様式に対応した健康づくりの取組を進める。また、社会貢献・地域貢献の活動を通じて、県内で活躍する看護人材の育成を図るとともに若者の県内定着につなげるため、以下の事業を実施する。

1. 暮らしの保健室&よりみちカフェの設営
2. 地域住民と連携した新型コロナウイルス感染症対策
3. 地域住民とともに作り上げる研修会

【地域貢献のポイント】

- 広域性のある取組を展開し、健康増進の取組を県内全域に波及させることに貢献する。
- 県内で活躍する看護職の人材育成に貢献する。

I. 活動計画

三重県におけるみえるみんなのナースセンター事業実仕様書に基づき事業を実施する。

1. 暮らしの保健室&よりみちカフェの設置（県内2か所×5回）
県内2か所で、県民が健康チェックや健康管理などの相談を行うことができる場を設置する。また、リモートなど3密を避けた新しい交流方法を考案し、学生など若者と地域住民が新しい暮らし方を学ぶ機会とする。
2. 地域住民と連携した新型コロナウイルス感染症対策の実施
新型コロナウイルス感染防止対策啓発グッズやチラシ等を作成する。
3. 地域住民とともに作り上げる研修会の開催（出前研修会5か所×1回）
高齢者施設や保育園、学校等における感染防止対策などに関する研修会を地域住民とともに企画し開催する。
4. 事業実施報告書の作成等
本事業の実施報告書を作成し、関係機関等へ配布するなど、コロナ禍での新しい生活様式に応じた健康づくりの取組推進につなげる。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 暮らしの保健室&よりみちカフェ
1) いなべ市

日 程	内 容	参加者数
6月19日（土） 14:00 ～ 16:00	1. 暮らしの保健室(みえるみんなのナースステーション事業) ①自治会関係者（ボランティア）の自己紹介 ②紙芝居 ③講義「骨の話 “骨は生きている”」	13名

	<p>講師：三重県立看護大学 学長 菱沼典子</p> <p>④ボランティアへの暮らしの保健室デモンストレーション 血圧・身長・貧血検査・ストレスチェック・瞬発力・フットプリント・骨密度、握力を健康チェック機器により測定。</p>	
<p>7月28日(水)</p> <p>10:00 ～ 12:00</p>	<p>1. 暮らしの保健室及びよりみちカフェ（同時進行）</p> <p>①自治会ボランティアとともに健康チェック（血圧・身長・貧血検査・ストレスチェック・瞬発力・フットプリント・骨密度、握力）</p> <p>②フットケア、アロマハンドマッサージ</p> <p>③講話「脳トレ」 講師：大学院生2名</p> <p>④講義「血圧と薬の話」 講師：三重県立看護大学 学長 菱沼典子</p>	<p>22名</p> <p>（自治会ボランティア12名）</p>
<p>11月24日(水)</p> <p>10:00 ～ 12:00</p>	<p>1. 暮らしの保健室及びよりみちカフェ（同時進行）</p> <p>①自治会ボランティアとともに健康チェック（血圧・身長・貧血検査・ストレスチェック・瞬発力・フットプリント・骨密度、握力）</p> <p>②アロマハンドマッサージ</p> <p>③講話「こころとからだの健康のために～自然療法『アロマセラピー』」 講師：三重県立看護大学 地域交流センター 特任助教 長谷川明子</p>	<p>14名</p> <p>（自治会ボランティア8名）</p>
<p>令和4年3月5日(土)及び3月16日(水)は新型コロナウイルス感染拡大により中止</p>		

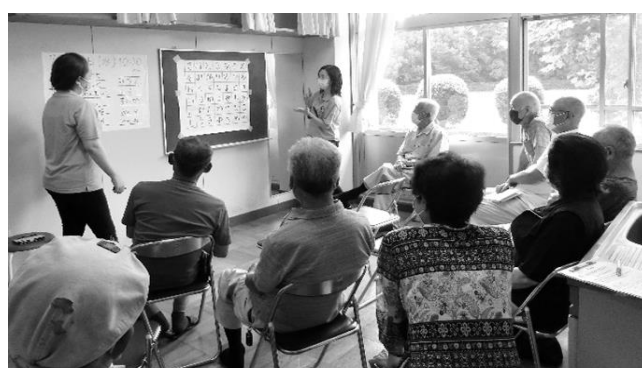
2) 伊勢市

日 程	内 容	参加者数
<p>7月9日(金)</p> <p>10時30分 ～ 12時00分</p>	<p>1. 暮らしの保健室</p> <p>①ボランティア希望者の自己紹介</p> <p>②紙芝居</p> <p>③講話「骨の話 “骨は生きている”」 講師：三重県立看護大学 学長 菱沼典子</p> <p>④ボランティアへの暮らしの保健室デモンストレーション 血圧・貧血検査・ストレスチェック・瞬発力・フットプリント・握力を健康チェック機器により測定。</p>	<p>10名</p>
<p>10月15日(金)</p> <p>10時30分 ～ 15時00分</p>	<p>1. 暮らしの保健室</p> <p>①地域ボランティアとともに健康チェック（血管年齢・骨密度測定・血圧・SpO2・瞬発力・フットプリント・アロマハンドマッサージ）</p> <p>②感染予防啓発グッズの配布</p> <p>2. よりみちカフェ</p> <p>①講義「認知症について」講師：いせ山川クリニック 院長 山川伸隆</p> <p>②講話「アロマで認知症予防」講師：ボランティア 久留宮香里</p>	<p>37名</p> <p>（地域ボランティア10名）</p>

	③講話「脳トレ“言葉作りゲーム”」 講師：大学院生 2名 ④簡単な体操	
12月17日(金) 10時30分 ～ 15時00分	1. 暮らしの保健室 ①地域ボランティアとともに健康チェック（血管年齢・骨密度測定・血圧・SpO2・瞬発力・フットプリント） 2. よりみちカフェ ①講義「認知症について」講師：いせ山川クリニック 院長 山川伸隆 ②交流会	33名 (地域ボランティア 2名)
令和4年2月18日(金)は新型コロナウイルス感染拡大により中止		
3月13日(日)	1. スローショッピング 2. 暮らしの保健室 健康チェック（血圧・SpO2・瞬発力・フットプリント）	15名 (地域ボランティア 20名)



[伊勢市：医師による講義]



[いなべ市：大学院生による脳トレゲーム]

2. 地域住民と連携した新型コロナウイルス感染症対策

新型コロナウイルス感染防止対策啓発グッズとして、啓発メッセージをプリントしたエコバック（400枚）、クリアファイル（700枚）を作成した。伊勢市では、暮らしの保健室・よりみちカフェ参加者、住民ボランティア、買い物客等へ配布した。いなべ市では、配布方法について自治会ボランティアで検討していただき、75歳以上の自宅に配布したいとの提案にそって配布した。また、学内で開催している暮らしの保健室及びよりみちカフェへ参加される一般住民に対しても配布し、感染拡大防止を呼びかけた。

さらに、コロナ禍を豊かに過ごしていただくための参考資料として、伊勢市及びいなべ市に「食べて元気にフレイル予防（厚生労働省 令和元年度食事摂取基準を活用した高齢者のフレイル予防事業）」のパンフレットを各100部配布した。

3. 地域住民とともに作り上げる研修会

開催日時	テーマ・講師・会場・対象	参加者数
9月9日(木)	テーマ：「認知症ケア」 講師：六角僚子 〔三重県立看護大学在宅看護学領域 教授〕 〔特定非営利活動法人認知症ケア研究所 顧問〕 会場：オンライン（Zoom）	33名

	対 象：大台町地域包括支援センター 介護支援専門員	
10月15日(金)	テーマ：「認知症について-みんつく寺子塾-」 講 師：山川伸隆（いせ山川クリニック 院長） 会 場：イオンタウン伊勢ララパークげんこころ一む 対 象：伊勢市民	37名
11月19日(金)	テーマ：「コケない・折れない・いつまでも自分の足で歩き続けるためのフットケア」（実技含む） 講 師：篠原真咲（三重県立看護大学在宅看護学助教） 会 場：あさひライブラリー（朝日町） 対 象：朝日町民	7名
12月17日(金)	テーマ：「認知症について-みんつく寺子塾-」 講 師：山川伸隆（いせ山川クリニック 院長） 会 場：イオンタウン伊勢ララパークげんこころ一む 対 象：伊勢市民	33名
令和4年 1月25日(火)	テーマ：「認知症ケア」 講 師：六角僚子 〔三重県立看護大学在宅看護学領域 教授 特定非営利活動法人認知症ケア研究所 顧問〕 会 場：オンライン（Zoom） 対 象：南伊勢認知症サポーター	16名

4. 事業実施報告書の作成等

コロナ禍での新しい生活様式に応じた健康づくりの取組推進への参考としていただけるよう、本事業の実施報告書を200部作成し、医療施設、福祉施設、行政等の関係機関へ配布した。

<評価>

新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、感染防止策を講じた地域活動が求められている。今回、住民とともに活動したことで、地域の健康づくりへのエンパワメントに貢献できたと考える。

また、機器を貸し出す事で地域における活動の継続が期待できる。

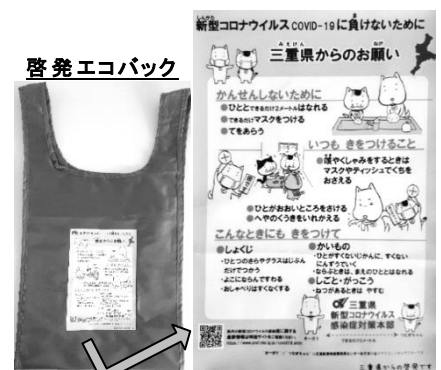
Ⅲ. 今後の課題

「暮らしの保健室」及び「よりみちカフェ」の継続を希望する地域には、継続して取り組めるよう後方支援が必要である。

（担当：星野郁子）



啓発クリアファイル



（啓発内容拡大）

IV. リカレント教育

1. 認定看護師フォローアップ研修

1. 認定看護師フォローアップ研修

担当者：地域交流センター 永見桂子、星野郁子、大坪佳寿子、中山莉子

【事業要旨】

本学認定看護師教育課程「認知症看護」修了生を対象としたフォローアップ研修を開催し、最新の知見や技術の習得によって認定資格取得後の各自の活動を振り返り、自己研鑽だけでは補えない資質の向上を図る。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で認知症ケアの質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

【昨年度からの課題】

認知症看護認定看護師のネットワークづくりにつながる研修会を企画する。

I. 活動計画

対象者：本学の認定看護師教育課程修了者（117名）

日時：令和3年12月21日（火）9時～12時

会場：オンライン研修（Zoom）

内容：COVID-19の発生状況により、特に県外在住の修了者が参加困難な状況にある。多くの修了生が参加可能となるようオンライン開催とし、認知症看護に関する講義及び活動報告を行う。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 参加者の概要

修了生117名に研修案内を行い、87名（県内36名・県外51名）が参加した。内訳としては、1期生15名（県内11名・県外4名）、2期生22名（県内10名・県外12名）、3期生23名（県内8名・県外15名）、4期生27名（県内7名・県外20名）である。

2. 研修内容

1) 特別講義「認知症高齢者と看護職者のケアリングについて」

講師：小松美砂（三重県立看護大学 老年看護学 教授）

2) 活動報告・質疑応答

(1) 「回復期リハビリテーション病院での認知症看護認定看護師の活動」

報告者：桑田五月（愛仁会リハビリテーション病院）

(2) 「認知症ケアチーム立ち上げと活動報告」

報告者：栗山正康（市立奈良病院）

(3) 「自治体病院における認知症看護認定看護師の役割～院内体制整備と地域での活動～」

報告者：直井愛子（市立貝塚病院）

(4) 「急性期病棟における認知症ケア ～事例から学んだ現状の課題～」

報告者：城井田浩二（岡波総合病院）

3) 講評 小松美砂（三重県立看護大学 老年看護学 教授）

3. 参加者アンケート

アンケート回収数 73（回収率 83.9%）。参加した理由（複数回答）としては、「自己研鑽」が最も多く 73 人であった。

満足度では、とてもよかった 62 人（84.9%）と、良かった 11 人（15.1%）が全体の 100%を占めた。「とてもよかった」、「よかった」の理由では、「ケアリングの講義では認知症者のその人らしさを知る上では非常に勉強になった」、「活動報告を聞いて参考になり、モチベーションも向上した」、「認定資格を得たばかりで、今後の活動について模索中なので、先輩方の活動報告はとても参考になった」等の意見があった。また、COVID-19 の影響によりオンライン開催としたが「WEBだと質問しにくい」という意見も聞かれた。

今後については「地域で活躍している認知症看護認定看護師の話を伺ってみたい」、「報告会のみにとどまらず、意見交流会がしたい」等、研修に期待する意見が聞かれた。

<評価>

アンケート結果からも、有益な研修であったと考える。

Ⅲ. 今後の課題

対面を望む意見も聞かれたため、COVID-19 の感染状況に注視しつつ、ハイブリッドでの開催とすることも一案ではあるが、自主的な研修会に発展させる可能性について充分検討する必要がある。

（担当：星野郁子）

V. 地域交流センター企画事業

1. 講師派遣

1) みかん大出前講座

担当者：＜講師＞出前講座テーマ登録教員

＜運営＞地域交流センター 永見桂子、長谷川明子

【事業要旨】

教員が、自身の教育、研究、社会活動の専門性や成果をもとに、保健・医療・福祉の専門家および県民を対象としたテーマを提案し、依頼に応じ、その講座を出張して行う。

【地域貢献のポイント】

- ・本学教員の研究や社会的活動の成果として看護・医療・健康に対する知識を、県民に還元するとともに、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・看護職向けの講座を提供し、県内の看護の質向上に貢献する。

【昨年度からの課題】

COVID-19による影響が当面続くことが予測されるため、感染防止対策としてオンラインによる講座にも積極的に対応できるよう調整する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

今年度と同様に COVID-19 による影響を受けた昨年度の実施件数 39 件を上回る件数を実施する。

＜実施計画＞

1. 昨年度からの変更点

- ・講師派遣の案内には、感染防止対策として、オンライン講座として対応することが可能であることを追記する。
 - ・依頼元への連絡内容に、COVID-19 の感染防止対策の徹底と中止またはオンラインへの変更に関する連絡を明記する。
2. 5月初旬に講師派遣の案内パンフレットを作成し、5月中旬までに県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。
 3. 申込受付の期限は、令和3年11月30日へ延長する。
 4. 申込があった際には、担当教員と日程調整を行い、日時を決定する。
 5. 講座の開催は、令和4年3月末日までとする。
 6. 出前講座のうち、広く県民が参加できる公開の講座として依頼者から了解を得た場合は、本学ホームページで参加者を募り、公開講座として実施する。
 7. テーマ毎の受付上限件数に達した場合は、本学ホームページに掲載し周知する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

今年度の出前講座のテーマを表1に示す。【A 健やかな暮らしのために】のテーマ数は23、【B 将来の職業選択のために】のテーマ数は5、【C 高めよう保健・看護の力】のテーマ数は

マ数は 6 であり、合計 34 テーマの登録があった。一般の対象は幼児から高齢者までと幅広く、専門職では、看護職を含む医療職、介護職、教員を対象としていた。

表 1. 令和 3 年度 みかん大出前講座の全テーマ

分類	No.	テーマ
A 健やかな暮らしのために	A-1	「普通」ってなんだろう
	A-2	社会的活動としての話すこと・聴くこと
	A-3	老いと向きあう
	A-4	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ
	A-5	地域で育てよう！子どものやる気と自己肯定感
	A-6	子育て・孫育てに役立つ基礎知識－子どもの成長発達と毎日の生活習慣－
	A-7	思春期男子のこころとからだを理解しよう
	A-8	子どもに関わる大人に必要な性のお話
	A-9	楽しく・おいしく減塩しましょう！
	A-10	健康寿命をのばそう！
	A-11	知って防ごう熱中症
	A-12	心肺蘇生法をマスターしよう！
	A-13	薬に関する四方山話
	A-14	黙って働く腎臓、知って守って健やかに
	A-15	血栓症の発症原因とその治療薬
	A-16	テレワークによるVDT作業の疲労を防ごう！快適な職場をみざすコンピューター労働の人間工学
	A-17	知っておきたい！「女性のこころとからだ」
	A-18	更年期以降をいきいきと過ごすために
	A-19	コケない・折れない・いつまでも自分の足で歩き続けるためのフットケア
	A-20	みんなで楽しくスクエアステップ！！
	A-21	自宅で介護が必要といわれたら
	A-22	認知症介護の考え方と技術
	A-23	呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！
選 B 将来の職業に	B-1	どんな仕事に興味があるかな
	B-2	大学で学ぶこと
	B-3	看護の仕事について
	B-4	看護職(保健師、助産師)のお仕事を知ろう
	B-5	看護大学で学ぶ「看護技術」の授業
保 C 健康・看護の力	C-1	医療事故はなぜ起きる？－ヒューマンエラーを防ぐための人間工学－
	C-2	職場のメンタルヘルス
	C-3	高齢者とのケアリング
	C-4	認知症ケアの考え方と技術
	C-5	そうだ！WOCに聞いてみよう！スキンケア全般の相談
	C-6	性暴力被害を受けた方たちへの看護について考えよう

申込件数は 51 件、実施件数は 43 件であった。実施しなかった 8 件のうち 4 件はその他の講座への変更、4 件は COVID-19 の感染拡大により中止となった。43 件中、7 件

(16.3%)がオンライン講座であり、うち2件は申し込み時よりオンライン講座を希望していたが、残る5件は、急激な感染拡大による変更の希望を受け、対応したものである。参加者総数は、904名であり、昨年度参加者総数(1028名)を下回った。

今年度は、講師との日程が合わない、受付上限件数を越えたという理由による未実施はなく、講師と日程が合わない場合も、依頼元へ再度希望を確認し、ニーズに合わせてその他の講座を提案することで、できる限り申し込みを受け入れることができるよう対応した。

今年度の出前講座の実績を表2に示す。出前講座のテーマ分類別では【A 健やかな暮らしのために】が28件、【B 将来の職業選択のために】が5件、【C 高めよう保健・看護の力】が10件であった。出前講座のうち、公開の講座として予定したものが3件あったが、COVID-19の影響によりうち1件は中止となった。

表2. 令和2年度 みかん大出前講座実績

分類	テーマ	実施数	派遣先	参加者
A 健やかな暮らしのために	老いと向きあう	1	行政機関	看護師・介護士・一般(公民館高齢者講座)
	地域で育てよう！子どものやる気と自己肯定感	3	行政機関・教育機関	一般(公民館講座)
	子育て・孫育てに役立つ基礎知識-子どもの成長発達と毎日の生活習慣-	1	行政機関	教員・一般(子育て支援ボランティア・中学校保護者)
	思春期男子のころとからだを理解しよう	3	教育機関	特別支援学校生徒、中学3年生
	健康寿命をのばそう！	4	行政機関	一般(公民館女性講座・健康推進サークル)
	薬に関する四方山話	3	行政機関	一般(公民館高齢者講座)
	テレワークによるVDT作業の疲労を防ごう！快適な職場をみぞすコンピューター労働の人間工学	1	行政機関	行政職員
	知っておきたい！「女性のころとからだ」	3	教育機関	特別支援学校生徒、中学3年生
	コケない・折れない！いつまでも自分の足で歩き続けるためのフットケア	3	医療機関・行政機関・その他(ボランティア団体)	看護職・一般(公民館サークル・ボランティア)
	みんなで楽しくスクエアステップ！！	3	その他(高齢者サークル)	一般(高齢者)
	認知症介護の考え方と技術	2	医療機関・行政機関	医療職・介護職・一般(民生委員ほか)
呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！	1	行政機関	一般(公民館講座)	
B たのびの職業将来	看護の仕事について	3	教育機関	中学2年生
	看護職(保健師、助産師)のお仕事を知ろう	2	教育機関	高校1,2年生
C 保健・高めよう看護の力	医療事故はなぜ起きる？-ヒューマンエラーを防ぐための人間工学-	2	医療機関・その他(訪問看護ステーション)	看護師・医師・薬剤師・介護士・理学療法士・事務職
	職場のメンタルヘルス	2	医療機関・社会福祉機関	看護師・介護士・介護福祉士・栄養士
	高齢者とのケアリング	2	医療機関・その他(訪問看護ステーション)	看護師・介護士・介護福祉士・栄養士・事務職
	認知症ケアの考え方と技術	2	医療機関・行政機関	看護師・保健師・医師・介護士・介護福祉士・作業療法士・理学療法士・事務職・医療ソーシャルワーカー
	そうだ！WOCに聞いてみよう！スキンケア全般の相談	2	医療機関・社会福祉機関	看護師・介護士・介護福祉士・栄養士

依頼元の分類別にみると、行政機関16件、医療機関7件、社会福祉関連機関2件、教育機関12件、その他6件であった。

終了後のアンケートへの協力は、829名より得られ、全参加者の91.7%より回答が得られた。講座への満足度は、「とてもよかった」が590名(71.2%)、「よかった」が223名(26.9%)であった。「あまりよくなかった」が10名(1.2%)「よくなかった」が4名(0.5%)あったが、その理由は、「内容が難しく理解しにくかった」、「オンラインでもよかった」等であった。無回答は、2名であった。増加したオンライン講座については、「リモート研修だと感染のリスクが下がるので安心できる」等の肯定的な感想が得られた。

<評価>

実施件数は昨年度の 39 件を上回り、数値目標を達成した。参加者総数は 904 名となり、昨年度の 1105 名を下回ったが、これについては、COVID-19 の感染防止対策として対面の講座においては、参加人数を縮小していることが背景にある。

また、昨年度は COVID-19 の影響による中止が 12 件のところ、今年度は、オンライン講座に積極的に対応し、中止を 4 件に抑えることができた。申込時に寄せられた県民の声からも、コロナ禍においても、オンラインへの対応、少人数の講座への対応等、感染防止対策を十分にとったうえで講座を開催することで、県民のニーズに応えることができたのではないかと考えられる。

また、アンケートの結果より、講座への満足度は高く、本学教員の看護・医療・健康に対する知識の提供を通して、県内の医療、介護に関わる専門職だけでなく、高齢者や学生をはじめとする地域住民の健康への知識の獲得や意識の向上へ幅広く貢献できたと評価する。

Ⅲ. 今後の課題

今年度も COVID-19 による影響は続くことが予測されることから、感染防止対策として、中止またはオンラインによる講座に速やかに対応できるよう依頼元および講師と調整をはかる。

2) みかん大リクエスト講座

担当者：＜講師＞全教員

＜運営＞地域交流センター 永見桂子、長谷川明子

【事業要旨】

みかん大出前講座のテーマに該当しない講師派遣について、県民から要望のあったテーマ・内容に応じて講師を派遣し、有料で出張講座を行う。

【地域貢献のポイント】

- ・みかん大出前講座に該当しないテーマに対し、「みかん大リクエスト講座」により依頼に応じることで、広く県民の要望に応えることができる。
- ・看護職向けの講座の依頼に応じ、県内の看護の質向上に貢献する。

【昨年度からの課題】

COVID-19による影響が当面続くことが予測されるため、感染防止対策としてオンラインによる講座にも積極的に対応できるよう調整する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

今年度と同様に COVID-19 による影響を受けた昨年度の実施件数 17 件を上回る件数を実施する。

＜実施計画＞

1. 昨年度からの変更点

- ・講師派遣の案内には、感染防止対策として、オンライン講座として対応することが可能であることを追記する。
- ・依頼元への連絡内容に、COVID-19 の感染防止対策の徹底と中止またはオンラインへの変更に関する連絡を明記する。

2. 5月初旬に講師派遣の案内パンフレットを作成し、5月中旬までに県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。

3. 申込受付の期限は、令和3年11月30日へ延長する。

4. 申し込みのあったテーマや内容に合わせて、教員を選出し、依頼元と教員双方の条件が合致した際には、日程・テーマを決定し講師を派遣する。講座までの準備期間には、依頼元と教員間で講座の内容等について直接調整をすすめる。

5. 講座の開催は、令和4年3月末日までとする。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

今年度の派遣先分類別リクエスト講座の実績を表1に示す。

申込件数は24件、実施件数は22件、中止2件であった。中止2件は、COVID-19の感染拡大によりキャンセルの申し出があり、中止となった。参加者総数は、566名と昨年

度参加者総数の 586 名を下回ったが、開催件数は、昨年度の 17 件より 5 件増加した。今年度は COVID-19 の感染防止対策として、7 件のオンライン講座に対応し、オンライン講座が全体の 3 分の 1 を占めた。7 件中 3 件は、申し込み時よりオンライン講座を希望していたが、残る 4 件は、急激な感染拡大による変更の希望を受け、対応したものである。なお、キャンセルの申し出があった 2 件は、オンラインでの対応も可能であることを伝えたが、講座を予定していたイベント自体が開催不可能であることにより中止となった。

派遣先は医療機関が最も多く 14 件であり、テーマ・内容は、実践 8 件、教育 4 件、研究 2 件であった。医療機関の中には、数年にわたり継続して、同じテーマで講座を申し込む施設もみられる。また、看護職の会議や委員会へ講師が同席して支援するかたちの講座もみられた。医療機関に次ぐ派遣先は、行政機関 5 件であり、市町の地域包括支援センターからの依頼が増加した。COVID-19 関連の講座としては、「新型コロナウイルス感染症について～知識と予防～」、「施設・居宅における感染対策～あれ？防護服ってどう着る&脱ぐ？～」、「施設・訪問サービスにおける感染症対策と業務継続のポイント」を実施した。

申し込みの際には、講師派遣の案内パンフレットやホームページ上に掲載した前年度の講師派遣テーマ一覧表を参考にしながら、テーマ・内容についての相談があった。

終了後の各講座の評価は、「とてもよかった」「よかった」の肯定的評価が 100%であった。オンライン講座についても、他の講座と相違のない評価であり、問題点はみとめられなかった。

表 1 令和 3 年度 派遣先分類別リクエスト講座の実績

派遣先分類	テーマ	参加のべ人数(名)
医療機関	マネジメントラダーの見直し(4回)	28
	看護研究(2回)	12
	関連図を学ぶ	41
	看護診断を学ぶ	55
	看護診断(3回)	29
	形態機能学を活かした看護実践(2回)	43
	コーチングの基本	8
行政機関	子どもを理解するための基礎知識	16
	子どもの家庭福祉	16
	施設・居宅における感染対策～あれ？防護服ってどう着る&脱ぐ？～	35
	施設・訪問サービスにおける感染症対策と業務継続のポイント	100
	大規模災害時の対応 業務継続のため平時から備えておくこと	58
教育機関	新型コロナウイルス感染症について～知識と予防～	62
	薬物乱用防止講座	37
その他(文化団体)	健康で長くボランティアを続けるために	26

<評価>

実施件数は、COVID-19 流行以前 3 年間の平均実施件数 19 件を上回った。その理由として、オンラインによる講座を積極的に受け入れたこと、また行政機関や教育機関による COVID-19 関連の講座のニーズが高まったことが考えられる。参加者総数は、昨年度より 25 名減少したが、対面の講座においては、感染対策のため参加人数を縮小していることが背景にある。

申し込みは、医療機関が全申し込みの 6 割を超え、医療機関における講座のテーマ・内容は、実践・教育・研究、各側面から看護職者のニーズに合わせた講座を開催し、県内の看護の質の向上に寄与することができたのではないかと考える。また、市町の地域包括支援センター等、医療機関の看護職以外の医療・福祉・介護関係者といった幅広い対象へ講座を提供することができた。

今年度も、昨年度に引き続き COVID-19 の感染拡大状況等をふまえつつ、依頼者の要望に合わせ、中止またはオンライン講座の対応をとり、ニーズに合わせた講座の実施ができたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

次年度も COVID-19 による影響は続くことが予測されることから、感染防止対策として、中止またはオンラインによる講座に速やかに対応できるよう依頼元、講師と調整をはかる。

2. 看護研究支援

1) 看護研究SEED（オンライン研修）

担当者： <講師> 菱沼典子、大川明子、上田貴子、関根由紀、長谷川智之、玉田章
<運営> 地域交流センター 長谷川智之、川瀬浩子

【事業要旨】

看護職者の研究基礎能力を培うことを目的に、看護研究の基礎知識に関する研修を実施する。平成28年度以降、遠隔配信研修（地理的条件から本学に通うことが困難な地域の看護職者を対象に、テレビ会議システムを利用して遠隔配信で行う）と集合研修を毎年交互に行っている。

【地域貢献のポイント】

県内の看護職者が、看護研究の基礎知識に関する研修を受講することにより、研究的思考や研究遂行能力の礎を築く。また日常の看護業務の中から研究テーマを見出すことによって、看護研究へ取組む意欲を高め、研究を実践し、結果看護の質の向上につながる。

【一昨年度からの課題】

- ・ COVID-19 感染症拡大防止対策を講じ、受講者が安心して参加できる形式を取り入れる
- ・ 研修の開催曜日や回数等、研修形態を検討する

I. 活動計画

<数値目標>

COVID-19 感染症拡大防止対策のため、オンライン研修先の受講部屋の環境が定員の半数以下となる。それに伴い、参加者数は前回の遠隔配信時（R1）の延べ受講者数 258 名・7 回（平均 36.9 名/回）の半数程度（平均 18.5 名/回）を目指す。

<実施計画>

・ 例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

1. 今年度は遠隔配信研修の年であったが、遠隔配信時の方法（テレビ会議システムを利用して、3か所の遠隔配信先で行う。遠隔配信先では近隣施設の看護職と合同で受講する）が、COVID-19 感染症拡大防止の観点から適していないため、インターネット環境が整っていれば、どこからでも自由に参加できる Microsoft Teams による Web 会議システムを利用した。
2. オンライン受講する方法は、個人が自宅で受講する方法と、施設単位（施設の代表 PC に配信し、自施設の看護職者が集まって受講）で受講する方法を選べるようにした。
3. 個人でオンライン受講する方法では、「全受講コース」と「単回受講コース」を選べるようにした。

・ 実施計画

1. 令和3年4月に研修計画を立て、半月に1回を目安に調整し、プログラムと受講案内を県内各医療・行政機関等（152施設）へ送付するとともに、本学ホームページに

掲載する。

- 今年度は5月18日以降から7月12日まで、オンライン研修にて行う。
- 各回終了時に、アンケート調査を行う。
- 本センターホームページに報告記事を掲載する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 研修の実際

看護研究 SEED は、研修プログラムと参加者数（表1）のとおり、9科目を5日間で実施した。また、月2回程度と間隔を空けての開催スケジュールを調整できた。

表1 令和3年度 研修プログラム

回	科目	開催日	曜日	時間	担当者
1	センター長あいさつ・オリエンテーション	5月18日	火	10:20～10:30	センター長
	看護研究の意義と文献の活用			10:30～12:00	菱沼 典子
	研究計画の立て方と書き方			13:00～14:30	大川 明子
2	看護研究における倫理的配慮	5月26日	水	10:30～12:00	大川 明子
	研究デザインのタイプと選択			13:00～14:30	上田 貴子
3	質的研究(インタビュー)	6月8日	火	10:30～12:00	関根 由紀
	量的研究(アンケート)			13:00～14:30	関根 由紀
4	量的研究(実験・計測)	6月29日	火	10:30～12:00	長谷川 智之
	研究論文作成			13:00～14:30	玉田 章
5	プレゼンテーション(演習含む)	7月12日	月	13:00～15:00	上田 貴子



菱沼典子



大川明子



上田貴子



関根由紀



長谷川智之



玉田章



講師

受講申込は、個人受講に6名（内単回受講コース1名）、施設受講に4施設であった。各回の参加者数は23～27名で、延べ227名9回（平均25.2名/回）であった。

2. 受講生アンケート結果

1) 受講生の属性 【最終回に実施：アンケート回収数23（回収率95.8%）】

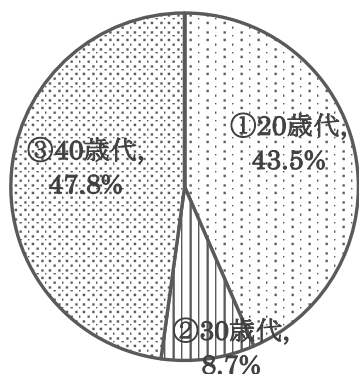


図1 受講生の年代

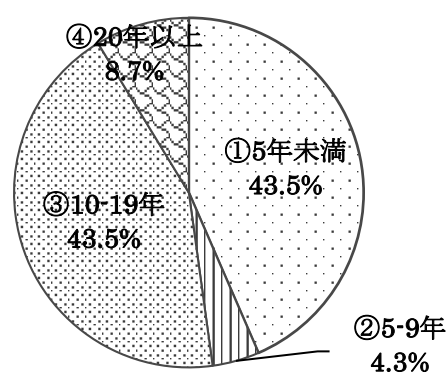


図2 受講生の経験年数

受講生の年代（図1）は、40歳代が最も多く47.8%、次いで20歳代43.5%であった。また経験年齢（図2）も5年未満と10-19年が43.5%と最も多く、職位（複数回答）（図3）でもスタッフが最も多かった。

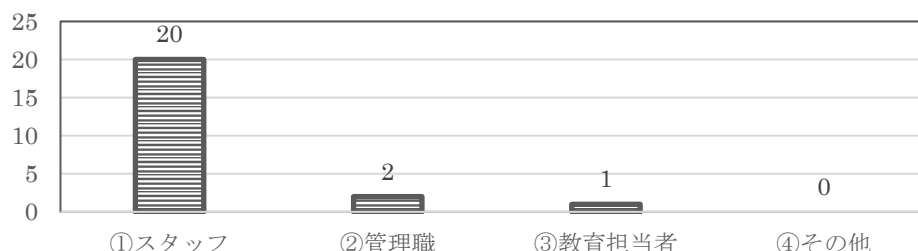


図3 受講生の職位（複数回答）

2) 講義内容について 【各回に実施：アンケート回収数23～26（回収率～92.3～100%）】

各講義内容の理解度は図4に示す。「①とても理解しやすかった」「②理解しやすかった」と回答した者は「研究計画の立て方と書き方」で72.0%、その他の科目は82.6～100%であった。その理由は「基本を復習できた」「例やワークがあって、わかりやすかった」等であった。一方「③やや理解しにくかった」と回答した理由は、「聞きなれない言葉が多かった」「難しい言葉が多かった」であった。

また昨年度同様「④理解しにくかった」と回答した者はすべての講義でみられず、昨年同様、H25年以來の好結果を持続できた。

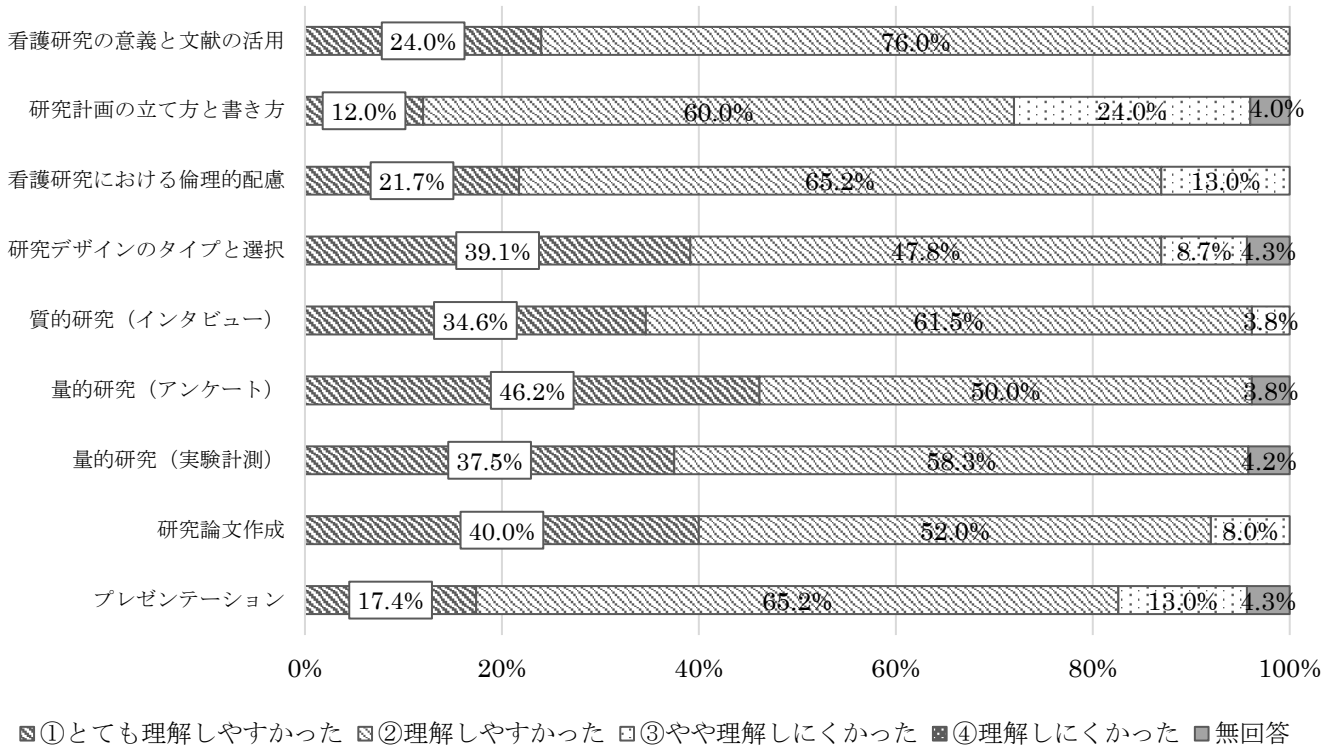


図4 講義内容の理解度

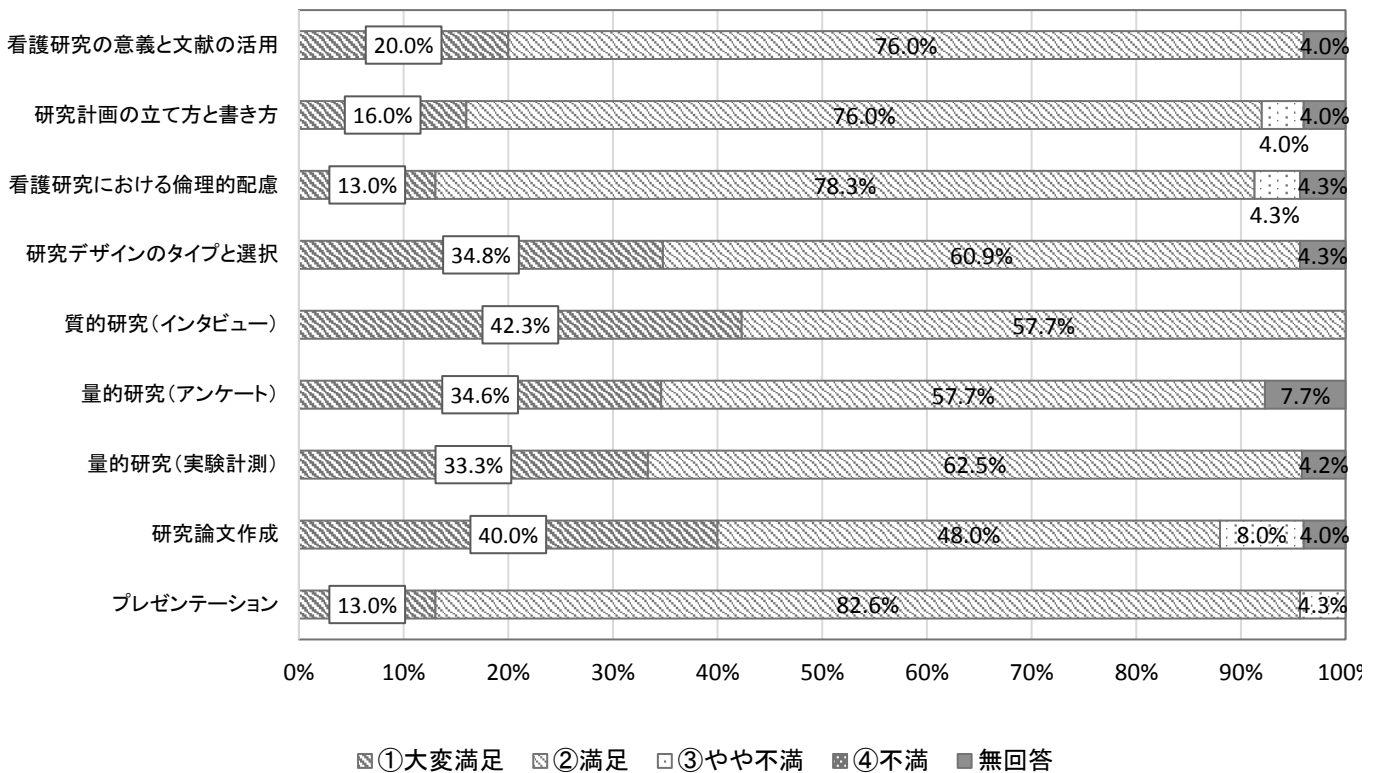


図5 講義内容の満足度

講義内容の満足度は図5に示す。「①大変満足」「②満足」と回答した者は88.0～100%で、その理由は「詳しい解説で理解しやすかった」「自己の勉強では足りないことを教えていただいた」「考え直すきっかけになった」であった。「③やや理解しにくかった」と回答した理由は「文字ばかりで難しいところがあった」であった。

3) 看護研究SEED研修全般について【最終回に実施:アンケート回収数23(回収率95.8%)】

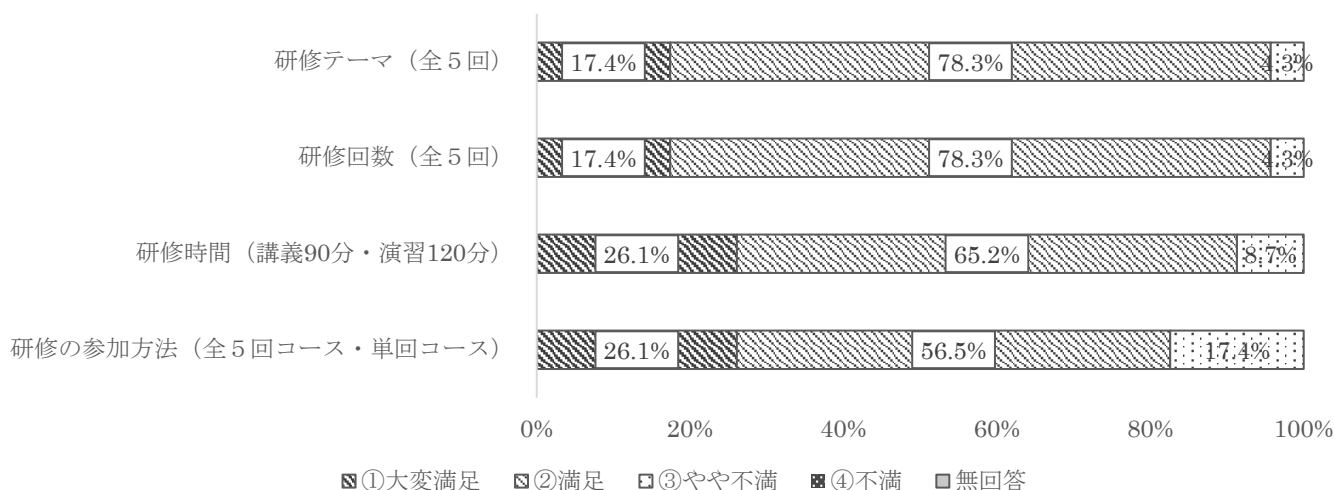


図6 研修全般の満足度

研修全般に対する満足度(図6)では、「①大変満足」・「②満足」と回答した割合が82.6～95.7%であり、「研修時間」と「研修参加方法」の評価が他の項目に比べ低い結果となった。「研修の時間」の回答理由では「勤務調整できてよかった」等の意見の一方、「③やや不満」と回答した理由が「昼ご飯をはさまないのがよりありがたい」であった。受講施設の研修担当者からは「長時間連続は、集中力が保たれるかが疑問」「(午前または午後と)まとめて研修が行われる場合は、場所の確保が困難」の意見もあった。また、「研修の参加方法(オンライン受講)」では、「勤務内中に参加できた」等の意見の一方、「オンラインなので、遠くに行かずに受講できるのはありがたかったが、対面ではないので、少しわかりにくいところもあった」「実際の会話がしにくく、残念な点もあった」といった意見もあった。

「学んだことは、あなたの今後役に立つか」の設問には、「①とても役に立つ」・「②役に立つ」と回答した割合が100%で、その理由は「基本的なことに知識がなく、不安があったが、知ることができた」「看護研究の進め方を検討するときに役立つと思った」であった。

「看護研究SEEDを受講し、看護研究をしよう(又は続けよう)と思う」の設問には、「はい」と回答した割合が87.0%で、その理由は「今までわからないことがわかったので、論文も発表も頑張ろうと思った。」等の意見があった。また「看護研究SEEDへの意見・感想」では、「今まできちんと系統的に学んだことがなかったので、今日の研修で理解できてよかった」等、「今後の研修希望」では「実際の研究支援を受けたい」等の意見があった。

<評価>

昨年度の課題であった「COVID-19 感染症拡大防止対策を講じ、受講者が安心して参加できる形式を取り入れる」・「研修の開催曜日や回数等、研修形態の検討」は、Microsoft Teams による Web 会議システムを利用したオンライン研修を取り入れ、月 2 回程度と間隔を空けての開催スケジュールを調整できたことで達成できたと評価する。従来行っていたテレビ会議システムを利用したオンライン研修は、受信装置のある施設が 3 施設と限られるため、利便性の高い Microsoft Teams を利用したオンライン研修を今後の継続していく。また「数値目標：平均 18.5 名/回を目指す」では、今回延べ平均 25.2 名/回と達成することができた。これは COVID-19 感染症の影響のなかった前回の平均 36.9 名/回の 7 割弱に値する。次年度の集合研修でも、引き続き COVID-19 感染症拡大防止対策を講じ、受講者間に衝立を用意するなど、対面でも受講者が安心して参加できる形式を取り入れたい。

講義内容に関しては昨年度同様、理解度、満足度ともに高い結果であった。受講者の回答理由より、オンライン講義であっても担当講師が実例を示したり、演習を組み入れたりして、具体的に講義を行ったことが結果につながったと考える。一方、「聞きなれない言葉」「難しい言葉」が受講者の理解を妨げていたため、専門用語などわかりにくい用語の説明に留意し、受講者にわかりやすい講義内容としていきたい。

事業全般に対して、「研修時間」が他の項目に比べ低い結果となったが、受講施設の意見を尊重し、現状のままで行う。また同様に他の項目に比べ低い結果となった「研修参加方法」は、講義中、チャットおよびブレイクアウトセッション機能を活用したり、「問う」「調べる」といったオンライン研修の Input の工夫を実施したり、講義毎質問の時間を設けたが、1対1のコミュニケーションが取りづらいといったデメリットは払拭できなかった。次回開催に向け、双方向性のある方法を模索していく必要がある。

「研究への意欲」や「看護研究 SEED への意見・感想」から、看護研究 SEED は、研究の基礎知識を系統的に学ぶことにより、受講者の研究基礎能力を培い、「実際の研究支援を受けたい」の声からも今後の看護研究へ取り組む意欲を高めるきっかけとなったことが伺えた。

Ⅲ. 今後の課題

【次年度集合研修に向けて】

- ・引き続き COVID-19 感染症拡大防止対策を講じ、受講者間に衝立を用意するなど、対面でも受講者が安心して参加できる形式を取り入れる。
- ・「講義内容」に関して、専門用語などわかりにくい用語の説明に留意し、受講者にわかりやすい講義内容にしていく。

【次回遠隔配信研修にむけて】

- ・Microsoft Teams による Web 会議システムを利用したオンライン研修を行う。
- ・双方向性のある方法を模索していく。

2) 看護研究エッセンス

担当者： <講師> 斎藤真、大西範和

<運営> 地域交流センター 長谷川智之、川瀬浩子

【事業要旨】

看護研究の基礎知識に関する研修（看護研究 SEED 等）を修了した看護職者を対象に、看護研究の質の向上を目的に、研究遂行能力の強化に関する研修を実施する。

【地域貢献のポイント】

看護研究の基礎知識を習得した看護職者が、研究遂行能力を強化する方法を学び、演習型の研修を受講することにより、看護現場での研究実践が充実し、看護の質向上につながる。

【昨年度からの課題】

- ・受講者の研究遂行能力の強化に関する企画コースの増加
- ・COVID-19 感染症拡大防止対策を講じ、フェイスシールドやパーテーション等で受講者が安心して参加できる形式を続け、「数値目標：10名程度の受講生が得られる」の達成

I. 活動計画

<数値目標>

- ・10名程度の受講生が得られる。

<実施計画>

- ・昨年度からの変更点（昨年度の課題を含む）

新たに「実験体験会」が加わり、受講者の研究遂行能力強化に関するコースの企画を増やした。

- ・実施計画

1. 令和3年4月に研修計画を立て、本学ホームページに募集記事を掲載する。
2. 令和3年5月に、プログラムと受講案内に、ハウツー看護研究のチラシを同封し、県内各医療・行政機関等（151施設）へ送付し、受講者自身が研究能力に沿った研究支援のコースを選び、受講計画を立てやすいよう案内する。
3. 他の事業を実施する際、本事業への受講生の反響を広報し、受講をすすめる。
4. 7月から11月に、COVID-19 感染症拡大防止対策のため、学内基準に基づき、感染防御対策に努め、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。
5. 各回終了時に、アンケート調査を行う
6. 本センターホームページに報告記事を掲載する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 研修の実際

教員から応募されたコースは「統計解析（基本編）」の2コースと、「実験体験会」であ

った。研修内容は、研修プログラム（表1）のとおり、3コマで実施した。

受講申込は、統計解析①には1施設1名、統計解析②および実験体験会は申し込み者がなく中止となった。

表1 令和3年度 研修プログラム

コース	日時	担当者	概要
統計解析① (基本編)	7月4日(土) 10:40~16:10	斎藤 真	初学者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法について考え方と実際の使い方を学びます。 アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講座です。
統計解析② (基本編)	11月28日(土) 10:40~16:10	斎藤 真	
実験体験会	7月31日(土) 10:40~16:10	大西 範和	気温と湿度を制御できる人工気候室で、寒さなどにより起こる皮膚血管収縮反応や体温の変化について調べる実験を体験します。「冷え」などについて一緒に考えてみましょう。 実験室のスペースの事情で最大3名で行います。

2. 受講生の反応

「一つ一つ丁寧に教えていただいた。普段仕事をしているので、短い回数で必要な内容が学べるとありがたい」と好評であった。

<評価>

昨年度の評価を踏まえ、新たに「実験体験会」が加わり、受講者の研究遂行能力強化に関するコースの企画を増やすことはできた。しかし県内の急速なCOVID-19感染症拡大が影響し、開催できたコースは「統計解析（基本編）」の1コースのみであり、「数値目標：10名程度の受講生が得られる」でも、目標を達成できなかった。看護研究エッセンスは、その内容より対面での講義が望ましい研修であるため、フェイスシールドやパーテーション等でCOVID-19感染症拡大防止対策を講じ、受講者が安心して参加できる形式を続けたい。また、コースの内容をわかりやすく、より魅力的に紹介できるよう「概要」の内容を検討したい。

一方、参加者の講義内容や研修全般への満足度は高く、その理由からも、受講者の研究遂行能力が強化でき、看護研究の質の向上に繋がることがうかがえた。



研修の様子

Ⅲ. 今後の課題

- ・ COVID-19感染症拡大防止対策を講じ、フェイスシールドやパーテーション等で受講者が安心して参加できる形式を続け、「数値目標：10名程度の受講生が得られる」の達成
- ・ コースの内容をわかりやすく、より魅力的に紹介できる「概要」の内容の検討

3) ハウツー看護研究

担当者： <講師> 浦野茂、関根由紀、斎藤真、菅原啓太、長谷川智之
<運営> 地域交流センター 長谷川智之、川瀬浩子

【事業要旨】

看護研究の基礎知識に関する研修（看護研究 SEED 等）を修了した看護職者を対象に、研究遂行能力の向上を目的に、実際に行うための具体的な研究方法について研修を実施する。

【地域貢献のポイント】

看護研究の基礎知識を習得した看護職者が、実際に行うための具体的な研究方法を学び、体験することにより、看護現場での研究実践が充実し、看護の質の向上につながる。

【昨年度からの課題】

- ・ COVID-19 感染症拡大防止対策を講じ、フェイスシールドやパーテーション等で、受講者が安心して参加できる形式を続け、「数値目標：10 名程度の受講生が得られる」の達成

I. 活動計画

<数値目標>

- ・ COVID-19 感染症拡大防止対策に留意し、10 名程度の受講生が得られる。

<実施計画>

・ 実施計画

1. 令和 3 年 4 月に研修計画を立て、本学ホームページに募集記事を掲載する。
2. 令和 3 年 5 月に、プログラムと受講案内に、看護研究エッセンスのチラシを同封し、県内各医療・行政機関等（151 施設）へ送付し、受講者自身が研究能力に沿った研究支援のコースを選び、受講計画を立てやすいよう案内する。
3. 他の事業を実施する際、本事業への受講生の反響を広報し、受講をすすめる。
4. 8 月から 12 月に、COVID-19 感染症拡大防止対策のため、学内基準に基づき、感染防御対策に努め、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。
5. 各コース終了時に、アンケート調査を行う。
6. 本学ホームページに報告記事を掲載する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 研修の実際

ハウツー看護研究は、研修プログラムと参加者数（表 1）のとおり、3 コースとも 3 回（計 7 コマ）で計画した。量的研究コース（実験・計測）は申し込み者がなく中止となった。受講申込は、インタビューコースには 3 施設より 7 名、アンケートコースには 3 施設より 4 名、計 11 名であった。内、施設単位看護研究支援先病院からの申し込みは 7 名であった。

表 1 令和3年度 研修プログラムと参加

コース	質的研究コース (インタビュー)	量的研究コース (アンケート)	量的研究コース (実験・計測)
日時	①8月20日(金) 13:00~16:10	①10月2日(土) 9:00~12:10	①11月27日(土) 9:00~12:10
	②9月3日(金) 13:00~16:10	②10月2日(土) 13:00~16:10	②11月27日(土) 13:00~16:10
	③9月17日(金) 10:40~16:10	③10月16日(土) 9:00~14:30	③12月11日(土) 9:00~14:30
担当者	浦野 茂・関根由紀	斎藤 真・菅原啓太	斎藤 真・長谷川智之
テーマ	インタビューによる 質的研究を行ってみる	「質問紙の作成と調査の実施」 ー職務満足度について考えをさぐるー	「看護職者の腰痛に関連する 援助時のベッドの高さについて」 ～身近にあるモノを使用し、 明日から使える実験研究!～
第1回	1. 質的研究法の内容と特徴 2. 研究課題を作る 3. 研究デザインを考える 4. インタビューガイドを作る	1. はじめに 2. 調査を行う前に 倫理的配慮を含めた調査研究の注意事項 3. 調査用紙に用いる尺度 4. 調査用紙の作成: フェースシート、単一回答/選択、 複数回答/選択、順位法、数値配分法、 SD法、自由記述 5. 調査開始 6. データの入力・集計	1. 看護研究における実験研究とは 2. 実験研究の紹介 3. 実験を行う前に: 倫理的配慮を含めた実験の注意事項
第2回	1. インタビューを行う 2. トランスクリプトを作る 3. 分析する	1. 集計結果の整理、図式化 2. 統計的解析 3. データの検討 4. 結果の整理と考察への展開	1. 実験の準備: 実験環境、必要な物品、実験手順の確認 など 2. 実験開始: 実験協力者への説明と同意 2種類のベッドの高さで看護援助を行った 際の腰部負担の測定 3. データの集計
第3回	1. 分析結果をまとめる 2. 「発見」を作る	・論文の作成: 目的、方法、結果、考察の記述	1. データ分析: 図表の作成、excelを使用した検定 2. 「考察」の検討: 論文の考察について、何を記述すべきか 3. 抄録(学会発表レベル)の作成
参加者数	5	4	開催中止



質的研究コース 「インタビュー」の様子



量的研究コース 「アンケート」の様子

2. 受講生アンケート結果

アンケート回収数 8 (回収率 100%) * 最終日 3 名欠席のため 8 名対象

1) 受講生の属性

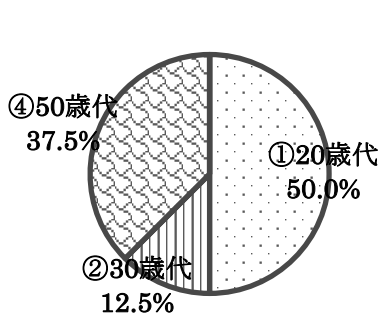


図 1 受講者の年代

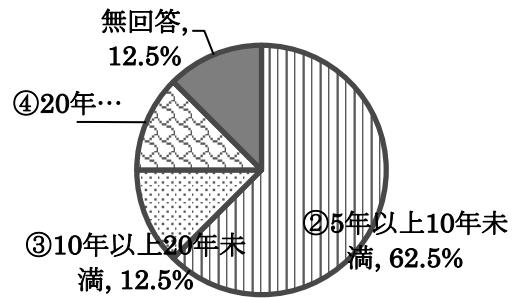


図 2 受講者の経験年数

今年度の受講生の年代(図 1)は 20 歳代が 50.0%と最も多く、次いで 50 歳代であった。経験年齢(図 2)は 5 年以上 10 年未満が最も多く、62.5%であった。また、職位(図 3)は、スタッフ、管理職の順であった。

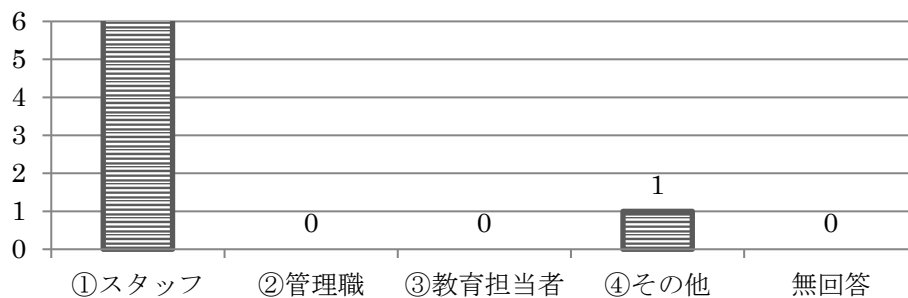


図 3 受講生の職位 (複数回答)

2) 講義内容について

各講義内容の理解度(図 4)は「①とても理解しやすかった」と回答した者は 85.7%、「②理解しやすかった」14.3%と回答しており、「やや理解しにくかった」「理解しにくかった」と回答した者はいなかった。その理由は「実際に一緒に考える時間があった良かった」「言葉の意味から説明していただき、よくわかった。また実際にやってみることで、難しさや方法をよく理解できた。」等であった。

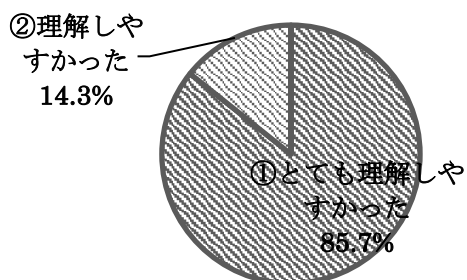


図 4 講義内容の理解度

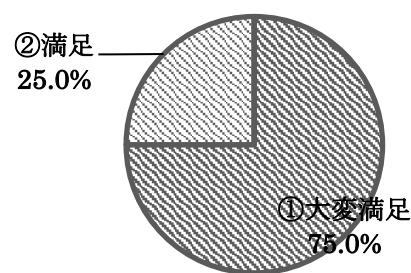


図 5 本コースの満足度

3) 本事業全般について

本コースの満足度(図5)は「①大変満足」と回答した者は75.0%、「②満足」と回答した者は25.0%で、その理由は「これまで疑問に思っていたことが解決できた」「今まで学んでこなかった分野を学ぶことができてよかった」等であった。

講座の回数や時間(7コマ)についても、「大変満足」「満足」と回答した者は100%で、その理由は「丁度良い」等であった。

「このコースで学んだことは、あなたの今後役に立ちますか」の設問には、「とても役に立つ」「役に立つ」と回答した者は100%で、その理由は「今研究しているので、本当に受けてよかった」「分析するにあたり、進め方等、実感でき、役に立った」であった。

「本コースを受講し、看護研究をしよう(又は続けよう)と思う」の設問には、87.5%の者が「はい」と回答し、その理由は、「具体的な方法がわかったため、研究を進めようと思った」等であった。

「本コースへの意見・感想」では、「楽しかった」「とてもよくわかった。研究をすすめる意欲も高まり、参加できて良かった」等であった。

<評価>

県内の急速なCOVID-19感染症拡大と重なったが、施設単位看護研究支援先病院からの受講者が増え、「数値目標:10名程度の受講生が得られる」を達成できた。ハウツー看護研究は、その内容より対面での講義が望ましい研修であるため、フェイスシールドやパーテーション等でCOVID-19感染症拡大防止対策を講じ、受講者が安心して参加できる形式を続けたい。また、量的研究コース(実験・計測)昨年度同様申し込み者がなかったため、講座名と内容を検討する。

一方、参加者の講義内容の理解度やコースの満足度が高く、受講者が記載した「その理由」からも、受講者の研究遂行能力の向上が「看護現場での研究実践の充実」や「看護の質の向上」に繋がることがうかがえた。

Ⅲ. 今後の課題

- ・ COVID-19感染症拡大防止対策を講じ、フェイスシールドやパーテーション等で、受講者が安心して参加できる形式を続ける。
- ・ 量的研究コース(実験・計測)の講座名と内容を検討する。

4) その他の看護研究支援

R3 担当者：＜施設単位看護研究支援講師＞

前田貴彦、林辰弥、上田貴子、玉田章、宮崎つた子、長谷川智之
川島珠実、小松美砂、灘波浩子、関根由紀

＜看護研究発表会支援講師＞

中西貴美子、川島珠実

＜運営＞地域交流センター 永見桂子、長谷川智之、川瀬浩子

【事業要旨】

県内医療機関等における看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とする。看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とし、看護研究を行う看護職の複数のグループ又は個人に対し、看護研究のプロセスに沿った支援、施設内における研究支援体制構築への支援等を行う「施設単位看護研究支援」と、看護研究発表会における講評・審査を行う「看護研究発表会支援」を実施する。

【地域貢献のポイント】

看護職者が、臨床現場における課題について看護研究を行うことは、職業人としての意識を高め、看護の質の向上につながる。本事業により、地域の人々によりよい看護実践を還元することに繋がる。

【昨年度からの課題】

- ・ COVID-19 感染症拡大防止対策を講じ、オンライン受講等、受講者が安心して参加できる形式を提案し、「数値目標：過去3年間の利用件数を維持する」の達成
- ・ 本学支援教員と施設の研究指導者との連携を図る
- ・ 専門分野からの研究への助言への希望は、講師派遣事業の「みかん大リクエスト講座」の利用を勧める

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・ 施設単位看護研究支援は過去3年間の平均利用件数 10.3 件を維持する。
- ・ 看護研究発表会支援は過去3年間の平均利用件数 1 件を維持する。

＜研究支援内容＞

1. 施設単位看護研究支援

- 1) 施設で看護研究を行っている看護職者のグループまたは個人に対し、本学の教員が出張して指導を行う。施設からの申し込みは1施設6研究以内とする。
- 2) 基本単位を、3時間×4回の指導とする。

2. 看護研究発表会支援

- ・ 施設等の看護研究発表会における講評・審査を本学の教員が担当する。

<実施計画>

・昨年度からの変更点（昨年度の課題を含む）

1. 施設単位看護研究支援

- 1) 事業案内に、支援の方法（対面支援、またはオンライン支援）の詳細を明記し、状況に応じて、方法を選べるようにした。
- 2) 施設からの3年目以降も同じ支援教官への担当希望の問い合わせに対し、「みかん大リクエスト講座」の利用を勧めた。

2. 看護研究発表会支援

書面での講評の依頼があったため、対応できるよう体制を整えた。

・実施計画

1. 施設単位看護研究支援

令和3年1月：看護研究発表会支援案内とともに、募集案内を県内医療機関等（161施設）に送付し、本学ホームページに募集記事を掲載する。

（締切2月26日）

3月：申込みのあった施設に対し、全教員から支援担当者を募集する。双方の条件が合致したら実施にむけて調整を進める。

令和3年4月：支援の決定した医療機関へ決定通知を送付する。

令和3年3月迄：担当教員が研究指導を行う。

支援終了時、事業参加者にアンケートを実施する。

2. 看護研究発表会支援

令和3年1月：募集案内を施設単位看護研究支援募集に同封するとともに、本学ホームページに募集記事を掲載する。（締切11月末日）

令和3年3～4月：全教員から支援担当者を募集する。

令和3年3月迄：支援の申込みに対し、発表演題について対応可能な教員を派遣する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

「支援の実際」は令和3年度の結果、「受講生アンケート結果」では、昨年度の年報で全結果を掲載できなかった令和2年度分と令和3年度分を記載する。

1. 支援の実際

1) 令和3年度の支援施設の概要

施設単位看護研究支援施設（表1）は10件、その内新規の申し込みが1件あった。また1病院より2支援を利用する施設もあった。一方、看護研究発表会支援は1法人から申し込みがあった。

2) 令和3年度の支援状況

支援開始時期は4月から、終了時期は翌年3月までである。COVID-19拡大防止対策の

ため、施設単位看護研究支援にて対面での支援が難しい場合は、オンラインまたはメールでの研究支援も行った。看護研究発表会支援では、1法人より18題の書面による講評の依頼があった。

表 1 令和3年度 施設単位看護研究支援施設一覧

	施設名	担当教員
1	藤田医科大学 七栗記念病院	前田 貴彦
2	県立志摩病院	林 辰弥
3	伊勢赤十字病院①(継続)	上田 貴子
4	伊勢赤十字病院②(新規)	玉田 章
5	県立総合医療センター	宮崎 つた子
6	榊原温泉病院	長谷川 智之
7	武内病院	川島 珠実
8	四日市羽津医療センター	小松 美砂
9	鈴鹿病院	灘波 浩子
10	松阪中央総合病院	関根 由紀

2. 受講生アンケート結果

1) 施設単位看護研究支援

①令和2年度の結果

アンケート回収数は9施設78件であった。受講者毎に配布した施設と、研究グループに1つのアンケートを配布した施設が混在したため、正確な回収率は算出できなかった。

参考 **表 2 令和2年度 施設単位看護研究支援施設一覧**

	施設名	担当教員
1	県立総合医療センター	大川 明子
2	藤田医科大学七栗記念病院	前田 貴彦
3	武内病院	川島 珠実
4	独立行政法人 国立病院機構 鈴鹿病院	宮崎 つた子
5	榊原温泉病院	中西 貴美子
6	県立志摩病院	玉田 章
7	伊勢赤十字病院①(新規)	上田 貴子
8	伊勢赤十字病院②(継続)	大平 肇子
9	四日市羽津医療センター	長谷川 智之

令和2年度施設単位看護研究支援の満足度は図1に示す。「とてもよかった」「よかった」が98.7%を占めており、前年度より3.2ポイント上昇した。その理由は「研究を行うにあたって、どのようなデータを集積し、どのような方向性で進めていけばよいか、わからない状態だったが、様々なアドバイスをいただき、データの集積、方向性ともに自信をもつ

て研究に取り組むことができるようになった」「研究者にあわせた指導をしていただき、研究について理解を深め進めていけることができたと思う」と、好評であった。また、COVID-19 拡大防止対策のため、オンラインでの支援を行ったことについては「直接会って指導いただいているようにすすめられていたので、リモートでもすごく良かった」といった意見の一方、「コロナ禍であったこともあり、指導していただく時間を調整することが容易ではなかった」「画面も見にくく、画面を見ながら話し合いに、時間の配分が忙しすぎて、録音・録画の機能があれば・・・と思った」等の意見もあった。要望では「回数を多くしていただけるともっと嬉しい」の意見が聞かれた。

一方、「あまりよくなかった」を選択した者のその理由は、「具体的な方向性と質的研究のカテゴリ分けを詳しく指導してほしい」といったより専門的な支援への希望があった。

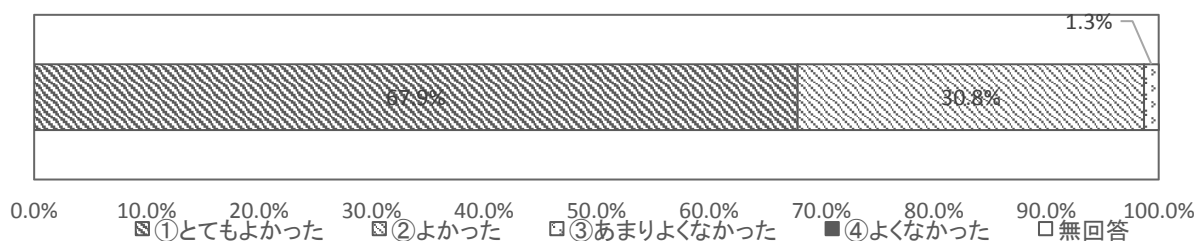


図1 令和2年度施設単位看護研究支援の満足度

②令和3年度の結果

アンケート回収数は10施設52件であった。回収率55.3%。

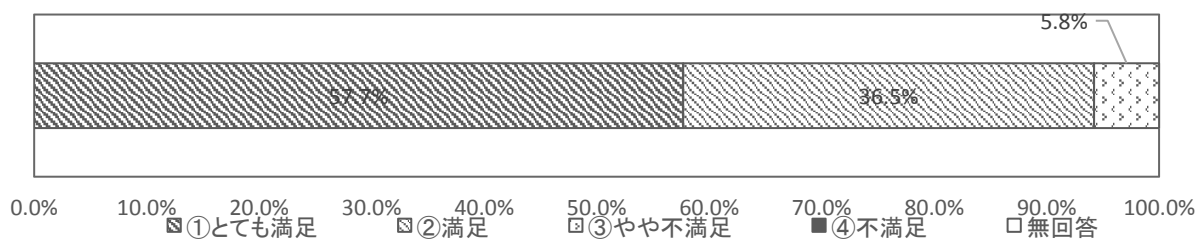


図2 令和3年度施設単位看護研究支援の満足度

令和3年度施設単位看護研究支援の満足度は図2に示す。「とても満足」「満足」が94.2%を占めており、前年度より4.5ポイント下降したがその満足度は依然高い。その理由は「わからない事について丁寧指導してもらった」「私たち現場のちょっとした疑問も看護研究になるんだと、分かりやすく指導してもらった。不安いっぱいだったが、途中から楽しさも感じる事ができた。」「質問しやすい雰囲気があり、先生もこちらの理解度を確認して丁寧にご指導してもらった。」と記載されていた。一方、「やや不満足」を選択した者のその

理由は、「指導の内容が異なり戸惑いがあった。」「方向付けだけでなく、もう少し具体的な指導も欲しかった」であった。また「直接ご指導を受ける機会がなかったため」といったコロナ禍の影響と思われる記載もあった。また本事業への意見では、「4回の指導となっているが、足りないように感じる。」「看護研究について分からないことが多いため、基礎的な講義などがあるといいなあと思った。」等の記載もあった。

2) 看護研究発表会支援

- ①令和2年度の結果 実施がなかった。
- ②令和3年度の結果 利用法人の要望に応じ、書面講評を事業化し、好評を得た。

<評価>

「数値目標：施設単位看護研究支援は過去3年間の平均件数10.3件を維持する」では、今年度新規で支援を利用する病院が増え、目標を達成できた。また、「数値目標：看護研究発表会支援は過去3年間の平均利用件数1件を維持する」でも目標を達成できた。さらに、オンラインまたはメールでの研究支援に加え、看護研究発表会支援の書面講評の事業化できた。

施設単位看護研究支援の満足度は、コロナ禍にも関わらず、令和2年度98.7%、令和3年度94.2%と高く、研究支援施設の担当者および支援教員が状況に合わせ、丁寧に対応した結果と評価できる。令和2年度のオンラインでの支援での問題については、受講者の受講環境に影響されるため、事前に高速インターネット回線につながったパソコン・タブレットの用意等の案内を令和3年度より行い、以後問題は起きていない。また看護研究発表会支援では、利用施設からコロナ禍にも関わらず、研究発表に対し講評を得られたことは好評であった。

以上より、「施設単位看護研究支援」では看護研究のプロセスに沿った支援、「看護研究発表会支援」では講評・審査によって、県内医療機関等における看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことで「職業人としての意識」および「看護の質」の向上に繋がっていると評価できる。一方、「施設単位看護研究支援」での「本学支援教員と施設の研究指導者との支援方針が違うことへの戸惑い」へは、本学支援教員と施設の研究指導者との連携を図ること、「支援回数の増加」や「より専門的な支援」の要望に関しては、講師派遣事業の「みかん大リクエスト講座」と組み合わせた活用を、引き続き勧めていきたい。また、研究の基礎知識に自信のないスタッフの方へは、本学の看護研究SEEDやハウツー看護研究・看護研究エッセンスを勧めていただくよう案内をしたい。

Ⅲ. 今後の課題

- ・本学支援教員と施設の研究指導者との連携を図る
- ・「支援回数の増加」や「より専門的な支援」への希望は、講師派遣事業の「みかん大リクエスト講座」の利用を勧める
- ・研究の基礎知識に自信のないスタッフの方へは、本学の看護研究SEEDやハウツー看護研究・看護研究エッセンスを勧める

3. 公開講座

3. 公開講座

【事業要旨】

広く県民を対象としたテーマの公開講座等を定期的実施する。

【地域貢献のポイント】

- ・ 県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・ 県民の学習ニーズの把握に努め、本学が有する資源を活かした生涯学習等を行う。

【昨年度からの課題】

昨年度は、新型コロナウイルス感染防止策として、来場による一般参加者 50 名限定、オンライン受講施設 30 施設限定で年 1 回の開催となったが、今年度は、新型コロナウイルスの感染状況に配慮しつつ、開催時期、回数、方法等の見直しや工夫に取り組み、公開講座を開催する。

I. 活動計画

< 数値目標 >

- ・ 参加者数の目標値

1 回の開催につき、来場者、オンライン受講者合わせて、100 人以上

< 実施計画 >

- ・ 昨年度からの変更点

令和元年度までの開催回数に戻し、年 3 回の開催とする。また、新型コロナウイルスの感染防止策を講じつつ、来場者を増やす。昨年度、オンライン受講は、施設対象であったが、各回の講座のテーマとニーズに合わせて、その対象者や方法を決定する。

- ・ 実施計画

1. 案内パンフレットを作成し、県内各所に送付するとともに本学ホームページに掲載して周知啓発を行う。
2. 申込定員は、新型コロナウイルスの感染状況をふまえて決定する。定員になり次第申込受付を終了するが、定員を超える申し込みがあった場合は、キャンセル待ちを希望する人へ連絡をする。
3. 新型コロナウイルス感染防止対策として、検温・手指消毒、参加者間の距離の確保、会場内の換気を行なう。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 開催回数

令和 3 年度は 3 回の公開講座を開催した。(実施の詳細は後半に記載)

2. 参加者数

来場による参加者は、各回とも定員を 100 名とした。第 1 回の事前申し込みは 72 名であったが、前日、当日キャンセルがあり、実際の参加者は 50 名であった。第 2 回、第 3 回は、100 名を超える申し込みがあったため、キャンセルを加味し、それ

ぞれ 131 名、117 名の事前申し込みを受け付けた。各回ともオンライン受講を併設し、来場とオンライン受講合わせて、第 1 回 79 名、第 2 回 249 名、第 3 回 204 名であった。(参加者の内訳は実施の詳細に記載)

3. 参加者の背景

参加者の年齢は、70 歳代が最も多く、42.0%、次いで 60 歳代は 22.6%、80 歳代は 16.5% であり、60 歳以上の参加者が 8 割を超えていた。参加者のうち、医療・福祉・保健関係者は、24.9% であり、一般の方が 7 割を超えた。公開講座を知るきっかけは、「大学からの案内」が最も多く、次いで、「チラシ・ポスター」、「友人・知人の案内」であった。

4. 講座の満足度

講座の内容について、「とてもよかった」が 47.0%、「よかった」が 41.7% であり、「あまりよくなかった」が 1.4%、「よくなかった」が 0.43%、「無回答」が 4.3% であった。

講座についての意見や感想では、第 1 回においては、「毎日のテレビや新聞では得られない知識を教わり有意義であった」、「感染症を概観することで新型コロナウイルスに対応する心構えができた」、第 2 回においては、「運転行為は思った以上に複雑なものだと驚き、大変参考になった」「1 時間とは思えない情報量、ありがたかった」、第 3 回においては、「スポーツを通じて子どもとの接し方について学びました」「いつも挑戦する気持ちをもって、心が折れた時も自信を持ち、人を信頼して人生を楽しみたい」等の声をいただいた。

第 2 回においては、急遽、講師の都合によりオンラインによる講演へと変更となり、ホームページで周知したが、知らずに受講された方もあったため、アンケートには、リモートの講演による疲労や音声の聞き取りにくさ、画面の見え辛さといった不満の声がみられた。

5. 今後希望する公開講座のテーマ

今後、希望するテーマは、「高齢者と健康」が最も多く 122 名、次いで、「心の健康」が 107 名、「認知症」が 97 名、「生活習慣病」が 66 名、「在宅看護・介護」が 65 名の順であった。

< 評価 >

参加者数について、第 1 回目は目標数の 100 名に満たなかったが、第 2 回目、第 3 回目は、目標値の 2 倍を超え、今年度の参加者総数は 532 名であった。また、講座の内容について、8 割以上の参加者より肯定的な評価が得られた。

コロナ禍においても、参加者の 6 割以上を占める高齢者世代のニーズに応じ、一般参加者には対面で参集いただき、同時にオンラインで開催することによって、より多くの県民の健康に関する知識の向上に寄与できたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

- ・次年度も、新型コロナウイルスの感染状況に配慮し、感染防止対策を講じつつ、来場とオンラインの併設により、より多くの県民の参加と満足の得られる講座を開催する。
- ・希望する公開講座のテーマで上位の内容を、今後のテーマ・講師依頼の参考とし、県

民のニーズに沿った講座を開催する。

・講師には来場による講演を依頼するが、急なオンラインによる講演への変更にも、県民の理解が得られるように、案内チラシ・ポスターには、オンライン講演に変更となる可能性について明記する。

公開講座実施の詳細

1. 第1回公開講座

講演：食中毒・感染症に対する備えはできていますか？

講師：山崎 伸二 先生

(大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 学長補佐・教授)

日時：令和3年6月26日(土) 13時10分~14時40分

場所：①三重県立看護大学 講義棟1階 大講義室・中講義室1
②オンライン

参加人数：79名

内訳) 来場者…一般50名、報道4名、教職員19名

オンライン…教職員6名

主催：三重県立看護大学

後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市



2. 第2回公開講座

講演：認知障害と自動車の運転(オンラインによる講演)

講師：渡邊 修 先生

(東京慈恵会医科大学リハビリテーション医学講座 教授)

(東京慈恵会医科大学附属第三病院リハビリテーション科 診療部長)

日時：令和3年10月30日(土) 13時10分~14時40分

場所：①三重県立看護大学 講義棟1階 大講義室・中講義室1
②オンライン

参加人数：249名

内訳) 来場…一般102名、報道1名、教職員19名

オンライン…学生122名、教職員5名

主催：三重県立看護大学
共催：産業保健人間工学会第26回大会、日本人間工学会東海支部2021年研究大会
後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市



3. 第3回公開講座

講演：『楽しむ』原点から学んだ指導
講師：井村 久美子（株式会社 イムラアスリートアカデミー コーチ）
日時：令和4年1月8日（土）13時10分～14時40分
場所：①三重県立看護大学 講堂
②オンライン

参加人数：204名

内訳）来場…一般90名、報道3名、教職員16名

オンライン…卒業生24名、学生・教職員71名

主催：三重県立看護大学
共催：公益財団法人三重県スポーツ協会、三重県立看護大学同窓会
後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市



（担当：長谷川明子）

VI. 連携

1. 連携協力協定
2. 県内病院等看護管理者意見交換会
3. 人事交流教員支援

1. 連携協力協定（医療機関・市町）

1) 連携協力協定（医療機関）

目的：本学と医療機関が相互に連携・協力関係を構築することで、臨床現場における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

表 1. 連携協力協定病院（令和 4 年 3 月 31 日現在）

	医療機関名	協定締結日
1	県立こころの医療センター	平成 25 年 2 月
2	松阪市民病院	平成 26 年 3 月
3	済生会松阪総合病院	平成 26 年 3 月
4	厚生連松阪中央総合病院	平成 26 年 5 月
5	県立総合医療センター	平成 26 年 6 月
6	伊勢赤十字病院	平成 26 年 8 月
7	国立三重病院	平成 27 年 1 月
8	県立一志病院	平成 27 年 11 月
9	厚生連鈴鹿中央総合病院	平成 29 年 4 月
10	市立伊勢総合病院	平成 30 年 3 月
11	岡波総合病院	平成 31 年 3 月
12	伊賀市立上野総合市民病院	令和 2 年 8 月

2) 連携協力協定（市町）

目的：本学と市町が相互に連携・協力関係を構築することで、臨地における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

表 2. 連携協力協定市町（令和 4 年 3 月 31 日現在）

	市町名	協定締結日
1	名張市	令和 3 年 3 月
2	津市	令和 3 年 7 月



（担当：星野郁子）

2. 県内病院等看護管理者意見交換会

担当者：地域交流センター委員

【事業要旨】

県内病院等の看護管理者を対象に、本学の取組について、理解と協力を得て連携を深めるとともに、地域に根差した看護の教育・研究機関である本学の役割を示し、地域の医療機関のニーズ把握を図るため、本学学長との意見交換会を実施する。

【地域貢献のポイント】

県内の病院等看護管理者の看護管理実践に有用な情報提供、意見交換を行い、各施設における看護実践・看護教育・看護研究の質向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

意見交換を円滑に行うため、意見交換のテーマを案内送付時に周知し、事前に各施設で考えをまとめたうえで参加できるようにする。

I. 活動計画

＜数値目標＞

COVID-19による医療機関の状況をふまえ、過去3年間の看護管理者の平均出席者数（H30年度36名、R1年度36名、R2年度30名）の半数を超える。

＜実施計画＞

1. 昨年度からの変更点

- ・昨年度に引き続き、COVID-19の状況を鑑み、看護管理者が出席しやすい方法、時期・時間を十分検討し、開催する。
- ・昨年度のオンライン開催における課題として、「意見交換」の時間の確保が挙がっており、今年度は「意見交換」の時間を設ける。

2. 対象者

県内病院等の看護管理者

3. 開催日時

令和3年11月2日（火）13:30～16:00

4. 会場

三重県立看護大学 大会議室よりオンライン配信による開催

5. 内容

（1）行政からの情報提供

「三重県における新型コロナウイルス感染症の現状と行政における対応」

三重県医療保健部 医療政策総括監 杉本 匡史

（2）学長による講話

「新型コロナウイルス感染症が看護基礎教育にもたらしたもの」学長 菱沼 典子

(3) 本学からの話題提供と意見交換

- ①「新型コロナウイルス感染症と看護職者のメンタルヘルスケア」教授 小池 敦
質疑応答
- ②「コロナ時代の新人看護職員研修」教授 中西 貴美子
意見交換

(4) まとめ

II. 活動の結果と評価

<結果>

当初、9月9日に看護管理者に参集いただき、対面での会議を予定して案内を行ないましたが、8月からCOVID-19の急激な感染拡大がみられたため、11月に延期したうえで、オンラインによる開催となった。

1. 出席者の概要について

出席者は48名で、看護管理者30名、三重県医療保健部より2名、学内教職員16名であった。看護管理者の医療圏別内訳は、北勢10名、中勢10名、南勢6名、伊賀2名、東紀州2名、であった。また、施設別内訳は、病院29名、訪問看護ステーション1名、であった。



2. 出席者によるアンケート結果について

開催後、看護管理者にMicrosoft Formsによるアンケートを実施し、回収率は83.3%であった。アンケート結果は図1のとおり、各項目に関して「とても満足」、「満足」、「やや不満」、「不満」の4段階で評価した。

本学(行政・学長・教員)からの話題提供については、いずれも9割以上の回答者が「とても満足」、「満足」と回答した。行政からの情報提供については、「三重県内の第5波の感染状況や医療体制、また次の感染拡大に備えた今後の取り組みなどを把握することができた。」等の感想があった。また、学長からの話題提供について、「臨床現場においても、今までの当たり前から今の時代に合ったものへとイノベーションしていく必要性を感じた。」、「感染症などで環境に変化があっても、学生が臨地実習を経て看護師として働くことができるような体制を作ることの重要性を感じる。」等の感想がみられた。

本学からの話題提供と意見交換については、「医療従事者のメンタルケアについて組織でサポートできる体制作りが必要であると理解できた。」「世代により対応が違うことを、新人を迎える側が理解して、批判するだけではなく、心理的安全性を作れるよう変化することが重要であると感じた。」等の感想があった。一方で、意見交換については、「とても満足」が5名(20%)、「満足」が16名(64%)、「やや不満足」、「不満足」が4名(16%)であり、「他の施設の取り組みが少しわかったが、時間が短かったので十分ではなかった。」等、時間不足を指摘する意見が多かった。意見交換の方法について、オンラインでのグループワークは初めての試みであったが、意見交換以前のプログラムの時間延長により、時間を予定より20分短縮し15分間しか確保することができなかった。会議全般の感想においても、「他施設と共有、話し合いの場が必要と感じている。」「もう少し他病院の取り組みなど聞きたかった。」「対面の方が顔の見える関係が作れ、もっと話ができると思う。」など、意見交換の充実を期待する声が聞かれた。

また、オンライン開催については、すべての回答者が「とても満足」、「満足」回答し、「リスクは避けるべきであり、オンラインでの会議が日常ともなってきたので満足している。」「オンラインの研修であっても対面の意見交換会と同様に意義があった。」等の感想が得られ、会議全般の満足度についても、23名(92%)が「とても満足」、「満足」と回答した。

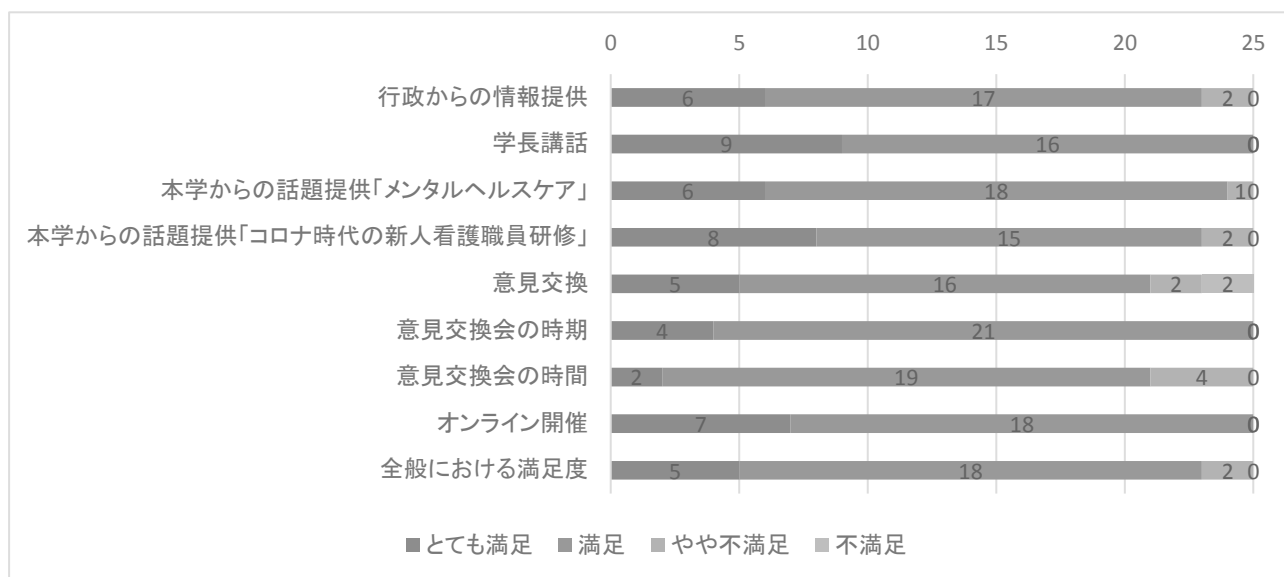


図 1. 出席者によるアンケートの結果

< 評価 >

今年度も、医療現場は COVID-19 による影響で多忙を極める中、30名の看護管理者に出席いただき、数値目標：出席者17名を大きく上回り、昨年同様オンラインによる開催により、COVID-19の感染対策、業務との両立や時間的負担の軽減というメリットがあったのではないかと考える。

出席者のアンケートより、直近の COVID-19 の感染状況と医療体制から今後の保健・医療提供体制の整備についての知見を広げていただき、また、コロナ禍の看護職者のメンタルヘルスケアや新人看護職員の教育についても、実践に活かせる内容として理解を深めていただけたのではないかと考える。このことから、出席者の看護管理実践に有用な情報の提

供ができたのではないかと考える。一方で、意見交換については、ニーズは高いものの十分な時間が確保できなかったことから、本会が県内の看護管理者同士の「意見交換」の場として期待されていることをふまえ、今後は意見交換の機会を十分確保する必要がある。

Ⅲ.今後の課題

- ・次年度も COVID-19 の影響は続くことが予測されることから、今年度のアンケート結果、を参考に、看護管理者が出席しやすい方法、時期・時間を十分検討し、開催する。
- ・次年度は、「意見交換」の機会を十分確保できるよう意見交換の方法や時間を検討する。オンラインによる開催となる場合は、特に、意見交換とその他の内容の時間配分やプログラムの構成についても検討する。

(担当：長谷川明子)

3. 人事交流教員支援

担当者：永見桂子、長谷川明子

【事業要旨】

本事業は、人事交流教員が1年間本学助手として教育、研究、大学経営および地域貢献を担うにあたり、新たな環境に順応し目標達成できるよう相談的役割を担う。

【地域貢献のポイント】

県内の病院より人事交流として派遣された看護職が、本学における教育や研究活動へのモチベーションを維持し、臨床での実践活動に反映することができる。

I. 活動計画

＜実施計画＞

1. 定期的なミーティング

人事交流教員の日ごろの活動を振り返り、気づきや学び、悩みごとなどを共有する。できるだけリラックスした環境で、時にはランチミーティングやティーミーティングとしてリフレッシュをはかる。2か月に1回程度とするが、状況をみて回数を増減する。

2. 個別相談

随時メールによる相談を行う。支援側よりメールを送り、相談しやすい環境をつくる。ミーティングの内容やメールでのやりとりから、必要時は別途面談をする機会を作る。

3. その他の対応

- ・相談内容によって必要な場合は、本人の意向を尊重しながら、適所へ報告する。
- ・定期的なミーティングの実施日程については、配属先の領域長に情報提供する。

II. 活動の結果と評価

人事交流教員の授業や実習等の業務上の都合を考慮しつつ、下記の日程でミーティング等を行った。人事交流教員1名と地域交流センター配属の特任教員1名が参加し、COVID-19の感染防止対策を十分にとりながら、毎回1時間程度で開催した。内容は、各時期における教育や研究、看護職としてのキャリア等について自由に語り合い、気づきや学び、悩み事を共有した。

- ・5月「歓迎ランチミーティング」：地域交流センター教職員とともに
- ・7月「ティーミーティング」：授業や学内実習、研究等について
- ・11月「ランチミーティング」：領域別実習や看護職としてのキャリアについて
- ・1月「リフレッシュ！ミーティング」：実習・研究の状況、今後の課題について
- ・3月「送別ランチミーティング」：1年間の体験の振り返りと次年度への抱負

本事業により、人事交流教員が日常の職務から離れ、看護や教育、研究についてリラックスして語ることにより、心身のリフレッシュにつながったのではないかと考える。

III. 今後の課題

次年度も、対象となる人事交流教員の状況に合わせて回数、方法を検討し実施する。

VII. その他

1. 情報発信・広報活動

1. 情報発信・広報活動

令和3年度の地域交流センター事業に関する情報発信・広報活動は以下のとおりである。

1. 年報発行

地域交流センター年報 令和3年度 VOL.24

令和4年5月に発行予定

(担当：長谷川明子)

2. 報告会開催

令和3年度地域交流センター活動報告会

日時：令和4年3月17日（木）10時40分～11時50分

場所：三重県立看護大学 食堂

発表：ポスター

方法：学内は報告会、学外はHPに記載し公表

第一部

1. 令和3年度地域交流センター活動の総括 1・2

【教員提案事業：今年度終了】

2. 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪！

3. 実践につながるフィジカルアセスメント

4. 認知症看護認定看護師（DCN）セミナー

5. 新任期保健師の災害時における公衆衛生看護活動支援事業

6. 子ども達に「自分のからだ」を伝える事業

7. いきいき体操と健康的な肌づくり

8. よりみちカフェ

9. 災害時に母子の命を守る工夫を考えよう

10. 災害に備えよう

11. 児童英語教え方講座

12. 英米文学作品を読もう

第二部

【受託事業】

13. 母子保健体制構築アドバイザー事業

14. 三重県新人助産師合同研修

15. 助産師（中堅者）研修

16. 三重県認知症対応力向上研修

17. 感染管理実践能力向上事業

18. みえるみんなのナースセンター事業

【卒業生支援事業】

19. 卒業生のきずなプロジェクト

20. 卒業生支援構想プロジェクト

3. ホームページ（地域交流センターおよび大学トピックス欄における情報発信）

- ・地域交流センターの活動の「みえる化」を目的に、積極的に活動記事をアップし、昨年度記事数 91 件に比し、今年度は 91 件を掲載できた。
- ・令和 4 年度のホームページリニューアルに備え、ページの整理を行った。

（担当：川瀬浩子）

4. 県内関係機関へのパンフレット配布

- ・「令和 3 年度 三重県立看護大学地域交流センター 講師派遣のご紹介」
県内医療施設、社会福祉施設、教育施設等へ 1209 件、2000 部を配布

（担当：長谷川明子）

5. イベントへの参加

みえアカデミックセミナー2021 三重県立看護大学公開セミナー

日 時：令和 3 年 7 月 20 日（火） 13 時 30 分～15 時 25 分

場 所：三重県文化会館 レセプションルーム

テーマ：「ストレス社会と上手に付き合うためのヒント」

講 師：教授 小池 敦

参加人数：71 名

主 催：三重県生涯学習センター



公開セミナーの様子

（担当：長谷川明子）

6. みかん大情報ひろば

今年度より、医療・保健に関する専門的な知恵を持つ大学として、県民が「with コロナ」の毎日を少しでも安心して、健やかに暮らすことができるよう新型コロナウイルス感染症に関する正しい情報を、わかりやすく伝えることを目的に、ホームページ上で情報提供を開始した。今年度の掲載は 10 件で、テーマは以下に示す。

- VOL.1 不織布マスクを正しくつけましょう！
- VOL.2 体も心も喜ぶイキイキ体操！
- VOL.3 パルスオキシメーターってなに？
- VOL.4 日記はじめませんか
- VOL.5 今さらですが PCR 検査の PCR ってなに？
- VOL.6 ワクチンを打つと何が安心なの？
- VOL.7 mRNA ワクチン～その 1.mRNA ワクチンってなに？～
- VOL.8 mRNA ワクチン～その 2. 体の中に入ってどうするの？～
- VOL.9 mRNA ワクチン～変異株とワクチン～
- VOL.10 ワクチンって違うの？？

7. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

令和 3 年度の広報を主たる目的としたテレビ・ラジオの放送、新聞掲載を以下に示す。

表 2. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

媒体		内容		月	日
TV	三重テレビ放送	Mie ライブ	第 1 回公開講座	6	26
	ケーブルテレビ CTY	ケーブル News	みえるみんなのナースステーション事業	12	3
	ケーブルテレビ ZTV	じもトピ	第 3 回公開講座	1	10
ラジオ	FMみえ	CampusCube 「キャンパスインフォメーション」	第 3 回公開講座	12	3
新聞	三重タイムズ	第 1 回公開講座		7	23
		第 3 回公開講座		1	21
	中日新聞	第 1 回公開講座		7	2
		第 3 回病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修		10	13
		第 3 回公開講座		1	9
情報誌	いきいき生涯& ゆうゆう学習	第 2 回公開講座・第 3 回公開講座		6 月 (第 35 号)	

(担当：星野郁子)

2. [資料] 各種講座案内と申込書

- 1) みかん大出前講座
- 2) みかん大リクエスト講座
- 3) 看護研究 SEED
- 4) 看護研究エッセンス
- 5) ハウツー看護研究
- 6) 施設単位看護研究支援
- 7) 看護研究発表会支援

1) みかん大出前講座

本学の教員は、自身の教育や研究、社会活動の専門性や成果をもとに、県民の皆さまを対象とした出前講座を行っております。皆さまからのお申し込みにより、集会・学習会などにお伺いして講演を行います。11 ページより掲載の「みかん大出前講座 テーマ一覧」より、ご希望のテーマをお選びいただき、29 ページの「みかん大出前講座」申込書にてお申し込みください。

1. 目的

みかん大出前講座は、より多くの県民の皆さまに、看護や医療、健康などに関心をもっていただくことを目的としています。

2. 対象者

県内に在住・在勤・在学の 5 名以上の参加者が見込めるグループ・団体などが対象です。広く地域の方を受講者として募集することができる場合は、公開講座としての開催をお願いします（本学ホームページに開催案内を掲載します）。

3. ご留意いただきたいこと

- ・ 各講座の時間は 1 講座 90 分以内となります。
- ・ 講師料は**無料**です。交通費のみご負担いただきます。（請求書は発行しません）
交通費の計算は、申込者様所属の規程に基づき、お願いします。
* 規程がない場合、本学規程で対応いたしますので、お問い合わせください。
* ただし、本学から会場までの距離が 2km 未満の場合は、負担いただく必要はございません。
* 交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いください。
- ・ 施設からの申込件数は、2 件以内とさせていただきます。
- ・ 会場の手配、必要物品（PC・プロジェクター・スクリーン・講義資料の印刷等）の準備、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 公共性の高い保健・医療・福祉関係の方を優先的にご受けし、それ以外の方はご相談に応じます。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。なお、**土・日・祝日や夜間（終了時間が 20 時以降になる場合）**の開催については対応いたしかねますので、ご了承ください。
- ・ 各講座の受付件数には上限があるため、やむを得ずお断りすることがございますのでご了承ください。受付を終了した講座の情報は、本センターホームページに随時掲載いたします
- ・ 講座のビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。

<新型コロナウイルスの感染防止対策について>

- ・ 本講座においては、十分な感染防止対策のもと行っていただくことをお願いしております。
- ・ オンラインによる講座についても、ご相談に応じます。ただし、オンラインで実施できない講座もございます。詳しくは「みかん大出前講座 テーマ一覧」(11ページ～)をご覧ください。
- ・ 感染拡大状況に応じて、お申し込み者さまの判断で、中止またはオンライン講座としていただくことが可能です。その際は、地域交流センターまでご連絡、ご相談ください(場合によっては、オンラインでご対応できない場合もあります)。
- ・ 感染拡大状況により、本学の方針に従い中止させていただくことがあります。

4. お申し込み期間

令和3年度のお申し込みは、令和3年11月30日(火)まで受付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

講座ごとに、開催上限回数になり次第、受付終了となります。

5. テーマ選定～お申し込みの流れについて

前ページに記載してある「3 ご留意いただきたいこと」をよくお読みください。



本冊子「令和2年度 三重県立看護大学 地域交流センター 講師派遣のご紹介」に記載されている「みかん大出前講座」から、ご希望のテーマをお選びください。



〇ページの「みかん大出前講座」申込書にご希望のテーマ名、必要事項等を記載してください。



必要事項を記入した申込書を、FAX または E-mail にて送付し、本センターまで、お申し込みください。

(TEL/FAX : 059-233-5610、E-mail : rc@mcn.ac.jp)

6. お申し込みから実施までの流れ

申込書に記載していただいた希望内容に応じて、本センターにて担当講師と日程を調整します。



日程調整後、本センターから申込者様宛に決定通知書（日時と交通費支払等手続きに関する書面）をお送りします。
（日時の調整がつかず、やむをえずお断りすることがあります。ご了承ください。）



決定通知書を受領後、講座内容の詳細について、申込者様と担当講師との間で直接打ち合わせをしていただきます。

※申込みの前にお問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大出前講座」では、みかん大出前講座一覧が確認でき、申込み多数にて受付を終了した講座に関する情報や、「みかん大出前講座申込書」をダウンロードできます。

※尚、申し込み後 1 か月を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

7. お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

TEL/ FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

ホームページ//三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大出前講座

令和3年度「みかん大出前講座」申込書

三重県立看護大学地域交流センター

申込書記入日 令和3年 月 日

機関・団体名称				分類	医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他()
連絡先	(ふりがな) 担当者名				
	住所	〒		電話	
	FAX		E-mail	※ご記入願います	

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、出前講座決定通知書の送付や出前講座実施に向けての打ち合わせに使用させていただきますものであり、その他の用途に使用することはありません。

出前講座の希望内容	希望日時 第1～3 (土日・ 祝日不可)	① 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ③ 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分		
	希望 会場名		参加予定人数	名
	会場 所在地		参加者の内訳 (例：看護師30名、 保護者30名、高校 2年生30名など)	
	番号/ テーマ名	No. -	テーマ名	
出前講座資料	<input type="checkbox"/> 事前に必要 <input type="checkbox"/> 当日でよい *資料の有無は講座によります。 必要部数の印刷は依頼者側で行っていただきます。		広く地域の方を受講者として募集することができ (本学HPに開催案内を掲載) 可能 不可能 要相談	

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「みかん大出前講座」決定通知書

受付No()

ご依頼いただきました出前講座は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和3年 月 日

決定事項	テーマ番号	No.	テーマ名	
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分		
	講師氏名		講師連絡先	

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/FAX (059) 233-5610 E-mail: rc@mcn.ac.jp

2) みかん大リクエスト講座

本センターでは、看護研究に関する講座や出前講座等を実施しております。それらの講座以外の内容をご希望される場合は、「出前講座にはない〇〇に関する講演をしてほしい」などのご要望に合わせて、講師を派遣いたします。ご要望の際には、30 ページ「みかん大リクエスト講座」申込書にてお申込みください。

なお、「みかん大リクエスト講座」は有料となりますので、あらかじめご了承ください。

1. ご留意いただきたいこと

- ・ 講師料はお問い合わせください。別途交通費もご負担いただきます。
(請求書は、講座が終わりましたら、当センターより送付いたします)
* 本学から会場までの往復に要する交通費をご負担いただきます。
* 交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金(素泊まり料金)を直接宿泊施設にお支払いください。
- ・ 会場の手配、必要物品(PC・プロジェクター・スクリーン・講義資料の印刷等)の準備、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます(有料)。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 公共性の高い保健・医療・福祉関係の方を優先的にご受けし、それ以外の方はご相談に応じます。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。
- ・ 講座のビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。

<新型コロナウイルスの感染防止対策について>

- ・ 本講座においては、十分な感染防止対策のもと行っていただくことをお願いしております。
- ・ オンライン講座についても、ご相談に応じます。
- ・ 感染拡大状況に応じて、お申し込み者さまの判断で、中止またはオンライン講座としていただくことが可能です。その際は、地域交流センターまでご連絡、ご相談ください(場合によっては、オンラインでご対応できない場合もあります)。
- ・ 感染拡大状況により、本学の方針に従い中止させていただく場合があります。

2. お申し込み期間

令和3年度のお申し込みは、令和3年11月30日（火）まで受け付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

お申し込みの前に、講師派遣のテーマ・内容等について、お問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページの「三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大リクエスト講座」では、「みかん大リクエスト講座」申込書をダウンロードできます。

※希望の教員名についてはなるべくご記入いただきますようお願いいたします。

各教員の担当授業科目や研究課題等は、本学ホームページ「三重県立看護大学＞大学案内＞教員一覧＞教員個人名」からご確認ください。

※尚、申し込み後1か月を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

3. お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/ FAX (059) 233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

ホームページ//三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大リクエスト講座

4. 過去2年間にリクエストのあったテーマ

派遣先分類	テーマ
医療機関	新キャリアラダー評価の検討会
	キャリアラダー教育の見直し
	効果的な研修の持ち方を学ぶ
	コーチングの基本
	看護研究
	看護診断
	看護倫理
	高齢者の看取りについて：事例を振り返り考える
	形態機能学を活かした看護実践
	フィジカルアセスメント～呼吸・循環～
	フィジカルアセスメント～呼吸・循環～新人編
	感染看護
行政機関	子どもの家庭福祉
	健康寿命をのばそう—こころの健康
	健康寿命をのばそう—食生活を考え、生活習慣を改善する—
社会福祉関連機関	看護と表裏一体の高齢者虐待について
	感染の予防と対策について
	持ち上げない移乗介助
	家族介護教室—認知症の予防やケアについて学ぼう—
	お薬の服用について
教育機関	学校における感染症の予防と対策
	思春期のこころとからだ
企業等	健康寿命をのばそう！ —食生活を中心に生活習慣を改善する—
	健康寿命をのばそう
	生活習慣でできる熱中症対策
	熱中症 with 新型コロナウイルス—急変時対応も含めて～
	持ち上げない移乗介助

令和3年度 「みかん大リクエスト講座」 申込書

三重県立看護大学地域交流センター

申込書記入日 令和3年 月 日

機関・団体名称		分類	医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他()	
連絡先	(ふりがな) 担当者名			
	住所	〒	電話	
	FAX		E-mail	※ご記入願います

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、本事業決定通知書の送付や本事業実施に向けての打ち合わせに使用させていただきます。また、その他の用途に使用することはありません。

講師派遣の希望内容	希望日時 第1～3	① 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ③ 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分		
	希望 会場名		参加予定人数	名
	会場 所在地		参加者の内訳 (例：看護師30名、 保護者30名、高校 2年生30名など)	
	希望する 教員氏名	テーマ名		
具体的内容 *別紙添付可	*その他ご希望がありましたらご記入ください。			

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「みかん大リクエスト講座」決定通知書 受付No()

ご依頼いただきました事業の担当教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和3年 月 日

決定事項	テーマ名			
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分		
	職名 教員氏名		教員 連絡先	

上記の教員にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/FAX (059) 233-5610 E-mail: rc@mcn.ac.jp

はじめてみませんか？

3) 看護研究SEED



＜目的＞

看護研究の基本的内容に関する講座を通して、研究を進めるための基礎的な方法を身に付けることを支援します。

＜対象＞

- 看護の現場で看護実践を行っている方
- これから看護研究に取り組もうとしている方、もしくは現在取り組んでいる方

＜事業概要＞

例年、遠隔配信研修と集合研修を交互に実施していましたが、新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から、今年度はオンライン研修を実施いたします。
申し込み方法は2通り、個人でオンライン受講する方法と、施設単位（施設の代表PCに配信し、内部の方が集まって受講）でオンライン受講する方法です。

＜費用＞

個人申し込み：全5回受講コース 9,372円（消費税込）
単回受講コース 5,973円（消費税込）
施設単位申し込み：13,200円（消費税込）

申込締切

2021.5.6 (木)

＜受講決定＞

受講決定者および施設には、受講決定通知を送付します。
応募締切日を2週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。

＜申込方法＞

個人申し込みの場合

QRコードを読み込んでいただくと、申し込みフォームに移動します。
必要事項をご記入のうえ、送信してください。



施設単位申し込みの場合

下記のメールアドレスに、件名を「看護研究SEEDの申込」として、必要事項を記載のうえ、お申し込みください。

E-mail : rc@mcn.ac.jp

必要事項：①施設名、②施設住所、
③施設電話番号
④代表者のお名前、⑤受講人数
⑥受講に使用するメールアドレス
(webアドレスに限る)

※記載いただく個人情報は、本事業の運営のみに使用します。なお、本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。

＜お問い合わせ先＞

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬 浩子
TEL：059-233-5610（平日9時～16時）E-mail：rc@mcn.ac.jp

<プログラム>

令和2年度より、従来の「看護研究の基本STEP」研修に、新規テーマ「看護研究における倫理的配慮」と「研究デザインのタイプと選択」を加え、受講者が日常の看護業務の中から疑問を見出し、スムーズに看護研究へ取りくめるよう企画しました。また、看護研究研修の次のステップである「ハウツー看護研究」につながるよう「量的研究（実験・計測）」のテーマも加えました。

回	日程	テーマ	時間	講師
1	5月18日(火)	センター長あいさつ・オリエンテーション	10:20~10:30	センター長
		看護研究の意義と文献の活用	10:30~12:00	菱沼 典子
		研究計画の立て方と書き方	13:00~14:30	大川 明子
2	5月26日(水)	看護研究における倫理的配慮	10:30~12:00	大川 明子
		研究デザインのタイプと選択	13:00~14:30	上田 貴子
3	6月8日(火)	質的研究(インタビュー)	10:30~12:00	関根 由紀
		量的研究(アンケート)	13:00~14:30	関根 由紀
4	6月29日(火)	量的研究(実験・計測)	10:30~12:00	長谷川 智之
		研究論文作成	13:00~14:30	玉田 章
5	7月12日(月)	プレゼンテーション(演習含む)	13:00~15:00	上田 貴子

<受講のご案内> **△ 必ずご確認ください**

1. 高速インターネット回線につながったパソコン、タブレット、スマートフォンをご用意ください。
(当日、回線やパソコンの不具合等により万が一受講ができない場合は、再度ご受講いただくことができませんので、事前にインターネットの回線速度およびパソコン等の動作検証等をお願いします。)
推奨：パソコン(高速インターネット回線に接続しているもの)
マイク・カメラ内蔵型のパソコンまたはパソコンに接続可能なマイク・カメラの準備
2. アプリのダウンロード
Microsoft Teamsアプリを使用されるパソコン(スマートフォン可)にダウンロードしていただきます。
ダウンロードページのURLは以下です。そちらからダウンロードください。
<https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365/microsoft-teams/download-app>
3. 受信希望のメールアドレス(webアドレスに限る)に、視聴URL(Teams会議のURL)と講義資料等を送ります。

★通信にかかる費用は、受講者のご負担となります。

※視聴には大量のデータ(パケット)通信を行うため、契約によっては携帯・通信キャリア各社にて高額な通信料が発生します。また、データ通信量が一定の基準に達した時点で、通信会社での通信速度制限が行われることがあります。

スマートフォンやタブレットで視聴する場合は、必ずWi-Fi環境でのご利用をお願いいたします。

★ご利用の通信環境により配信の遅延が発生する場合があります。ご了承ください。

★視聴URLはご自身のみご利用可能です。他の人と共有したり、SNS・ブログなど一般公開されるインターネット上に掲載したりすることを禁止します。

★オンライン配信講座を録音、録画、写真撮影、ダウンロードして保存することは禁止です。

また、録画、録音、ダウンロードした動画をインターネット上にアップロードすることも禁止します。

★講義で提供された資料・画像・映像等を、スクリーンショットや写真・動画・音声で記録すること、またそれらを再配布する・二次資料として使用するなど、他者に共有・公開すること(SNS含む)は著作権を侵害する行為となりますので、固く禁じます。

開催の様子は本学ホームページ(//三重県立看護大学>地域交流センター>看護研究SEED)をご参照ください。

チャレンジ

4) 看護研究エッセンス



<目的>

看護研究遂行能力を強化する方法を学び、演習型の研修を受講することにより、看護現場での研究実践が充実することを支援します。

<対象>

- 本センターの「看護研究SEED（旧：看護研究の基本ステップ）」もしくは同等の看護研究の基礎知識に関する研修を修了している方
- しばらくぶりに看護研究にチャレンジしようと思っている方

<費用>

1コース（3コマ） 7,106円（消費税込）

<内容>

開催の様子は本学ホームページ（//三重県立看護大学>地域交流センター>看護研究エッセンス）をご参照ください。

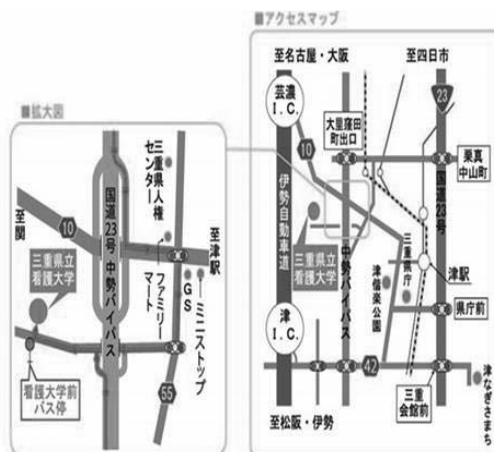
コース	統計解析① （基本編）	統計解析② （基本編）	実験体験会 （環境生理学）
本コースの 対象	<ul style="list-style-type: none"> ・統計手法をフラッシュアップしたい方 ・表計算ソフト（エクセル）を使ったことがある方 		<ul style="list-style-type: none"> ・実験研究に興味のある方
日時	7月3日（土） 10：40～16：10	12月4日（土） 10：40～16：10	7月31日（土） 10：40～16：10
担当者	斎藤 真	斎藤 真	大西 範和
部屋	第2情報処理教室	統計解析①（基本編）と 同内容	人工気候室
持ち物	USBメモリ（未使用のもの）		とくになし
概要	初学者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法について考え方と実際の使い方を学びます。アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講座です。		気温と湿度を制御できる人工気候室で、寒さなどにより起こる皮膚血管収縮反応や体温の変化について調べる実験を体験します。「冷え」などについて一緒に考えてみましょう。実験室のスペースの事情で最大3人で行います。
最小催行人数	1人	1人	1人

<会場・アクセス>

三重県立看護大学
（三重県津市夢が丘1-1-1）



津 駅 西 口	三交バス 「看護大学・夢が丘」線	「看護大学前」下車 徒歩1分
	タクシーで約15分	



※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、今後の状況次第では、やむを得ず講座を中止する場合があります。その場合、本学ホームページにて中止のお知らせをしますので、ご確認をお願いいたします。

<申込方法>

QRコードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。
 必要事項をご記入のうえ、送信してください。
 または、下記申込書に必要事項をご記入のうえ、申込先へメール、
 またはFAXでお申し込みください。
 応募締切日を1週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。



申込締切	統計解析①	統計解析②	実験体験会
	6月18日(金)	11月19日(金)	7月16日(金)

【申込先】※送付状不要

E-mail : rc@mcn.ac.jp FAX : 059-233-5610

看護研究エッセンス 申込書			
ご希望のコース <input checked="" type="checkbox"/> をつけてください。	<input type="checkbox"/> 1.統計解析① 7/3(土)	<input type="checkbox"/> 2.統計解析② 12/4(土)	
	<input type="checkbox"/> 3.実験体験会 7/31(土)		
フリガナ		職業 (例)看護師	
お名前			
所属施設名			
決定通知書の送付先住所	〒		
連絡先 (天候による講座の中止等、急な連絡の際に、 確実にご本人に連絡がつく連絡先をお書きください)	携帯番号		
	Email		
過去もしくは今年度に本センターの「看護研究SEED(旧看護研究の基本ステップ)」を受講したことがありますか? 令和3年度看護研究SEEDを受講頂いた方は、本コースにお申込できます。 ※「ない」方は下記にお答えください。	ある ・ ない 看護研究SEED今年度受講予定 ※いずれかに○をつけてください。		
「ない」方にお聞きします。 今まで研究方法についてどのような研修を受けたことがありますか? 具体的にご記入ください。			

※記載いただく個人情報、本事業の運営のみに使用します。なお、本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。
 ※会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

<お問い合わせ先>

三重県立看護大学 地域交流センター
 TEL : 059-233-5610 (平日9時~16時) E-mail : rc@mcn.ac.jp

研究体験

5) ハウツー看護研究



<目的>

看護研究を実際に行うための具体的な研究方法（データ収集、考察に至る一連の過程）を学び、体験することにより、看護現場での研究実践が充実することを支援します。

<対象>

- 本センターの「看護研究SEED（旧看護研究の基本ステップ）」もしくは同等の看護研究の基礎知識に関する研修を修了している方。
- 原則として、申し込んだコースの全日程に参加できる方。
※ご希望の各コースを受講できます。

<費用>

1コース（7コマ） 8,239円（消費税込）

<内容>

開催の様子は本学ホームページ（//三重県立看護大学>地域交流センター>ハウツー看護研究）をご参照ください。

コース	質的研究コース (インタビュー)	量的研究コース (アンケート)	量的研究コース (実験・計測)
日時	①8月20日(金) 13:00~16:10 ②9月 3日(金) 13:00~16:10 ③9月17日(金) 10:40~16:10	①10月 2日(土) 9:00~12:10 ②10月 2日(土) 13:00~16:10 ③10月16日(土) 9:00~14:30	①11月27日(土) 9:00~12:10 ②11月27日(土) 13:00~16:10 ③12月11日(土) 9:00~14:30
予備日 (天候等 中止の場合)	11月6日(土)		
担当者	浦野 茂・関根由紀	斎藤 真・菅原啓太	斎藤 真・長谷川智之
テーマ	インタビューによる 質的研究を行ってみる	「質問紙の作成と調査の実施」 ー職務満足度について考えをさぐるー	「看護職者の腰痛に関連する 援助時のベッドの高さについて」 ～身近にあるモノを使用し、 明日から使える実験研究！～
第1回	1. 質的研究法の内容と特徴 2. 研究課題を作る 3. 研究デザインを考える 4. インタビューガイドを作る	1. はじめに 2. 調査を行う前に 倫理的配慮を含めた調査研究の注意事項 3. 調査用紙に用いる尺度 4. 調査用紙の作成： フェースシート、単一回答/選択、 複数回答/選択、順位法、数値配分法、 SD法、自由記述 5. 調査開始 6. データの入力・集計	1. 看護研究における実験研究とは 2. 実験研究の紹介 3. 実験を行う前に： 倫理的配慮を含めた実験の注意事項
第2回	1. インタビューを行う 2. トランスクリプトを作る 3. 分析する	1. 集計結果の整理、図式化 2. 統計的解析 3. データの検討 4. 結果の整理と考察への展開	1. 実験の準備： 実験環境、必要な物品、実験手順の確認など 2. 実験開始： 実験協力者への説明と同意 2種類のベッドの高さで看護援助を行った 際の腰部負担の測定 3. データの集計
第3回	1. 分析結果をまとめる 2. 「発見」を作る	・論文の作成： 目的、方法、結果、考察の記述	1. データ分析： 図表の作成、excelを使用した検定 2. 「考察」の検討： 論文の考察について、何を記述すべきか 3. 抄録（学会発表レベル）の作成
担当者からのコメント	質的研究とは、一言で言えば、対象となる人たちの実践や考え方に学ぶことです。シンプルで楽しい作業ですが、だからこそその難しさもあります。そのあたりを一緒に作業しながら学んでいきましょう。	「アンケートを作りたいけど、どうやって作るのだろう」と思っているかもしれません。アンケート作りには、ちょっとしたコツがあります。コツを知り、ゼロから一緒にアンケートを作ってみませんか。皆様のご参加をお待ちしています！	実験研究は、高額な機器を使用しなければいけないというイメージがあるかもしれませんが、本研修ではそのイメージを払拭します。「こんな簡単に実験ができるの？」と参加者全員が思えるような内容ですので、ぜひ気軽にご参加ください！
持ち物		USBメモリ	USBメモリ
最少催行人数	2人	1人	1人

<会場・アクセス>

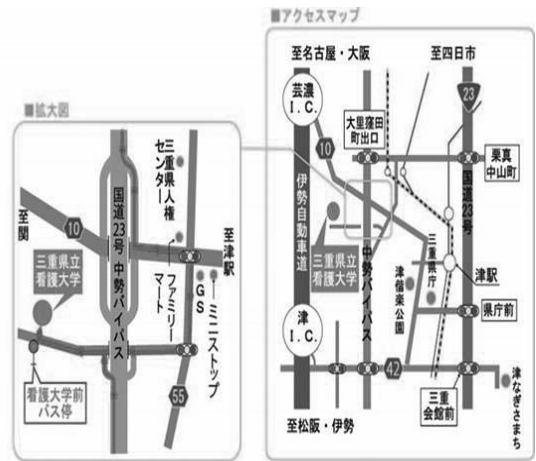
三重県立看護大学
(三重県津市夢が丘1-1-1)



津 駅 西 口	三交バス 「看護大学・夢が丘」線
	タクシーで約15分

「看護大学前」下車
徒歩1分

※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、今後の状況次第では、やむを得ず講座を中止する場合があります。
その場合、本学ホームページにて中止のお知らせをしますので、ご確認をお願いいたします。



<申込方法>

QRコードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。
必要事項をご記入のうえ、送信してください。
または、下記申込書に必要事項をご記入のうえ、申込先へメール、
またはFAXでお申し込みください。
応募締切日を2週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。



申込締切

インタビュー

アンケート

実験・計測

7月20日(火)

9月3日(金)

11月5日(金)

【申込先】※送付状不要 E-mail: rc@mcn.ac.jp FAX: 059-233-5610

ハウツー看護研究 申込書			
ご希望のコース <input checked="" type="checkbox"/> をつけてください。		<input type="checkbox"/> 1.質的研究コース(インタビュー) <input type="checkbox"/> 2.量的研究コース(アンケート) <input type="checkbox"/> 3.量的研究コース(実験・計測)	
フリガナ		職業 (例) 看護師	
お名前			
所属施設名			
決定通知書の送付先住所	〒		
連絡先 (天候による講座の中止等、急な連絡の際に、 確実にご本人に連絡がつく連絡先をお書きください)	携帯番号		
	Email		
過去もしくは今年度に本センターの「看護研究SEED(旧看護研究の基本ステップ)」を受講したことがありますか? 令和3年度看護研究SEEDを受講頂いた方は、本コースにお申込できます。 ※「ない」方は下記にお答えください。		ある ・ ない 看護研究SEED今年度受講予定 ※いずれかに○をつけてください。	
「ない」方にお聞きます。 今まで研究方法についてどのような研修を受けたことがありますか? 具体的にご記入ください。			

※記載いただく個人情報は、本事業の運営のみに使用します。なお、本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。
※会場内の写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

<お問い合わせ先>

三重県立看護大学 地域交流センター

TEL: 059-233-5610 (平日9時~16時) E-mail: rc@mcn.ac.jp

6) 「施設単位看護研究支援」のご案内

■施設単位看護研究支援事業とは

看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とし、看護研究を行う看護職の複数のグループまたは個人に対し、看護研究のプロセスに沿った支援、施設内における研究支援体制構築への支援等を行います。お申込みのあった県内医療機関等に、本学教員がお伺いし、支援します。状況によっては、オンライン支援も可能です。

■目的

三重県内の看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とします。

■研究支援期間

研究支援決定日から令和4年3月31日（木）（最長）まで

■研究支援の方法

1回につき3時間の研究支援（1回当たりの指導件数は、最大6件を目安）×年4回を標準とします。研究支援期間が長期になりますので、計画的に進めていただきますようお願いいたします。支援の方法（対面支援、またはオンライン支援）、および日程は担当教員と直接相談して決めてください。

＜対面支援の場合＞

担当教員が貴施設に出向きますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。

＜オンライン支援の場合＞（Microsoft Teams の場合）

1. 高速インターネット回線につながったパソコン、タブレット、スマートフォンをご用意ください。

推奨：パソコン（高速インターネット回線に接続しているもの）

マイク・カメラ内蔵型のパソコンまたはパソコンに接続可能なマイク・カメラの準備

2. アプリのダウンロード

Microsoft Teams アプリを使用されるパソコン（スマートフォン可）にダウンロードしていただきます。ダウンロードページの URL は以下です。

<https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365/microsoft-teams/download-app>

3. 受信希望のメールアドレス（web アドレスに限る）に、会議 URL（Teams 会議の URL）が送られてきますので、クリックし、参加してください。

■ 支援料金について

- ・講師料および対面の場合の交通費（本学から会場まで）をご負担いただきます。
- ・講師料は、年間4回（1回当たり3時間）の支援を標準として算定した額（12万円（税別）。担当教員の職位に関わらず一定額となります。）となります。
なお、実際の支援時間が、標準支援時間（3時間）を下回った場合でも講師料は減額しませんので、ご承知おき願います。
- ・支援業務に研究発表会に係る審査および講評は含まれませんので、ご注意ください。「看護研究発表会支援」（研究発表会における講評・審査）は、別途案内いたします。

■ ご留意いただきたいこと

- ・各研究は、各自もしくは施設にて主体的に進めていただくこと。
- ・研究を進めるにあたり、基本的な看護研究の研修を修了した方がみえることが望ましい。
- ・担当教員は、特定の領域に所属しておりますので、すべての看護領域に精通している訳ではございません。担当教員の専門領域でない研究に対しては、具体的な内容について対応しかねる場合があります。専門的な研究支援をご希望の場合は、「みかん大リクエスト講座」をご利用ください。
- ・担当教員については、ご希望に添えない場合があります。また、本センターの取り決めにより、3年以上同じ支担当員は継続できませんのでご了承ください。
- ・ビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。

■ お申込み方法

- ・所定の申込用紙により本センターまで、E-mail、又はFAXのいずれかでお申し込みください。申込用紙は、本学ホームページ（三重県立看護大学＞地域交流センター＞看護研究支援＞施設単位看護研究支援）からもダウンロードできます。
- ・申込みの締切期日は、令和3年2月26日（金）とさせていただきます。

■ お申込みから支援終了（料金請求）までの流れ

- ① 申込書に記載のうえ、本センターまでお申し込みください。
- ② 本センターから担当教員決定通知書をお送りします。（4月中旬の送付を目途）
- ③ 貴施設と担当教員との間で支援日程等を調整された後、研究支援開始となります。
- ④ すべての支援終了後、本学より講師料と対面の場合の交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込によりお支払いください。（誠に恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

■ 問い合わせ先・申し込み先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬

TEL/FAX : 059-233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

令和3年度 三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」申込書

申込〆切 : 令和3年 2月 26日 (金)

施設名					
担当者連絡先	住所	〒			
	担当者				
	電話		FAX		E-mail

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、施設単位看護研究支援決定通知書の送付や支援実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

支援を希望する 研究テーマ数	件 (MAX 6 件まで)
研究内容 (各テーマ名をお書きください。 別途、資料添付可)	
*支援希望教員名 (あればご記入ください)	

*支援希望教員については、ご希望に添えない場合があります。また、2年以上同じ教員は継続できませんのでご了承下さい。

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」決定通知書

ご依頼いただきました施設単位看護研究支援について、支援教員を、下記のとおり決定しましたのでお知らせします。

令和 3 年 月 日

決定事項	施設名		
	支援教員名	本学での担当 :	教員名 :
	支援教員連絡先	TEL :	E-mail :

上記の支援教員にご連絡のうえ、日程、内容、方法等、詳細な打ち合わせを行ってください。
 ご不明な点がありましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター 担当 : 川瀬

TEL/FAX (059)233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

7) 令和3年度「看護研究発表会支援」のご案内

■ 看護研究発表会支援とは

看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とした支援で、看護研究発表会における講評・審査を担当します。お申込みのあった県内医療機関等に、本学教員がお伺いし、支援します。状況によっては、オンライン支援も可能です。

■ 目的

三重県内の看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とします。

■ 支援対象

5題以上の研究発表がある看護研究発表会

■ 看護研究発表会支援の方法

<対面支援の場合>

担当教員が貴施設に出向きますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。支援の日程は、担当教員と直接相談して決めてください。

<オンライン支援の場合> (Microsoft Teams の場合)

1. 高速インターネット回線につながったパソコン、タブレット、スマートフォンをご用意ください。
推奨：パソコン(高速インターネット回線に接続しているもの)
マイク・カメラ内蔵型のパソコンまたはパソコンに接続可能なマイク・カメラの準備
2. アプリのダウンロード
Microsoft Teams アプリを使用されるパソコン (スマートフォン可) にダウンロードしていただきます。ダウンロードページの URL は以下です。そこからダウンロードください。
<https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365/microsoft-teams/download-app>
3. 支援の日程は、担当教員と直接相談して決めてください。
受信希望のメールアドレス (web アドレスに限る) に、会議 URL (Teams 会議の URL) が送られますので、クリックし、参加してください。

■ 支援料金について

- ・講師料および対面の場合の交通費 (本学から発表会会場まで) をご負担いただきます。
- ・現地宿泊が必要となる場合はお申込者側で宿泊施設を予約ください。なお宿泊料金 (素泊まり料金) は、直接宿泊施設にお支払いください。

■ ご留意いただきたいこと

- ・会場の手配、必要物品の準備、参加者への開催周知はお申込者側でお願いします。
なお、本学を会場としてお貸しすることもできます (有料)。
- ・ビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。

■ 申し込み方法

- ・ 所定の申込用紙により本センターまで、E-mail、又はFAXのいずれかでお申し込みください。
申込用紙は、本学ホームページ（三重県立看護大学＞地域交流センター＞看護研究支援＞看護研究発表会支援）からもダウンロードできます。
- ・ 申込みの締切期日は、令和3年11月30日（火）です。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

■ 申し込みから支援終了（料金請求）までの流れ

- ① 申込書に記載のうえ、本センターまでお申し込みください。
- ② 担当教員を決定し、本センターから決定通知書をお送りします。
- ③ 詳細については、担当教員と直接打ち合わせを行ってください（参加人数など、お申し込み内容に大きな変更があった場合は、本センターにもご連絡ください）。
- ④ 研究抄録を、開催1週間前までに担当教員にお送りください。
- ⑤ 発表会終了後に、本学より講師料と交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込によりお支払ください。（誠に恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

■ 問い合わせ先・申し込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地の1

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬

TEL/FAX : 059-233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

令和3年度 三重県立看護大学地域交流センター「看護研究発表会支援」申込書

申込書記入日 令和3年 月 日

所属機関の名称					
連絡先	所在地	〒			
	担当者氏名				
	電話		FAX		E-mail

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、看護研究発表会支援決定通知書の送付や看護研究発表会実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

開催希望日時 (第1、第2)	① 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分
発表会の名称	
開催会場名	参加予定人数 人
会場所在地	会場電話番号
予定発表演題数	□演 () 題、示説 () 題 方法：対面支援・オンライン支援 (ご希望の方法に○を記載ください)
ご希望される 教員名	*その他希望がありましたらご記入下さい。
発表演題の分野 (各領域や質や量的 研究など) *別途資料添付可	

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「看護研究発表会支援」決定通知書

ご依頼いただきました看護研究発表会の担当教員について、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和3年 月 日

決定事項	発表会の名称			
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分		
	職名・講師氏名		講師連絡先	

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。

編集後記

令和3年度三重県立看護大学地域交流センター年報が完成しました。ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

今年度は感染予防行動をおこないながら、本学全教員が地域の皆様とともに、多くの事業に取り組んでまいりました。当センターの講師派遣事業は、平成21年度に始まり13年が経過しました。おかげをもちまして、県民の皆様に本事業が周知されてまいりました。事業開始当初は「出前授業」「公開講座講師派遣」「その他の講師派遣」の3事業、平成27年度からは「出前講座」「その他の講師派遣」事業の2事業を展開しており、令和2年度からは「みかん大出前講座」「みかん大リクエスト講座」という名前に変更しました。皆様からの派遣申し込みも年々増加しており、今年度もコロナ禍ではありましたが2事業で65件実施し、教育・研究の成果を地域に還元できていると感じております。

一方「教員提案事業」では、各教員から提案された様々な事業を関係機関と協働し、地域の皆様との交流をとおして進めることができました。また、看護職を対象とした「看護研究支援事業」「受託事業」など、教育支援事業も充実しております。

これらの事業を進めるにあたり関係各位、地域の皆様に多大なご理解・ご協力いただきましたことをここにあらためて感謝申し上げます。

今年度も、各事業内容を「教員提案事業」「卒業生支援事業」「受託事業」「リカレント教育」「地域交流センター企画事業」「連携」の6事業にまとめ、資料と共に本年報に収録いたしました。

本年報を通じて、多くの皆様に当地域交流センターの活動と地域貢献について、さらなるご理解・ご協力をいただければ幸いです。

地域交流センター 副センター長 大川明子

三重県立看護大学
地域交流センター

令和3年度

Vol.24

編集・発行	三重県立看護大学地域交流センター
住 所	〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地1
発行年月	令和4年5月

*本書の著作権は公立大学法人三重県立看護大学が保有します。